
実録アルコール依存症『嵐が過ぎるのを待て』完全版

織山大地

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

実録アルコール依存症『嵐が過ぎるのを待て』 完全版

【Nコード】

N5809E

【作者名】

織山大地

【あらすじ】

『——人間はこんなにも弱くて、激しくて、泣きたいくらい温かい生き物なんだ』一人のアルコール依存症患者が入院中に綴った手記をまとめた、社会派実録小説。その幼少から感動の社会復帰までを描く。【完結】

序章 望まれた子

序章 望まれた子

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ふいに大きく足元が揺れた。

好二はとっさに、真逆へ動いた蛍光灯を凝視した。

……しばらく、いやほんの数秒、身体を強張らせた好二。

その五感は、揺れが静まるより少しだけ早く、分娩室へと向けられた。

一点に集中された静寂。

そして、それは弾けた。

「んぎゃあ、つぎゃああー！」

瞬間、好二は思わず妻の名を叫んでいた。

オレもついに父親か……！

正直、子どもは苦手な好二だったが、そんな事はもう、どうでも良かった。

「おめでとうございます、杉原さん。とっても元気な男のお子さんですよ！」

その声でフツと我に返る。

おお我が子よ、こんな真っ赤な顔して！

「ありがとうございます、先生！……妙子、妙子！よく頑張ったな！ ホントに……」

後は何を言っているのか好二自身、分からなかった。
ただ、溢れゆく涙。

そして、それがどうしようもなく温かく、心地良いのだ。

「見て、あなた……、私達の赤ちゃんよ？」

もうケンカは止めような、妙子。

好二はこの春卒業したばかりの、駆け出しの司法書士であった。
職業柄、人前で感情を表わにする事は良しとされない。

だがこんなにも柔らかい眼差しで、我が子を慈しむ、妻の横顔。
そんな素っぴんの妻が、好二にはとても神々しく見えた。

「ようこそ、杉原家へ」
好二は小さく呟いた。

1975年5月28日。
地震があつた日。

第一章 三つ子の魂、百まで 好二と妙子（前書き）

【あらすじ】く幼稚園時代

物静かな少年、和道は戸惑っていた。

少々荒っぽい父と愛情深い母。

大好きな両親を悲しませないように、和道は自分なりの処世術を身に付けていく。

第一章 三つ子の魂、百まで 好二と妙子

第一章 三つ子の魂、百まで

好二と妙子

「妙子、和道連れてちよつと土手まで行ってくるからよオ……」

「あ、はい、お父さん。いつもありがとう」

好二と妙子は出産後、妙子の両親、吉田幸造と伸子が経営するアパートで暮らし始めた。

はつきり言って交通の便も悪いが、好二は相変わらず仕事が忙しく、妙子の育児の負担を考えると贅沢も言えない。

幸造と伸子も初孫の和道が可愛かったのだから、よくこうして連れ出しては遊んでくれていた。

「今日も好二君、遅いのかい？」

「仕方ないわ、新米だもん。使いつぱしりよ」

洗濯物をたたみながら、妙子が言い聞かせるように言う。

「和道の顔はちゃんと見れてるのかい？」

「……大丈夫だつてば。そんな事より、家の鍵、ちゃんと掛けて来た？　最近この辺りでも、空き巣が多いのよ？」

妙子は凶星を突かれて思わず、話題を変えた。

和道もあつという間に三歳。

最初はあまりミルクも飲まず、人見知りの激しい子だったが、今が一番可愛い盛りであろう。

いや、その時その時、いつでも可愛いかったか……。

そして妙子のお腹には、新しい家族が宿っていた。

結婚、出産。毎日が初体験。

……私だつて不安だらけなのに、好二ったら。

もちろん妙子も、好二が家庭を守るために一生懸命、働いてくれているのは分かっていた。

「もうちょっと、家の中の事見てくれないよねえ……。ママ、けっこう頑張ってるよね？」

そうお腹の子に話しかけた妙子はハッと、伸子に聞かれなかったかと辺りを見回した。

ほどなくして向かいの工場の騒音に混じり、幸造と和道の笑い声が聞こえてきた。

どうやら帰ってきたようだ。

「ただいまあ。おじいちゃんと、団地の屋上から飛行機見たよ！」

「あら、良かったねえ、近くで見ると大きいでしょ？」

「うん、大きかった。でもゆつくりだった」

そう言い終わらないうちに、和道は洗面所へと駆けていった。

「お父さん、いつもありがとう」

「なあに、和道が喜ぶからな。今度は朝早くに、カニの体操、見に連れて行くからよオ。なあ、和道」

うん、と奥から柔らかな声が帰ってきた。

その夜。

やはり好二の帰宅は深夜だった。

「あなた、お帰りなさい」

「お、ただいま。和道寝たか？」

「今日は、けっこう遅くまで起きてたんだけどね。どう？ 仕事のほうは」

「やっぱり実務こなさないとね。法律は知ってるだけじゃ、使い物にならないから」

妙子の気持ちを察したのか、じきに楽させてやるからと、ビールでグビツと喉を鳴らした。

実際、好二も積極的に育児に参加したかった。

なにせ、杉原家の長男。

立派な男になつてもらわねば。

こうした気持ちがつい先走って、好二は和道に手をあげることもしばあった。

好二は和道と過ごす時間が限られている分、和道の人見知りとYES、NOはつきりしない態度に、苛立ってしまうのだ。

決して嫌いなわけじゃない。

だが好二からすると、和道はビィビィ泣き過ぎる。オレの子だろ？

和道には自分の跡継ぎとして、堂々たる男になつて欲しかった。

ふと、妙子が顔を覗かせた。

「私、先に寝るわよ？」

「……ああ。おやすみ」

自分でも驚くほど、低い声だった。

第一章 三つ子の魂、百まで 祥太の誕生

第一章 三つ子の魂、百まで

- - - - -
- - - - -
- - - - -

祥太の誕生

- - - - -
- - - - -
- - - - -

最近の和道は心持ち精悍な顔つきになり、幼稚園児がすっかり板についてきたようだ。

好二も仕事が幾分落ち着き、今までの分を取り戻すかのように、家族サービスに努めていた。

というのも、そう、妙子が次男、祥太を出産したからだ。

「ママ……」

「ほら和道、今祥太におっぱいあげてるから、もう少し待ってて」

なんで？

おっぱい二つあるんだから、ボクにも一つ分けてよ。

和道は祥太が産まれてから、戸惑っていた。

……ママもパパも急に祥太、祥太って。
パパなんか、ホントは怖い人なのに。

この頃和道は、後に長く付き合うこととなるピアノを習い始めていた。

叔母の麻衣子がピアノの講師だったので、隣の幸造の家にあるピアノでレッスンしてもらったのである。

だが和道は思った。

……パパとママは、ボクより祥太と遊びたいんだ。

本当は、ママに聞いてもらいたい事があったのだ。

「ねえあなた、聞いてくれる？」

そんなある日、妙子が珍しく愚痴をこぼした。

「和道の幼稚園の保護者会があるんだけど、浜田さんってお母さんがいるのよ。役員とか、自分の思い通りにならないと怒っちゃって大変なのよねえ」

「いるんだよな、そういう人」

好二は、どんな世界にも似たような人がいるもんだと苦笑いした。

ところが和道も、この浜田の息子がとても苦手だった。

もともと人見知りの激しい和道は、幼稚園という初めての社会生活に馴染めずにいる。

話しかけてくれる子とは仲良くできるのだが、そうでない子、特に乱暴な子が苦手であった。

「何とか言えよ、チビ！」

こんな時、和道はいつも声が出せない。

もし何か言い返せたとしても、きっとさらに攻撃を受けるに決まってる。

……こんな時、どうしたらいいの？

頭が真っ白になってしまう。

和道はそれが一番怖かった。

出来るだけ平静を装い、嵐が過ぎるのを待て。
そして、何事も無かったように振る舞え。

……ほんとにバカばかり！

和道はそう思い込むしか自分を納得させる方法がなかった。

こんな幼稚園での出来事を、和道はママに聞いてもらいたかったのだ。

だがそれと同時に、こんな事言つのは恥ずかしいと抵抗があった。

それに、ママに心配をかけたくもなかった。

どうして？

だって祥太がいるから。

その数日後。

幼稚園の先生が和道を捜していた。

「みんな、杉原くん見なかった？」

「知らない」

「見てませーん！」

妙子に和道が見つかった、と連絡があったのは、約一時間後だった。

和道は、鍵の掛かった体育用具室に独り、閉じ込められていたという。

その夜、妙子は和道に聞いてみた。

「何かあったの？ 和道」

「別に」

……言いたいけど、またパパに叩かれちゃう。

嵐が過ぎるのを待て。

そして何事も無かったかのように振る舞え。

うつむく和道。

「和道ははつきりしない子だな」

好二にしてみれば、いつもの弱虫にしか見えなかった。

そして妙子が話を続けようとするのを遮り、いつものように話し合いは終わる。

「誰か、和道がいるのに気付かないで、鍵しちゃったんだろ？ 誘拐じゃなかったんだから一安心じゃないか」

それはそうだと妙子も思ったが、何かすっきりしなかった。

第一章 三つ子の魂、百まで 三つ子の魂

三つ子の魂

- - - - -
- - - - -
- - - - -

それからしばらくして、和道は自分の下半身に興味を持つようになった。

そういえば、パパにも大きいの付いてた。

和道は好二とお風呂に入った時、好二のそれを取り敢えず引っ張ってみたことがある。

「イツつ、おい、やめろ！」

思いがけない大きなアクションに和道は飛び退いた。

「なんでパパのはこんな風になっちゃったの？」

「えー？ とな、んー、そういうモンなんだよ、和道も大人になったらパパみたいになるんだぞ」

好二は突拍子もない質問に、少々うろたえた。

「えー、ヤダ。こっちのが良い」

「……あ、そうか？」

妙子はその話を聞いて、危うく祥太を落としそうなほど腹を抱えて笑った。

「あははっ！ 大人になったら、そんな風になっちゃうの？ お父さんだけじゃなくて？」

「どういう意味だ？ なんて説明するか、困ったんだぞ？ でもあれだな、性教育もいずれちゃんとしないと、な」

一口お茶を啜ると、急に真顔で話を逸らしにかかる好二。

「でもさすがに幼稚園じゃ、まだ早……」

妙子が言い終わらないうちに、隣の部屋で尋常でなく和道が泣き叫んだ。

「どうした！？」

「っ！ 痛い！」

見ると、和道の下半身は色鮮やかに剥けていた。

好二は痛がる息子を、そっと元に戻してやった。

「和道くんがパンツを脱いで、園内を走り回ったんです！」

幼稚園から電話がかかってきたのは、その数日後だった。

「え！？　うちの和道が、ですか？」

妙子は思わず聞き返した。あの人見知りでシャイな和道が？

……どうしちゃったのかしら。

その日の午後、妙子は祥太をあやししながら和道をテーブルに着かせた。

「何か理由があるんでしょ？」

「みんながキヤアキヤア騒ぐのが面白かったから」

和道は特に悪びれる様子もなく、むしろ誇らしげだった。

「そんなみつともないでしょ、女の子もいるんだし。聞いているの？
和道」

すると和道はじつと妙子以外の一点を見つめ、黙り込んでしまった。

西日がやけに眩しい。

和道は、普段は何も言えなくて目立たない自分でも、変わった事をすればみんなの注目が集められる事を知ったのだ。
だがそれは和道にとって、とても勇気がある事。

……でも、パンツは脱げたんだよ！？

和道は初めて、みんなに注目される快感を体験したのである。

夜、和道は久しぶりに好二に殴られて、天袋に閉じ込められた。

妙子はその現場を祥太に見せないように、席を外した。

……パパもママも、弱虫で何も言えないボクが好きなんだね。

和道にはそうしか思えなかった。

さてそれからというものの、和道は特に問題を起こさなかった。

ただ卒園式の日、何かが弾けたのだろう。

卒園記念写真を撮影する時。

和道は妙子の目の前で、池に飛び込んだ。

慌てふためく妙子と得意気な和道。

そのコントラストが、余計に周囲の失笑を買った。

第二章 Another Language Another Language

【あらすじ】 小学校時代

小学生となった和道。

内気で敏感な少年は、いじめの屈辱と自身のプライドの狭間で揺さぶられていた。

だが一人の少女と出会い、和道の物語が今、ゆっくりと動き始める。

第二章 Another Language Another Language

第二章 Another Language

- - - - -
- - - - -
- - - - -
Another Language

「そんな事して、大人をナメてんのかつ!!」

卒園式的一件で、また好二に殴られた和道。
和道は耳が千切れたかと思った。

「ちょっと、お父さん。最近、度が過ぎてる」

「子供のうちは口で言うより、叩いたほうが言う事聞くぞ？ オレ
だってそうだった」

小学校に上がった和道。

人見知りは相変わらずだが、それよりも新しい友達が出来る期待の
方が大きかった。

入学当初は六年生が一年生のクラスまで来て、面倒を見てくれるシ
ステム。

六年生に構ってもらえて、和道は嬉しくて友達のようにはいしゃいだ。

だが少々、悪乗りが過ぎてしまった。

お昼休みの水飲み場で、ある六年生男子の股間を後ろからギュッと握ったのである。

優しいお兄ちゃん。

勝手にそう思っていた六年生は、豹変した。

「調子乗るんじゃないよ!!」

そのまま臭い便所に連れていかれて、和道は何回もひっぱたかれた。当たり前だが六年生と一年生、倍くらいの体格差に和道はすっかりビビって、泣かされた。

そんな出来事はすぐにクラスに広まり、和道は当然のように嘲笑の的になり、バカにされるようになっていた。

嵐が過ぎるのを待て。

そして何事もなかったかのように振る舞え。

……悔しい。恥ずかしい!

やっぱりお父さんの言う通り、ボクは弱虫なのかな?

そしてそれは、ある日の休み時間のことだった。

廊下の隅っこを歩いていたら和道の前に、ふらりとツトムがやってきた。

キツネ顔のクラスの暴れん坊だ。

避けようとする、スッと前に立ちふさがる。

完全に見下したツトムの視線に、和道は目を合わせる事が出来なかった。

……どうしよう逃げなきゃ、でも！

そのあまりにも長い三秒間、和道は頭の中であらゆる駆け引きをした。

ドクンドクン、と鼓動が走り出す。

……今ならまだ間に合う。

一体、何が？

弱虫は嫌なんだ！

和道はほんの一瞬だけ、ツトムの目を見ることができた。

その震える脚で、ありったけの力を込めてツトムの脛を蹴り上げることができた。

だが。

もっとも恐ろしい瞬間は、まだ訪れてはいなかったのだ。

ツトムは別に痛そうな素振りを見せるわけでもなく、同じ視線、同じ顔色でそこに立っている。

和道は凍りついた。

そのままゆっくりと腕と胸ぐらを掴まれ、教室の壁に顔面から叩きつけられた和道。

その撲音で、騒ついていた廊下が水を打ったように静まった。

それは、和道の心が折れた瞬間でもある。

……自分はもう、誰にも勝てない弱虫。

嵐が過ぎるのを待て。
そして何事もなかったかのように振る舞え。

その夜。

和道の顔のアザを見て、好二と妙子はさすがに心配した。

「和道、どうしたのかちゃんと説明しなさい」

「兄ちゃん、いたあゐ？」

祥太にまで心配されて、和道は情けなかった。

……恥ずかしい！ 絶対に言えない！

「ちょっと、友達と殴り合いになっただけだってば」

……殴り合いじゃないよ、こんな嘘、言わせないで。

「相手の子は誰？ 怪我させたんじゃないの？」

……そんなわけないでしょ、一方的なんだから。

「あんまり調子乗るなよ。カッコいいつもりか？」

……調子に乗れないから、こんな事になってるんじゃないか！
カッコ悪いのは誰よりもボクが知ってる！

絶対両親には言わない、と誓った。

いや、言えないというべきか。

もちろん和道は、話したくてしょうがなかった。

でも、ここまで会話が噛み合わないなら、

最初から心配されたくない。

迷惑かけたくない。

こんなに傍にいるのに、

まるで違う国の言葉を喋っているみたいだ。

……もう、いいよ。

和道は最後の「伝える」勇気を振り絞る事が出来なかった。

……この時、妙子の脳裏には一瞬、「イジメ」という言葉が浮かんでいた。

まさか、ね。まだ入学して三週間だし。

妙子はすぐに否定した。

第二章 Another Language それは日常

それは日常

- - - - -
- - - - -
- - - - -

それにしても最近、暑くないか？

前の席のうだった女子。

冷たい視線を和道に投げ掛けると、だるそうに和道の教科書をつまんで持ち上げる。

フツと和道が手を伸ばすと、その女子は後ろ手に教科書を投げ捨てた。

和道はそれを、取りに行こうとはしなかった。
もちろん、他の生徒も誰一人、拾いはしない。

和道が拾いに行かないのは、拾えばまた同じことが繰り返されるからだ。

……このクソ暑いのに、わざわざ汗なんかかきたくない。

ささやかな抵抗でもあった。

やがて始業のチャイムが鳴ると、ふくよかな女性担任がやってきた。

「あれ、これ……、誰か教科書落としてない？」

「ボクのです」

和道が手を上げた。

「和道くん、教科書は大切に使ってね。お父さんとお母さんがご覧になったら、悲しむでしょう?」

……だから余計、胸が痛むんだよ。

女担任はまだ続けた。

「他の教科書もずいぶん貸出し用のものを使ってるわよね」

………忘れた時の予備だつて?

捨てられた時の予備も欲しいよ。

授業が終わり、下校の時間。

下駄箱で和道は、靴の中を覗きこんだ。

今日はセーフ。

いつもなら、画ビョウやボンドがよく入っている。

校門を出てしばらくした交差点で、キョロキョロしている頭の大きな少年がいた。

「あ、和くん!」

「あっくんお待たせ」

こんな和道だったが、ゲーム友達がいた。

学校内ではお互いの安全のため、交流は避けている。

「今日は何のゲームやるのか?」

正直、和道はゲームなんかこれっぽっちも興味がなかった。

ただ頼んでもないのに、あっくんは近づいてくるので、何となく一緒にいる。

ヒドく臭いのドブ川沿いにあるあっくんの家は、昼間から雨戸を締め切っていて、まるで蒸し風呂だった。

……親は何してる人なんだろう。

「プロレスはどう?」

「いいんじゃない?」

和道の生返事は、いつものことだった。
会話は弾むほうじゃない。

さて、ひとしきりゲームを終えると、あっくんはカップ麺用のお湯を沸かし始めた。

「じゃあ、そろそろボク帰るね」

「うん、また遊ぼう」

……寂しいもの同士で、同じ匂いがするのかな。

あつくんと遊ばない日は、和道は隣の幸造と伸子の家でピアノを弾いていた。

普段、表に出てこない感情が、鍵盤に叩きこまれる。ふとそれが、好二が自分を叩く姿と重なって見えた。

「うち来いよ」

ふいに突然、思考が遮断される。

あのツトムだった。

和道は急に腹が痛くなった。

あの時以来、二年近く経ってもツトムが怖くて脚がすくむ。

六畳一間のツトムの家。

母親と二人暮らしと聞いたことはあるが、一度も母親を見たことはない。

「座れよ」

和道は畳の上に正座した。

…… ああ、今日も始まる。

ツトムは慣れた素振りで、和道を蹴り上げた。
顔は狙わない。

嵐が過ぎるのを待て。

そして何事もなかったかのように振る舞え。

…… 早く終わってくれ！

和道は毎週のように金曜か土曜、ツトムの家で軟禁、暴行を受けていた。

ツトムは気が済めば、決まって

「誰にも言っんじゃねえぞ」

と低い声で言い、解放してくれる。

…… その時を待てばいいんだ。

「お兄ちゃん、お帰り！」

「あら、今日は遅かったわねえ」

祥太と妙子が、一緒に夕飯の支度をしていた。

「あつくと遊んでたから」

「あら、そうなの？ 今度うちにも連れてらっしゃいよ」

自分の学校生活を知っている人間など恐ろしくて、和道が招待出来るはずもない。

じきに、玄関の開く音がした。

「ただいまー」

好二が帰ってきたようだ。

今日もあともう少し。

笑顔でいなきや。

和道は見つからないように、小さく太ももを叩いた。

第二章 Another Language 傷害事件

傷害事件

- - - - -
- - - - -
- - - - -

今年に入ると、待ちに待った嬉しい出来事がやってきた。

和道が四年生に進級する時クラス替えがあり、ようやく、あのクラスから離れることができたのだ。

新しいクラスにはツトムたちもいない。

ちようど3コマ下の祥太も入学だったので、和道は内心、とてもホッとしていた。

……これでやっと楽になれる。

筈だったのだが。

ある日の帰り道、公園で上級生のグループと偶然鉢合わせてしまった。

彼らはエアガンで遊んでいた流れで、和道を一斉に狙い打ちした。半ズボンの和道の太ももが真っ赤に腫れあがる。

……もうやめて！

必死に貯水槽の上まで逃げたが、周りを取り囲まれ、立ち上がると一斉に撃たれる状況になってしまった。

下の様子を伺ったその時、和道はドキリ、とした。

……なんでこんな事が起きるんだ！

罵声を投げ掛ける上級生たちに怯えながら、その後ろをそそくさと足早に過ぎていくのは、祥太であった。

幸い和道の弟とは誰も知らなかったようで、祥太に実害はなかったのだが、和道は貯水槽の上から降りるに降りられなくなってしまった。

……祥太にこんな情けない兄の姿、絶対見せてたまるか！

嵐が過ぎるのを待て。

そして何事もなかったかのように振る舞え。

結局和道は、連中が飽きて帰るまで貯水槽の上で伏せて過ごすしかなかった。

家に着くと、和道は真っすぐ幸造の家へ向かい、そしていつもより、

激しく鍵盤を叩き、殴りつけていた。

「今日も遅かったじゃない」

サラダを取り分けながら、妙子の何気ない言葉。

「小学生にもいろいろ付き合いがあるの」

……お願い、何も聞かないで。

「そうなの？ でもみんなと上手くやれてるみたいで、安心した。
あなたが幼稚園の時は、それはそれは母さんも父さんも心配だった
んだから」

「そうだぞ、和道」

そんな好二と妙子の言葉を聞くたびに、和道は胸が押し潰されそうになる。

……ああ、これからは父さんと母さんと、祥太にまで嘘をつかなければならないのか。

「祥太は学校楽しい？」

そんな妙子の問いに、祥太は何の屈託もなく

「うん」

と答えた。

次の日の帰り道、あつくんと待ち合わせていた和道は突然、激しい衝撃を頭を感じた。

目の前が白くなり、チ力チ力する。

「痛……」

頭に手をやると、ぬるりと赤い。

傍らには拳大の石が転がっていた。

「ちよつと僕、大丈夫!？」

たまたま通りがかったおばさんが、警察と救急に連絡をしてくれ、道端の野良猫が大きなあくびをした。

「和くん!」

遅れて来たあつくんは、赤色灯に真つ青な顔をしていた。

「ごめんね、今日遊べないや」

和道は落ち着いていた。
痛みなんて、感じなくできる。

病院で話を聞いた好二と妙子はカンカンに怒り、傷害事件として被害届を提出した。

「全く、何でうちの子が！」

和道は思った。

父さん母さん、「うちの子」だからだよ。

第二章 Another Language 投身、

投身、

- - - - -
- - - - -
- - - - -

頭の傷が癒えた頃、和道は毎日のようにピアノの前に座っていた。

何か物凄く大きな、得体のしれない感情が、心の奥の方で蠢いているのが怖かったのだ。

そんな姿を見て、祖母の伸子は妙子に

「一生懸命、練習してるわよ。将来はピアノの先生かねえ？」

と、目の周りをクシャクシャにして話すのだった。

好二も、

「何かに集中できる、というのも人間の能力の一つだ」

と褒めていた。

その日も、和道はツトムの家に「寄り道」したのだが、何食わぬ顔で帰ってきた。

この日は好二が早く帰宅していて、既に酔っ払っていた。

……この人、酔っ払うとロクな事しない。

好二が和道に手を上げるのは、決まって酒の入っている時だからだ。だが今日の好二は上機嫌だった。

「オレは本当にお前達みたいな家族がいて、幸せもんだ！」

「ほんと、和道も祥太もいい子に育ったもんね……」

感慨深そうに、妙子も頷いた。

……自分さえ毎日やり過ごせば、みんな幸せを感じてくれる。

和道はそう思ったが、同時に、出口の見えない絶望的な視界が、覆い被さってきた。

「お前たち、将来になりたいモノとかあるのか？」

好二はシチューを頬張りながら、息子たちに尋ねた。

どんな答えを期待しているか、和道には手に取るように分かっていた。

「……ボクは父さんみたいに、法律勉強したい。」

「ほう、和道はピアノの先生かと思ったが、嬉しいな」

「ボクはコックさん！」

祥太が大きな声でそう答える。

……本当にいい子たちだね。

妙子は目を細めて、にこりとした。

数日後、和道はいつものように、あつくと遊ぶ約束をしていた。

「あつくん、お待たせ」

「うっん、大丈夫。今来たところ」

愛嬌のある大きな頭。

和道は、あつくんがいてくれて本当に良かった、と思った。

イジメについて、あつくんは触れた事がなかった。

だが、それがかえって嬉しい。

一人の人として認められている、そんな気がしたのだ。

……昔は鬱陶しかつただけだね。

二人は鼻歌交じりで、待ち合わせた文化センターを後にした。

だがコンビニに立ち寄った時。

「おい、あつし、なんで杉原なんかと一緒にわけ？」

クラス替え前のクラスメイトだった。

「え、あの……」

あつくんは困惑していた。

「おまえら友達なの？」

「あつし、答えるよ!!」

「……偶然だよ!」

和道はふつと、自分の想像力の逞しさを恨んだ。

あつくん……。

和道は分かっていたが、理性が拒否した。

あつくんは振り返らずに、小走りで奴らの後ろに回った。

……逃げろ。

和道は急に頭が真っ白になり、何を思うよりも、その場から走り出した。

「杉原あ！待てよ！」

すぐ後ろでバラバラと乱れた足音がする。

和道はリレーの選手に選ばれたこともあり、足の早さには自信があったが、この際、全く関係なかった。

和道は団地に逃げ込んだ。すぐ奴らも追いかけて来た。

チラッとおっくんの姿も見えた。

嵐が過ぎるのを待て。
そして何事もなかったかのように振る舞え。

……もう、うんざり。

三階の踊り場まで駆け上がった和道は、急に力なく立ち止まった。

「杉原、捕まえた！」

「めんどくせーんだよ、お前」

「死ねよ！バカ」

一人が和道を突飛ばした。

壁ぎわに追い詰められた和道は、そのまま開いた窓枠に腰をかけた。

「なんだよ、落ちろ、死ね！」

「そんな勇氣こいつ、ねえよ」

「出来ねえくせに」

「飛んでみるよ！あ？」

あつくんはずつと下を向いたままだった。

和道は空を見上げた。

……そういえば小さい頃、おじいちゃんと飛行機見に来たな……。

時間の流れが滞ったような空気に、自然と誰もが口をつぐんだ。

……あつくん。

あつくん！

ようやく和道はあつくんと目があつた。

……それが合図だよ。

和道は窓から足を投げ出し、そのまま消えた。

全身が痺れるような痛み。

……動けてる？

首を鞭打った。

上を見上げると、誰も窓から覗いていない。

追ってくる様子もない。

和道は、左に回らない首と膝を引きずるように、その場から離れた。

第二章 Another Language 樹里

樹里

- - -
- - -
- - -

あの日以来、和道に手を出す生徒はいなくなった。

あのツトムでさえ、おとなしくなっていた。

……きっとアブナイ奴とでも、思ってるんだろ？
でも殴られるより、よっぽどマシだ。

和道はこの開放感が堪らなく嬉しい。

だが他人に対する冷やややかな見方は変わっていない。
根深いものがあつた。

そして和道が五年生になった、ある日のこと。

「杉原くん、教科書見せてもらっていい？」

席替えをして間もない今日、隣の席の樹里はそういつて、一方的に
机をくつつけてきた。

「え……、どうぞ」

和道はびっくりして断れずに、されるがままだった。

「ありがとね！」

授業が終わると、樹里はそう言って勢いよく教室を後にした。

樹里は最近転校してきた、明るく活発な子である。

和道とは正反対。

背も女子の中では一番高く、とても大人っぽく見えた。

「今日、みんなでうちに来てよ、遊ぼ？」

樹里は何人かに声をかけていたが、

「杉原くんも来てよ、ね！」

……え、ボクも？

なんと和道も誘われてしまった。

樹里ちゃんは、こんなボクにも変わらずに接してくれる。
なんか嬉しい。

メンバー的にも怖い子がいなかったので、和道は思い切って遊びに行くことにした。

「へえ、樹里ちゃん家ってお寿司屋さんなんだあ」

ヒロユキが目丸くして言う。

商店街から一本左に入ったところにある、新しいお店。

「お父さんのお寿司、ホントおいしいんだから！」

その時、ちょうど樹里の父親が現れた。

「へい、いらつしゃい！ みんな樹里と仲良くしてやってな！ それと親御さんにウチの店、宣伝しといてな！ えっと、君は何くん？」

……なんか、身近にいないタイプだな。

和道には、この活力に溢れた親子が新鮮に映った。

「あ、ユウコ見つけ！」

「ちっ、バレてしまったか」

結局この日、何をして遊んだかといえば、この店舗付き住宅をフルに使っての、ただのかくれんぼ。

だが、押し入れの中に隠し扉があったり、樹里の父親も参加したりして、みんな飽きる事は無かった。

和道も最初のうち、どうしていいか分からなかったが、強引な樹里の父親にネタにされ、最後には一緒に笑っていた。

「杉原って面白いじゃん」

さらりとヒロユキが言う。

この日集まった六人、

和道、

樹里、

ヒロユキ、

マコト、

ユウコ、

サヤ

は、和道を含め、新しい仲良しグループとなった。

なぜ、あの和道まで？

その翌日、和道は樹里に、自分は少し前までイジメられっ子であった事、みんなにアブナイ奴だと思われてる事を話した。

樹里は最後まで話を聴いてくれ、最後にこう言った。

「アブナイ奴なんて、そんな事誰が言うの？」

……そういえば、直接言われた事はない。

「この中にも、イジメてた子いる？」

「いや、この中には……」

「だったら、いいじゃん！」

……樹里ちゃんて不思議な子だな。

和道は何故か、樹里なら信じて大丈夫だと思えた。

第二章 Another Language 大人の事情

大人の事情

- - - - -
- - - - -
- - - - -

秋口の、とある夜。

好二と妙子はいつも増して、真剣に話し合っていた。

「……と思うんだが、妙子はどう思う？」

「それについては、どっちが正しいとか言えないと思うな。やっぱり本人の希望も聞いてみないと」

頼杖をついていた好二は、姿勢を正した。

「とりあえず、本人に話してみるか」

その翌日の夜。

好二は、和道を席につかせた。

「ちょっと祥太、洗い物手伝ってくれる？」

妙子は祥太と夕飯の後片付けを始めた。

「なあ、和道。お前、法律家になりたいって前、言ってたよな？
今はどんな感じなんだ？」

小さい頃から和道の指定席は、好一とテーブルの対角線になる場所である。

最近はまだ殴られなくなったが、いつもこの席で怒られていたためか、和道は反射的に身体を強張らせた。

「……うーん、特に変わってはいかな」

実際は何にも考えていなかった。

「父さんな、法学部に入るのに二年浪人したんだ。その時、本当に大変な思いをしてな。

後々のことを考えると、中高一貫の私立のほうが楽なんだよ。ほら、高校受験しなくて済むだろ？

そこで提案なんだが、和道、試しに中学受験してみないか？」

「……うん」

和道は二つ返事でそう言った。

父さんは受験させたいんでしょ？

やるしかないじゃん。

「おお、そうか。大変かもしれんが父さん、応援するぞ」

「……うん」

正直、受験と言われてもピンとこない。

樹里ちゃん達とあんまり遊べなくなるのかなあ。

小五の秋。

和道は、その程度にしか思っていなかった。

好二はもっと大事な事を、この時言えなかった。

和道がショックを受ける事は、分かり切っていたから、つい誤魔化してしまっただ。

「あなた、和道は納得したみたいだった？」

和道と祥太が風呂に入っている時、妙子が様子を伺いにきた。

「ああ、受験するって」

「違うでしょ、転校の事」

好二は途端に、子供には見せた事のない表情になってしまった。

「……実は転校の事、言えなかったんだよ。あの子、絶対落ち込むだろ？」

妙子は耳を疑った。

「ちょっと！ それ言わなきゃ本末転倒じゃない！ 言つべき事ぢやんと言わなきゃ。もっとあの子、傷付けることになるでしょ？」

その時、和道と祥太がザブンと風呂から上がる音が聞こえた。

「この話は、またゆっくり話そう？　な？」

妙子は呆れて言った。

「いい、私から言う」

「いや！　オレからちゃんと言うから。オレの顔立ててくれよ、お願いっ！」

好二は手を合わせた。

和道に受験をさせる理由、確かに将来を見据えてでもあったが、他に理由があった。

好二と妙子は大学を卒業してすぐに結婚したため、結婚当初は金銭的に余裕がなかった。

そこでとりあえず、妙子の両親が経営するこのアパートへ入居する、という形をとることとなった。

しかし、この家から好二の職場である司法書士事務所までは、かなり遠い。

そして好二の両親も、杉原家の孫を妙子の両親が独占し過ぎだ、と不満を露骨に表していた。

そうこうしているうちに、好二の父、大正が「孫に会いたい」と言い残して、他界してしまったのである。

大正にとっても、和道達は初孫だった。

あれから約十年、すっかり好二の仕事も安定した。

つまり職場に近くて、両家の顔も立てられる、そうした環境を整える時期に差し掛かってきたのだ。

和道たちには到底理解できないであろう、大人の事情。

そして、和道が六年生になる直前、引越す事になったのである。

だが偶然、その地域の中学校が、非常に評判の悪い事が分かった。そこに和道を通わせるのは、本人の性格的にイジメに遇うのでは、と好二と妙子は勝手に心配した。

幸い、近場に有名な私立中学がある。

ここでやっと、和道に受験させてみるか？ という話が出てきたのである。

好二は殴っても解決しそうな問題に、悩んでいた。

第二章 Another Language 淡い気持ち

淡い気持ち

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「今日もうち来る？」

樹里たちのグループは、よく樹里の家で遊んでいた。

樹里の父親は和道の事をよくイジるので、和道はみんなと、すっかり打ち解けていた。

本当によく笑うようになっていた。

「今日も樹里ちゃん家で遊んだの？」

「うん！」

もちろん好二と妙子も、そんな和道の変化に気付いている。

楽しそうな和道を見て、ますます好二は転校をどう説明しようか悩んだ。

「今日は外で食べないか？ たまには母さんに楽させてあげよう？」

ある日の夜のこと。

「和道、樹里ちゃんここでお寿司なんてどうだ？」

「えっ？ ホントに？」

「お寿司食べたあい！」

和道も祥太も乗り気だ。

「前から行きたがってたろ？」

好二から和道へ、せめてものお詫びの気持ちだった。

「へい、らっしゃい！ おっ、杉原くん、あれ、一家お揃いで」

妙子はすぐにかしこまって、ご挨拶が始まった。

「いつも息子が大変お世話になっております……」

慌てて好二も加わる。

「いえいえ、とんでもねえです、ウチの娘のほうが進んでもらってるんで……」

話し声を聞き付けて、樹里も降りてきた。

「杉原くん、来てくれたんだ！」

「いや、父さんが寿司食いたいって言い出して」

少し照れながらも、和道は嬉しそうな顔をする。

「帰り、時間あったら上おいでよ。ゲーム一人でつまんなかったんだ」

「え！？ いいの？」

……好二達が帰った後、和道は樹里と二人でゲームをしていた。

普段は昼間遊ぶので、薄暗くなった樹里の部屋は、まるで別世界だった。

チカチカするテレビ画面。

何気なく樹里の手を見ると、思いがけず、白くほっそりとした指先であった。

「樹里ちゃんて、手きれいなんだね」

「ほんと？ 初めて言われた」

和道は何気なく言ったつもりだったが、樹里が珍しく女の子みただったので、なんだか和道まで照れ臭くなった。

「……じゃ、そろそろ帰るね」

「うん、じゃ、また」

外まで見送りに来てくれた、樹里。

「また明日ね」

そういつて手を振った樹里の姿は、街灯のせいか、いつもよりずっと、大人っぽく見えた。

……なんだろう、胸が勝手に震えてる。

なんだか和道は、樹里と二人きりで遊んだ事を、無性に誰かに自慢したくなった。

……また明日ね、か。

胸の高鳴る和道であつた。

「ただいま！」

和道が家に帰ると、好二が待っていた。

「おー、おかえり。ちよつといいか、和道」

そしていつもの席に、和道を座らせた。

「実はな、和道」

好二が口重たそうに話し始める。

「こないだ受験の話、しただろ？ あん時父さんな、大事なことを話せなかったんだ」

「……なに？」

凄くイヤな予感がする。

「実はな、うち三月に中洲台に引っ越す事になったんだ」

和道は椅子の上に体育座りをして、好二以外の一点を見つめ、無表情に固まってしまっていた。

それでも好二は続けなければならなかった。

「ごめんな、こないだ言えなくて。和道が傷つくんじゃないかと思っ
つて。つい言いそびれたんだ」

「じゃあ、あと四ヶ月ってこと？」

「そうだな」

……中洲台ってどこ？
遠いのかな。

実感が湧かなかった。

……やっと友達見つけられたのに。毎日楽しいのに。

空気を察して、妙子もそこへ入ってきた。

「それでね、転校先の学校がね、かなり荒れてるんだって。母さんたち、和道がイジメられないか心配で。それもあるって受験を勧めたの」

……今さらイジメ、か。

……樹里ちゃん。

第二章 Another Language 別れの時

別れの時

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「杉原くん、どうかした？」

樹里が心配そうに言う。

「いや、どうもしないよ？　なんで？」

なんだか和道は、真っ直ぐ樹里の目を見られないでいた。

……あとたった四ヶ月、か。

樹里たちに話したいけど、胸が痛くて泣きそうになる。

一緒にいても、そんな事ばかり考えていて、途方に暮れる。
むしろ、何も知らずに楽しそうな皆が、腹立たしくも思えた。

和道は急に、樹里たちが遠く離れていってしまう錯覚を覚えるのだ
った。

「杉原くん、最近暗いよね」

放課後、樹里たちがひそひそと話し込んでいた。

和道の変化をみんな感じていたのだ。

樹里は、和道がイジメの事を話してくれた事を、みんなに話した。

「……もしかしたら私のせいかも」

サヤは一年生からずっと同じクラスだったが、和道と話をした事も無かったし、イジメを傍観する立場だった。

「やっぱり怒ってるよね」

サヤは髪をかきあげながら、神妙な面持ちで呟く。

「それ言っただったら、みんな同じじゃね？」

「一回、ちゃんと謝ったほうがいいよ、ね？」

ユウコやヒロユキもそうすべきだ、と声を揃えていた。

あくる日。

「杉原、ちよつと」

和道はヒロユキに廊下と呼ばれた。

みんながいたので、ちよつとびっくりした顔をした。

「杉原くん、昨日みんなで話したの。一年の時から知らんぷりして、それが今さら急に友達面しても、納得いかないよね？」

「ホントにごめんなさい」

「ごめん、杉原」

ヒロユキたちは頭を下げた。

……？

和道は友人の優しさを理解するのに、数秒かった。

「あ、違うよ。ごめん、謝らないでよ」

そして和道は、急に三月に引っ越すことになった事を初めて打ち明けた。

やっぱり涙を堪えられない。

和道の肩が小刻みに震えていた。

「みんなに何て言えばいいのか、分かんなくて……」

「引っ越しちゃうんだ」

マコトがそういうのと同時に、重い空気が流れ始めた。

「……でもまだ、四ヶ月もあるんだね！ 何にも気にする事、ない」

びつくりするくらい、あっけらかんと樹里は言った。
一瞬きよとしたマコト。

「そうだよ、離れたからって友達じゃなくなる訳じゃないし」

……悩むような事じゃなかったんだ。

和道はこんな友達を持って、幸せってこういう事なのかも、と思った。

それから四ヶ月。

楽しい時間はあっという間に過ぎていった。

三学期の終業式。

クラスで最後の挨拶の日。

「えーっと、今日でみんなと……」

喋りだしたら急に、和道の目から涙が溢れ出した。

……なんで？

だが、和道の胸はどんどん痛くなるばかりだった。

樹里は真っ直ぐ、和道を見つめていた。

……樹里ちゃん。

和道は真っ赤な目で、樹里に精一杯の眼差しで、うんと答える。

「みんな、いろいろあったけど、ありがとう」

帰り道。

どちらから、という訳でもなく、和道と樹里は一緒だった。

外はだいぶ春らしい陽気が朗らかに漂う。

「私ね」

樹里が優しく口を開いた。

「転校生だったでしょ。不安がいっぱいだった。でも杉原くん達に会えた訳だし。私は別れて悲しいだけじゃないと思うんだ」

……その通りだ。

「電話とか手紙とか、いっぱいしようね!」

「……うん」

おもむろに樹里が手を差し出してきた。

「どう？　手、きれいでしょ？」

樹里は、はにかんだ。

和道は照れくさくて、何も言わずに握り返した。

その手には紛れもなく、温もりがあつた。

それはほんの一瞬だったかもしれない。

だが、和道には大切な、大切な思い出だった。

第二章 Another Language 新しい風

新しい風

- - - - -
- - - - -
- - - - -

小学六年生、転校初日。

好二と妙子に散々荒れた学校だと聞かされて、かえって和道は緊張していた。

「杉原和道です。よろしくお願いします」

今度の担任は色の黒い、男性教諭。

「じゃあ、杉原くんはあの席に座ってもらおうかな」

窓側から二列目、後ろから三番目。

二時間目の途中で、前のドアから遅れてきた生徒が、遠慮もなく入ってきた。

「おい、佐田。今日はどうした」

「寝坊」

その生徒は面倒くさそうに、一番前の席に座った。

「その割にはずいぶん整髪料使ってキメてきたな」

「黙れ」

そういつとその佐田という生徒は、ガラガラと派手に椅子を転がし、教室から出ていこうとした。

「おい、佐田！」

担任が日焼けした腕で、佐田の肩に手をかけたが、思い切り振りほどかれる。

教室の外で何か罵り合った担任と児童。

ドシンと教室の壁が揺れた。

「佐田あー!!」

野次馬が見に行くと、その担任が佐田の上に馬乗りになって、何発も拳で殴りつけていた。

一時騒然としたが、どうやら日常のことらしい。

そして休み時間、隣のクラスから転校生を見学に来たグループあった。

「お前、ケン力強い？」

それが転校して初の会話だ。

それから一週間も経たないうちに、五年生十四人と佐田や織山など、四人の生徒が木刀や蛍光灯を使って大乱闘をしたらしく、大変な問題になっていた。

しかも立会人は、織山の母親だったらしい。

確かに父さん達は荒れた地域だとは言っていたが、正直、和道の肝っ玉は縮みあがっていた。

「おい杉原、今日釣り行かねえ？」

佐田だった。

和道は内心ドキリとしたが断りきれず、二人で自転車を走らせていた。

どこに向かっているのかも分からない。
慣れない土地の風は、いやに生ぬるかった。

「なに、リールの巻き方も知らねえの？　こっやんだよ」

そついうと手取り足取り、佐田は和道に教えてくれた。

……ちょっと乱暴だけど、いい人かも。

二人は川辺に並んで、少しずつ話をした。

中学受験をすると話したら「へー、頭良いんだ」と興味なさそう。プシュツと佐田がビールの口を開けた。

あれ？　うちら小学生だよな、と思いつつ、つい乗りで和道もタバコを分けてもらった、が咳き込んだ。佐田が優しい目をして和道をつつく。

どうせ中学は別々になるし、佐田と一緒になら少しくらい調子に乗っても大丈夫だろう。

そう、和道は腰掛けの一年間だと思っていたのだ。

第二章 Another Language 関門

- - -
- - -
- - -

関門

- - -
- - -
- - -

「和道つたら、どうも不良と付き合ってるみたいなのよ」

妙子は心配そうに視線を落として、好二に洩らした。

「おい和道、ちょっと」

「なに？」

ちょうど樹里からの手紙を読んでいたところだったので、和道はイラッとした。

好二が和道をいつもの席に座らせる。

この席に座っただけで、和道の身体は自然と強張る。

「佐田くんてのは、どんな子なんだ？」

好二の言いたい事は分かっていた。

「悪い人じゃないよ」

「そうか、でもな、受験があるんだから遊んでばっかじゃダメだぞ」
和道はいつものように体育座りをして、一点を見つめていた。

……分かってるよ！

でも、言うほど悪い奴らじゃない。

和道は内心、このまま地元の中へ行くのも悪くない、と思い始めていた。

和道が受験するのは両親の勧めで、中高一貫教育の名門校。

そのために塾にも通い始めた和道は、自分なりに勉強も頑張っているつもりだ。

ふと見ると、祥太がテレビを見てキャツキヤと笑っていた。

……祥太は気楽でいいよな。

「おい聞いているのか、和道！」

好二は「バン！」とテーブルを叩いた。

和道は体育座りをしたその膝に、成す術もなく顔を埋めた。

嵐が過ぎるのを待て。

そして何事もなかったかのように振る舞え。

こうしたやり取りが何度も続くと、プレッシャーの塊になった和道は自慰行為を覚えた。

こうして半年が過ぎ、十二月。
冬期講習初日。

……あれ？ 誰もいない。

どうやら時間を間違えてしまったようだ。

……どうやって時間ツブそうかな。

一旦外に出て、和道は隣の駐車場へ移動した。
ほうっ、と吐いた息は白かった。

向かいのパン屋に気をとられていたその時。

ドスン。

すぐ後ろから反響音に乏しい、それでいて大きな鈍い音が聞こえてきた。

反射的に和道が振り替えた背後の、あまりに唐突なその惨劇。

人に似た、

脚みたい？

四の字になったモノが、

鮮やか、に

落ちていたモノ。

いや塊？

あと和道が覚えているのは、抱き抱えられた事、知らないおじさん、パトカー、黄色いテープを貼るお巡りさん。

翌日。

「和道、これ見てみな」

好二に呼ばれた和道は、朝刊の社会面を見た。

指差された小さな記事には

見覚えのある建物。

そして浪人六年目という文字。

……これ、昨日の。

ふと二年前、団地から飛び降りたことを思い出した。

……ボクも死ぬとモノになるんだ。

そして「浪人」という文字を見て、和道は急に受験が怖くなった。

……絶対、落ちちゃダメだ。

それから。

和道は、合格確実と言われていた。
自己採点のテストで点数を改ざんして。

入試前日。

40度近い高熱を出した。

樹里が励ましの電話をくれた。
だが、和道の心には届かなかった。

「お前、悔しくないのか！」

不合格通知を見ても、何の感情も表さない和道を見て、好二は激昂し、引きずり倒した。

「あなた、もうやめて！ 和道だって十分頑張ってたの知ってるでしょ！」

妙子は必死に好二を押さえながら、この時初めて、

和道が解らない

と思った。

「ボクがお兄ちゃんの仇をとる！」

小三の祥太が勇ましく吠える。

……おまえらみんな、バカばかり。

この時の和道には、そうとしか見えなかった。

第二章 Another Language 関門（後書き）

第三章 覚醒の思春期 7月12日更新予定

第三章 覚醒の思春期 覚醒の思春期（前書き）

【あらすじ】

和道は結局、地元の中学校に通うことになった。
思春期の少年はやがて青年への階段を登り始め、樹里を一人の女性
として見るようになっていく。

第三章 覚醒の思春期 覚醒の思春期

第三章 覚醒の思春期

- - - - -

- - - - -

- - - - -

覚醒の思春期

- - - - -

- - - - -

- - - - -

- - - - -

祝、御入学。

市立中洲台第五中学校。

妙子は恐る恐る式に出席していた。

二つの小学校が合流する中学。

新人生退場の時何かあったらしく、佐田が誰かを殴り飛ばした。
式場は大騒ぎとなり、教師と生徒が入り乱れ、怒号が飛び交う。

妙子は目眩を起こしそうだった。

…… あんな子が、この間までランドセルを背負ってたの？

和道の友達なわけ？

和道は受験に失敗した後、佐田と協力してAVを仕入れ、小学校内でレンタル業を始めた。

男子児童の間に瞬く間に噂は広まり、二人はそれなりに稼いでいた。だが、四年生の児童が親に見つかり、学校へ連絡。

主犯格として、和道の名前が上がったのだが、妙子は信じられなかった。

「ちゃんと説明してよ、ね？」

だが和道はいつものように、体育座りで無表情に固まっているだけだった。

痺れを切らした好二が胸ぐらを掴んで立ち上がらせたが、手を離すとすぐに元の体勢、終始の無言。

嵐が過ぎるのを待て。

そして何事もなかったかのように振る舞え。

結局、和道は最後まで一言も喋らないのであった。

あれから和道は、この一年間を見つめ直していた。

唐突な引っ越し。

興味のない受験。

親に決められた未来像。

意図的に手を抜いた交友関係。

苦手な他人との競争。

それに金を注ぎ込む両親。

その期待に答えられない自分。

そして虚しく自慰をする、自分。

好二からの、長男としての無言の圧力。

妙子からの、根拠の無い絶対的な信頼。

自分に欠けているものを、全て備えているかのような祥太。

幸せを演じ合う、食卓。

自殺の第一発見者。

強迫的な合格念慮。

それによる不正行為。

天罰のような試験日のヒドい風邪。

不合格通知を見た時の悔しさ。

悔しさを表現できない悔しさ。

それを殴る父親。

止める母親。

敵討ちを宣言する弟。

……そして何より、

和道は思った。

……樹里との別れ。

結局、親に用意された舞台を演じてきた結果がこれだ。

何が得られたっていうのさ。

……これからは、自分で自分を守らなければ。

イジメられないように、まず自分のポジションを固める必要がある。

そこで仕掛けた作戦が、AVレンタルだった。

だが、この商売の目的は金ではない。

AVを和道から借りた同級生は、その羞恥心を和道に握られることになる。

もうひとつは、小遣いの少ない小学生から金をとることによって、心理的に和道の立場を上げようとしたのだ。

自分の身を守るための、最初の一步。

こんなこと、いちいち好二や妙子に話したところで理解されるわけがない。

どうせ邪魔してくるだろ？

だから黙ってるのさ。

第三章 覚醒の思春期 変わりゆく、変わらぬもの

変わりゆき、変わらぬもの

[illegible]

[illegible]

中学二年もあと少しという頃。

和道は身なりも派手になっていた。短ラン、ドカンに金髪パーマ。

この頃つるんでいたのは、佐田と織山が中心だった。

族に入った仲間もいるが、和道は興味がなかった。気が向いたら原チャリを直結して合流するくらい。

誘いはあつたが、上下関係が面倒臭い。

それにしても、和道はこの一年で、別人のように目つきが変わった。人を射抜くような眼光。

というのも、自信がついたのだろう。

和道は最初、ケン力が怖かった。

どうしても、あのツトムの恐怖が振り払えないのだ。

だがある日、佐田、織山と三人で他校とモメた時、初めて和道は人を殴った。

……手首痛ッ！

だが手首がグラグラになるまで、憑りつかれたように殴りつけた。その独特の拳の感触がクセになる。

父親好二の腕つぶしの強さが遺伝したのか、なかなかの暴れっぷりだ。

しかも本来臆病者の和道は、姑息な手段や刃物も平気で使う。

また、売り言葉に買い言葉が苦手で、口より先に手が出る。

「杉原アブネエよ」

「喧嘩屋」

知らないうちに肩書きがつき、それなりの有名人になっていた。

そんなある日のこと。

「オレ、もう学校来ないわ」

佐田は紫煙をくゆらせて、ふと思い出したように呟いた。

「急にどした？」

和道もくわえタバコで、軽く受け流す。

だが次の日から、本当に佐田は学校に来なかった。
その次の日も。

家はもぬけの殻だった。

どうやら一家で夜逃げしたらしい。

転校以来の悪友として、内心頼りにしていた和道は、寂しさと同時に不安を感じていた。

……次、モメた時どうしよう。

ハッと、佐田を盾にイキがっていた自分に気付いたのである。

「……って感じでさ、そいつ夜逃げしちゃったのよ！」

「……寂しいんでしょう？」

精一杯おどけて話した和道だったが、電話越しでも樹里にはお見通しだった。

「変わらないね、和道くん」

自分を守るために、人に「ヤバイ奴」と言われるような事ばかりしている和道。

だが樹里の前では、不思議と素直になれた。

「……今度、樹里ちゃんに会いに行こうかな？」

冗談半分、本気半分。

「いいよ、待ってる」

……樹里ちゃんも変わってない。

和道はいつもホツとするのだった。

樹里は小学校卒業後、地元の中学に通い始めた。

……杉原くん、どうしてるのかな。

和道の受験日前日、樹里はたまらず電話をしたのだが、ヒドい鼻声だったのが忘れられない。

それ以来、和道からの連絡が途絶えた。

樹里は何度か電話をしようと思ったが、あと一歩のところで勇気が出ない。

和道と話したい事が、たくさんある事に気付いた。

「もしもし……」

それは中学に入ってしまったら経つての事。

突然の事に、樹里の胸は高鳴った。

「杉原くん？ 久しぶり！」

今までのモヤモヤが嘘のように、吹き飛んだ。

そして和道は何事も無かったように、受験に失敗してからシンナーや酒、悪友の事など、自分の変わり様をまるで見せ付けるようかのように話したず。

そんな和道の姿に、樹里の胸は圧迫感に襲われていた。

「こら、和道！」

初めて名前で呼ばれた和道。

「その程度じゃ、樹里は嫌いになんか、なってやんないぞ！」

「……な、何を突然」

思わず和道は面喰った。

第三章 覚醒の思春期 親の気持ち、子知らず

親の気持ち、子知らず

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「……あたし、和道のこと、分かんなくなっちゃった」

妙子は、ほうつと溜息を吐いた。

「アイツはどうしようもないな。祥太にも良くない」

好二はそう吐き捨てると、冷蔵庫にビールを取りに行った。

「やっぱり、ホントは受験で傷ついてたのかしら？」

「その割りにはケロッとしてただろ」

「でもあの子、昔から感情を表にださない子だったし……。それがこんなになるなんて。やっぱり佐田くん達と付き合いだしてから変わったと思わない？」

「あのアダルトビデオン時の子か？ それはあるだろうな。時期的にもそうだ」

裏を返せば、転校して樹里と離れた時期でもある。

ようやく好二はプシュッ、と缶ビールを開けた。

刹那、自分が和道を殴る姿と、和道が誰かを殴る姿が、生々しく重なる。

……オレは手加減を知ってる。

好二は勝手に不愉快になった。

「あたしも一本、頂こうかしら」

「ああ座ってろ、取ってきてやる」

気分転換に、好二は小走りに冷蔵庫へと向かった。

「でもまあ、難しい年頃になったのは確かだな」

ほれっ、と好二はビールで妙子の頬をちょん、と突いた。

そんな好二も中高生の頃は、車で通学していた思い出がある。

「自己主張の始まりか……」

「でも警察のお世話になるのは、やり過ぎよ。最近、電話が鳴るたびに心臓が停まりそうになる」

妙子は顔をしかめ、片手で耳を塞ぐような仕草を見せた。

「いつもすまん」

「今だって一体、どこで何してるやら……。でもね、あたし、和道の事信じてるの」

妙子は目頭を押さえた。

「……いつかあの子にも、親の気持ちが分かる時が来るさ」

さめざめと泣く妙子の肩に、好二はそつと手を置いた。

一時の反抗期だろうと、好二も妙子も信じようとしていたのだ。

「……お母さん大丈夫？」

祥太が二階から降りてきて、不安そうな顔をした。

「祥太？ そろそろ夕ご飯作らなきゃね、お腹すいたでしょ？」

涙を隠すように拭って、妙子は大きく深呼吸をした。

祥太は知っていた。

こうして毎日のように、妙子が泣いているのを。

好二の酒量が増えているのを。

……全部、お兄ちゃんのせいだ！

祥太は、そんな兄貴が大嫌いだった。

第三章 覚醒の思春期 再開という名の出逢い

再会という名の出逢い

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

「和道、暇だからケンカ売りに行こうぜ？」

「ん、どーじゃあで？」

「野木公園あたり」

「あー、いいわ、オレ。寒い、遠い」

大地はモメ事好きだなあ、
きれいな顔してるのに。

織山は不満そうだったが、和道は気にしない。

最近の和道は上の空だった。

樹里が変なのである。

いや、少なくとも和道はそう感じた。

やたらと先輩がカッコいいとか、身近な男の話をするようになったのだ。

……なんかイライラする。

急に男なんかに興味持つて。

ああ、
気になる！

気にしない素振りだと、探りたい気持ちと、自分をより良く見せたい気持ち。

これらがごちゃ混ぜになって、会話がぎこちなくなる。

和道はいろいろ考えた末、照れくさいけれど手紙を書いてみることにした。

「樹、里、ちゃん、へ……と」

翌日、四時間もかけた集大成を投函。

「ああ、やっぱりダメ」

急に不安になって、取り返そうと郵便ポストに手を突っ込んでみた。

その三日後、待望の樹里からの電話が鳴った。
十五分後。

「……うん、じゃ、また」

ガチャン、と和道は乱暴に受話器を置いた。

……なんだよ、意味わかんね！

いつもと変わらぬ電話。

手紙のことだとばかり思っていた和道は、拍子抜けして怒りすら覚えた。

翌日。

「大地、暇してねえで、ケンカ売りに行こうぜ！」

「なんだよ、気分屋」

織山が、和道の肩書きをもじる。
すると和道のタバコの火が、膝の上に落ちた。

「アーチッ！ ああ、オレのドカンが……」

穴が空いていた。

ところが、数日後。

樹里から手紙が届いた。

貪るように目を通した和道は、思わず吹き出した。

次の週の日曜日、わりと地味な出で立ちの和道は、多賀野駅の北口改札にいた。

……けっこう人多いんだな。

二分も待たないうちに、声を掛けられた。

「和道くん？」

「……おおー、出た！！」

「あー和道くんだ！ 金パ、似合ってんじゃん」

樹里との、実に三年振りの再会だった。

「なんか樹里ちゃん、ちっこくなった？」

「んー、失礼な。和道くんが勝手に背伸びたんでしょう？」

懐かしい、というよりも昨日逢ったばかりのような気がした。

「んじゃ、行くかあ」

「……うん」

和道は気持ち、樹里に寄り添って歩いた。

“じゅりちゃんへ

たまには気分を変えて、手紙を書いてみた。いいか、一回しか書かないぞ。ダメならダメってはつきり言うんだぞ。でも理由は言わなくてもいい。こんど多賀野に映画見に行きませんか？でもカレシがいたらムリか。

杉原和道”

“Dear 和道くん

なんで筆ペンなの？
任侠映画見たいな！。

p.s. 手紙の返事は手紙だからね！

from 樹里だよ”

第三章 覚醒の思春期 進路

進路

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

「和道、お前卒業したらどうすんの？」

…もうそんな時期か。

織山に言われて気がついた。

和道は別に興味無かった。

今の自分ならどうとでも生きられる。

そんな漠然とした自信がある。

だが、織山が高校に行く聞いてびっくり。

他の仲間も、意外に高校受ける奴が多い。

働く奴も、

「オレあ、鳶職極める」

なんて言いやる。

……何だ、みんないろいろ考えてるんだな。

オレはどうすっかな。

和道は、織山と同じ高校でも受けてみようかと思った。

来週は進路についての三者面談がある。

妙子はクラスの母親から、面談がある事を聞いた。

「どうするつもりだ？ 和道。高校くらい出といた方がいいと思うぞ？」

久しぶりに好二が和道に話しかけた。

和道は、そう、いつものあの席。

……やっぱりダメだ、この場所。

昔から息苦しい、この場所。

「……俺なんか受けてもいいんかな？ 学校とか、まだわからんけど」

和道は、意識的に虚勢を張った。

「よし、じゃあそっという方向で」

そう言い残すと、さっさと風呂へ向かう酒臭い父親。

和道は、どんな先輩達よりも好二が恐ろしかった。

最初から避難勧告が発令されて、戦闘前からすでに心が折れている。

実際、外では派手に暴れていた和道だが、好二に手を出した事は一度もなかった。

いや、出せなかった。

そして迎えた三者面談。
担任がいつもより態度がデカイので、和道は机を蹴り飛ばしてやった。

教室を出る背中越しに、聞こえてきたのは妙子の謝る声。

ふと、母親はあの担任に何回頭を下げたんだろうと、和道は少し申し訳なく思っただった。

「……さっきはワリイ」

夕方、真っ直ぐ帰宅した和道は、慣れない口調で妙子に謝ってみた。

家には二人だけ。

妙子は怒鳴り付けたい衝動をぐっと飲み込み、静かに話し始めた。

「最近あなたとゆっくり話せなかったから、言えなかったんだけど、お父さんね、来年仕事、独立するの」

……え、全然知らなかった。

好二が今の司法書士事務所に勤め出してから、もう十五年になる。だが時は平成、不況の真っただ中。

事務所の経営も例外なく、苦しくなっていた。

それを機に、好二は漠然と独立を考えるようになっていたのである。

そんな話を去年、大学の同期で既に独立していた山下に話したところ、

「勤続十五年、もう十分恩は返したんじゃないか？」

と背中を押してくれたのだ。

それから好二は独立に向け動きだし、自宅から車で十五分のところで不動産を確保した。

平成不況の真っただ中。

好二にとっても一か八かの勝負である。

「……来年の五月に事務所開きのな」

ふと和道は、祥太がいない事に気付いた。

「……あれ、祥太は？」

妙子は時計を見やりながら、話を続けた。

「祥太はね、今塾に行ってる。あなた覚えてる？ 受験の時、祥太が『お兄ちゃんの仇を取る』って言った事。祥太はね、ホントに、自分の意志であなたが受けた学校を受けるの」

……なんだなんだ、みんなオレの知らないところで。

和道は面食らった。

複雑に気持ちが絡まり縮んで、交差する。

ただ、とにかく金がかかるという事だけは理解した。

「……あなたも家族も、新しいスタートのチャンスなの？」

なんだか申し訳なさそうと肩身の狭さを感じた和道は、いたたまれず一人、家を飛び出してしまった。

第二章 覚醒の思春期 逃避行

逃避行

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

「お兄ちゃん、今日も帰ってないの？」

「今日お父さんと祥太の事、話したんだけどね」

妙子は諦めたように言った。

……お兄ちゃんのせいで、ボクまで学校でヘンな目で見られるんだぞ。

祥太は自分がすっかりしないと、この家はもうダメだと感じていた。

「で、三者面談はどうだったんだ？」

好二の問いに、妙子は言葉を濁した。

「まったく、親の気持ちがいっぽうちも分らん奴だな！」

好一は怒気をウイスキーで流し込んだ。

一方その頃、和道は公園で夜空を眺めていた。

少し離れた通りで、突然けたたましいアクセルミュージックが鳴り

響く。

……先輩達だ。

族の先輩も高校生の人、多いよな。

あの人達、なんでガツコ行ってるんだろ。

夢とかあんのかな？

みんな行ってるから行くのかな？

祥太はなんで受験するんだ？

オレの敵討ち？

いや、それだけじゃない。

アイツのことだ、ちゃんと何か目標があるんだろう。

親父も独立。

ウチじゃ見せないけど、陰じゃ頑張ってるって事か。

オレの知らないところで、みんな頑張ってる。

オレは最近なんか頑張ったか？

自分を守るために、躍起になっていたこの数年。

絶対オレ、あの家で浮いてるよな？

新しいスタート？

みんな立派だよ。

クズはオレだけ。

オレなんか、あの家に戻る資格ないや。

財布を覗くと、三千円しかなかった。
あとは自転車。

……原チャリ盗るか。

いや、自転車のほうが自分の力って感じがする。

取り敢えず、今日はここで一晚過ごすか。

人工的な青白い街灯に、一匹の蛾が振り回されていた、その夜。

翌日の午前中、する事のない和道は、爆竹一箱に火をつけて、学校に投げ込んでみた。

その後空腹を紛らわすため、スーパーの試食コーナーを徘徊する。

そんな節約生活の反面、ビールとタバコはしっかり買う。

ふと、金の使い方が間違っている事に気付き、自分の生活力の無さにアホらしくなった。

二回ほどカツアゲをして資金を増やしたが、生活費にするには端金で、金稼ぎは大変なんだとつくづく思った。

三日ほどこんな生活をしていた和道。

自転車をこぎながら、完全に社会から切り離されている自分を感じていた。

ふと好二と妙子の顔が浮かぶ。

……何やってんだ？ 俺。

かれこれ自転車をこいで五時間あまり。

夕方やつと懐かしい匂いのする商店街に入り、左に一本入ったところの寿司屋で、ようやく和道は自転車を止めた。

……変わってないなあ。

お店にはまだ「準備中」の札が掛かっている。

恐る恐る扉を開けると、板前が何かしている姿が見えた。

「……すいません」

こちらを振り向いた板前は、ツカツカと歩み寄ってくると、おもむろにビンタを一発、すかさず大きな手で和道を抱き締めた。

「どこ、ほつつき歩ってた、おめえは」

樹里の父親だった。

第三章 覚醒の思春期 人の温もり

人の温もり

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「あ、あつ、そうですか、本当にご迷惑おかけして……あ、はい、本当にすみません、ありがとうございます」

妙子は受話器に向かって、しきりに頭を下げていた。

「樹里ちゃんのお父さんから。和道がさっきお店に来て、今夜は泊めてくれるって……」

「何をやってんだ、あのバカ者は！！でも無事なんだな！？」

好二はホツとした分、腹が立って大きな声を張り上げた。

この数日、妙子は和道のクラスメイトや親戚筋など、あらゆる人に電話をかけた。

そして、樹里の家にも連絡していたのである。

携帯電話の普及していないこの時代。

やんちゃな和道だからこそ、あと二日戻って来なかったら搜索願いをだそうと、好二と妙子は決めていた。

……その頃和道は、数日ぶりの風呂を満喫していた。

「ほれ、これでも着てろ」

と樹里の父親が自分の作務衣を持ってきてくれた。

作務衣が初めての和道は、お世辞にもカッコいい着こなしとは言えない。

「なんだあ、着方知らねえのかい？　こつやんだ」

そういうと、樹里の父親はきつちりと和道の襟を正してやった。

「いつもそうやって誤魔化してんだろ。知らないもんは知らない。出来ないもんは出来ない。はつきり言やあいなんだよ、はつきり」

「……おじさん」

剥き出しの感受性を不意に突かれた和道は、堪えきれなくて嗚咽を洩らした。

その後、だし巻き玉子を作ってくれた樹里の父親は、

「あとは樹里と適当に食つといてくれ」

と仕事に戻っていった。

「急にゴメンね」

和道はうなだれるように、樹里に頭を下げた。

「本当に心配してたんだからね。漬物食べる？」

「あ、頂きます」

樹里は薄暗い台所へ向かった。

「でもね……」

樹里は漬物を持ってきて、それを和道に取り分けた。

「行方が分からないって聞いて、もしかしたらウチに来るかもって思ってた。自転車とは思わなかったけど」

「あれ、バレた？」

和道はおどけてみせた。

「……ちょっと寒いけど、少し外、出ない？」

「おっけ」

最近よく逢っていた二人だったが、この土手の上を歩くのは初めてだ。

その間、進路の事、家族の事、ここ数日の事を和道は樹里に話していた。

二人は手頃なベンチを見つけた。

何が気に食わないのか、遠くで犬が吠えている。

「私は和道くんがクズだなんて思わないよ。良いところ、私いっぱい知ってるし。再スタート、すればいいじゃん」

……和道くんは、不良に向いてない。

樹里には、和道が必死に本来の自分を否定しようとしているように見えた。

「でも親父、祥太で金かかるから、オレも、つてのはなあ……」

「優しいね、和道くん。でもちゃんと話し合わなきゃ。説明しないから傷つけちゃうんだよ？」

「樹里ちゃんは高校？」

「うん、そのつもり」

和道は夜空を見上げて言った。

「樹里ちゃんは、何か将来の夢とかあるの？」

「今はわかんない。ただ、もう少し自由に、いろんな事見たいっていうか、考えたいっていうか。だってうちら、まだ十五だよ？」

……ああ、そういう考え方もあるのか。

「もう」十五だと思ってた。

自分の身は自分で守る。

自分のやり方が短絡的過ぎた気が、しなくてもない。

「……オレも高校行こうかな」

「高校生になったら、うちらもつと逢えるよ」

「……樹里ちゃんさ」

和道は今、言うべきか迷ったが、確かなもの欲しかった。

「……うちらつて、付き合ってたのかな？」

樹里は小さく息を飲んだ。

「……わかんない。けど、」

樹里は和道の耳元で、そつと小さく囁いた。

「あたしは、好きだよ」

……こんな自分を認めてくれる人がいる。

顔を埋める様に寄り添う、樹里。

和道は、高鳴る鼓動が伝わるように、そつと樹里を抱き寄せた。

……樹里さえいてくれれば、何とでも生きられる。

身を任せてくれた樹里の体温が、まるで和道と溶け合うようだった。

第三章 覚醒の思春期 誠意を持って

誠意を持って

[illegible]

「おじさん、お世話になりました」

翌日、和道は深々と頭を下げた。

「おうっ、家出じゃなきゃいつでも遊び来い」

「あたしも待つてるから」

樹里が意味ありげに目線を投げる。

「おひめ」

努めてさらりと返すと、和道は自転車にまたがり颯爽と駆けだした。

後ろはもう、振り返らなかった。

「何しに歸つて来た！」

その夜、好二は出会い頭に和道をぶん殴った。

和道はいつもの席で、いつものように膝を抱えて何も言えないでいた。

祥太は二階から降りて来ない。

……あんなに色んな事考えてたのに、言葉に出来ない。

「お前、喋れないのかよ！ お前は猿か？ いや、猿以下だ！！」

嵐が過ぎるのを待て。

そして何事もなかったように……。

和道は振る舞えなかった。

悔しくて悔しくて、ぼろぼろ涙がこぼれた。

好二に罵られる事よりも、今ここで、気持ち表現する方法を知らない自分が、悔しかった。

和道はやつとの思いで、

「……高校受けさせて下さい」

と小さな声を振り絞った。

和道なりの、精一杯の誠意だった。

「……おい、ソレだけか？」

好二は、そのまま黙りこんだ和道に失望した。

自分が独立を控えた今、昔和道が法律家を目指す、と言ってくれた事が励みであった。

好二は心の何処かで、和道が自分のあとを継いでくれる、そんな言葉を期待していたのかもしれない。

黙って聞いていた妙子は、しんみりと言、

「行動で示しなさい」

と和道に言って聞かせた。

翌日、和道は受験する高校を、県立で一番の進学校、東高校に定めた。

織山や他の仲間とは別々になるが、一緒になるのが嫌だった訳ではない。

東高校は、好二の出身校であった。

ただ、好二を見返してやりたい、認めてもらいたいという気持ちだけだ。

だがそんな和道の変わり様を揶揄する連中もいるのが、堪らなく悔しい。

そんなある日、和道はふと思い出したように体育館へと足を運んだ。

「懐かしいな……。何年ぶりだろう」

和道は中洲台へ引越して以来、初めてピアノの前に座った。
ポロロン、と一つ和音を奏でてみる。

……昔はよく、気持ちの吐け口にしてたな。

体育館に突然、力強く低音から始まるピアノ曲が鳴り響いた。

館内ではバスケット部とバレー部が練習していたが、お構い無しかった。

「杉原先輩、スゴくない？ 意外だよな」

そんな後輩たちの中に、七海という生徒もいた。

第三章 覚醒の思春期 その先にあるもの

その先にあるもの

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

中三の二学期。

この間の成績が内申点となる。

和道なりの努力で、素点を十二点も上げた。

しかし、現実には残酷にも、和道の東高校への道を閉ざした。

……やっぱり、親父には勝てないか。

それでも、受験可能な高校は確実に増えていた。

そこで和道は、中堅進学校の三崎高校を受験する事にしたのである。

そして試験も間近に迫った、冬休み。

和道は学校へ来ていた。

この日の午前中は、バレエ部が練習していたのだが、午後は空いていたので和道はのびのびとピアノを奏でていた。

すると曲間で突然、段幕の陰から人が現れた。

自分の世界に浸っていた和道は、飛び上がって思わず悲鳴を上げて

しまった。

「あ、ゴメンなさい、先輩」

「おおう、何？ どしたの？」

有りったけの力で平静を装った、和道。

「あたし、バレエ部二年の相田七海って言います。いつも練習の時先輩のピアノ聴いてました！ 先輩、怖い人だと思ってたんですけど、ピアノ弾けるんですね！ 習ってたんですか？」

……何なのこの子は？

和道は対照的に、「まあね」と素っ気なく返した。

「え……っと、また練習の時聴かせて下さい、失礼しました！」

気まずい空気を察知したのか、七海は逃げるように帰っていった。

……また聴かせてって。

あの子に聴かせてるわけじゃねえつつうの。

「こんにちは、杉原先輩！」

……出たよ。

あれから七海は、廊下で下駄箱で、やたらと和道に馴れ馴れしく絡んできた。

冷たくあしらってもへこたれない七海。

織山たちにかかわれるのも、和道は恥ずかしい。

「あんさ、鬱陶しいんだけど。オレ受験生、忙しいの！ 理解できる？」

ある時、和道は七海にきつく言い聞かせた。

こんな子にははつきり言ったほうが良いに決まってる。

「……すいませんでした」

さすがの七海もショボくれて、和道はせいせいしていた。

それから。

二月十四日の午後。

「受験頑張ってください！」

とだけ言って、七海は和道にチヨコと手紙を渡してきた。

学校だと冷やかされるので、和道は家に帰ってそつと、手紙を読んだ。

「なんか、悪い事しちゃったかな？」

ラブレターだった。

受験終わったら返事を下さい、とある。

「験」の字が左右逆になっていたのが笑える。

ちゃんと返事はしなくちゃ、と和道は思った。

こんな中で迎えた受験。

和道はまさかの三崎高校に合格。

織山も志望校に合格。

仲間には奇跡だと祝福の鉄拳を食らった。

好二と妙子も、喜んでくれた。

だがそれよりも、祥太の私立中学合格の方がビッグニュース。見事に「兄貴の仇討ち」を果たしたのである。

親戚筋への話題性といい、少なくとも和道はそう感じていた。

……祥太にまで抜かれちゃったな。

「祥太、スゴいな、おめでとう！」

和道はそう言いつつも、自分とは対照的な祥太に嫉妬を覚えていた。

……さて、忘れちゃいけない。

数日後、和道は少し離れた公園に七海を呼び出した。

「オレ……さ、カノジヨいるんだ。あれからよく考えたんだけど、カノジヨの事、抜きにしてもやっぱり、七海ちゃんは後輩の一人としか見れない」

……こういうの、苦手だな。

「大変な時期にこんな事言って、すいませんでした。でも先輩合格できて嬉しかったです！」

そう真っ直ぐ見つめ返す七海が、和道は眩しい。
。

そして卒業式。

第二ボタン下さい、とやって来た七海。

……この子は真っ直ぐな子だ。

そんな七海が、和道は羨ましく思えた。
そしてもう、逢うこともないはずだった。

……高校生か。
悪くない。

樹里もいてくれる。

和道はこの時、上を向いているつもりだった。

第三章 覚醒の思春期 その先にあるもの（後書き）

第四章 移民の敗北 7月19日掲載予定

第四章 移民の敗北 初見の情景（前書き）

【あらすじ】

青き中学時代を駆け抜けた和道。

再スタートを切ったはずの高校生活だったが、周囲との価値観のズレに戸惑っていた。

そしてついに運命を変える『一言』に出会ってしまう。

そして和道と樹里は……。

第四章 移民の敗北 初見の情景

第四章 移民の敗北

- - - - -
- - - - -
- - - - -

初見の情景

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

多民族国家、アメリカ。

だが和道は、日本も多民族国家だと思った。

自分以外、周りの人間が違う民族に思えたのだ。

四階の窓から、ぼーっと外を眺める。

向かいの体育棟の屋上にある、プールが涼しげだ。

あのプールサイドが、水泳部に入部した和道の唯一の居場所。

県立の進学校、三崎高校に入学して二ヶ月。

和道は二言三言しか、クラスメイトと話していない。

好二は今日、杉原司法書士事務所の所長として、妙子はその受付として再スタートをきった。

弟祥太も、有名私立中学で新しい生活をスタートさせた。

……それに比べて、腑抜けてんな、オレ。

入学式、和道は標準服で出席した。
だがそれでも和道は、ヒドく浮いていた。

…… あれ、めでたい席なのに。
真っ赤に染め上げてるの、オレだけ？

髪をめでたくした、たったこれだけである。
たったこれだけで、未だに話し掛けてくる人がいない。

周りからすれば、和道が怖く見えたのかもしれない。

和道も自分から声をかける事は、昔から苦手だった。

何より中学時代、有名な悪ガキだったプライドもあり、自分から友達になろうとするなんて、媚びているようで嫌だったのだ。

一服しようとして屋上に向かうと、何人かの先客。

…… あー、さすがに喫煙者くらいいるんだ、と少しホッとした。

「ちわ」

「あ、一年の杉原でしょ！？ キミ、有名だよー」

…… 何だ、コイツら。

三年の先輩たちだったが、呼び捨てにされたのが気に入らなかった。

「杉原、気にすんな」

「あ、ちわつす。清水先輩の連れっスか？」

「おう」

清水は水泳部の先輩で、和道がこの学校で唯一尊敬している男だ。

入学して間もなくの頃。

クラスの窓から見えるプールサイドで、体格もハンパない大男が吊したサンドバックに、えらいハイキックを叩き込んでいるのを見た。

それが空手家の清水だった。

久しぶりに血が騒いだ和道は、それで水泳部に入部したのだった。

そして授業をサボった時は、プールサイドに毛布を敷き、空を見ながらの缶ビール。

そんな時、ふと思う。

……オレは、周りからどう思われてんだろう。

和道は授業が苦痛で仕方なかった。

授業に出ても、何やら難しくて分からない。

だから先生に何か質問されても、当然答えられない。

それが悪ガキ和道の、他人に絶対ナメられたくない、というプライ

ドをヒドく傷つける。

周りの生徒が当たり前のように解答しているのを見て、強烈なコンプレックスを抱く。

「……それじゃ杉原くん。この問三を黒板でやってみてくれ」

数学の先生に言われたが、分からない。

「あの……、ちょっと分かんないッス」

「そうか？　じゃあその隣」

こんな事を繰り返しているうちに、和道は授業のたびに動悸がするようになった。

授業中ちょっとした事で、赤面と冷や汗、手の震えなどが起きる。

それが周りにバレてないか心配で、余計にドキドキする。

一人、別の世界に取り残されたような孤独感。

和道の身に変化が起きつつあった。

第四章 移民の敗北 異変

異変

- - - - -
- - - - -
- - - - -

好二はまだ事務所を開いたばかりで仕事が無いと嘆きつつも、妙子と働ける喜びもありご機嫌だった。

「和道、三崎高校はどうだ？ 中学みたいな不良はなかなかいないだろ」

和道はいつもの席で、いつものように小さくなっていた。

「……そだね」

「これでお前もゆつくり勉強できるかもな」

好二は、和道が法律を勉強したいと言ってくれた事が、本当に嬉しいらしい。

最近になって、妙子から聞いた。

……その場しのぎの言い逃れだったのにな。

「いい加減その髪、やめたら？ 入学式でもあなた一人だったじゃない」

妙子 생각이出して、恥ずかしそうに言った。

……この人たちは、そんな事ばかり。

次の日の土曜の午後、和道と樹里は待ち合わせていた。

二人のデートは大概、樹里の家に比較的近い多賀野駅付近が多かった。

今日は何をしようか、特別決めてはいない。

「あ、和くん見てー、これかわいい」

ショーケースに入った繊細なタッチのシルバーリングだった。

「へー、ペアリングか。けっこう高いな」

「えー、欲しいなー」

「はいはい、また今度ね。樹里、ああいう感じの好きなんだ」

「うん！」

と樹里は甘える様に笑った。

樹里と知り合ってもう五年目になるが、付き合うようになって、意外にも甘えたがりな樹里が、和道は可愛くて仕方がなかった。

と、三人の高校生とすれ違う時だった。

……チャラいな。

だが思い裏腹、和道を激しい動悸が襲った。

すれ違い様、タバコが樹里に触れないかと注意していたのだが、和道は真っ赤に赤面し、冷や汗をかいていた。

「和くん大丈夫？ どうしたの？」

そんな和道に樹里が気付かぬはずがない。

「顔赤い？」

「うん真っ赤」

胸がバクバクする。

……オレ、どうしちゃったんだろう。
昔はこんな事なかったのに。

「もう大丈夫？」

樹里が心配そうに覗き込む。

「ゴメン、次どこ見よつか？」

「うんとね、お茶しょ？」

……きつと和くん何かあったんだ。

人気のない喫茶店に入ると、二人はアイスコーヒーを頼み、樹里は早速本題に入った。

「いつから、さっきみたくなったの？」

「この二週間くらいかな？」

その経緯を、和道が感じたように話した。

「……そつか、じゃあ和くんがみんなの前で、何かしなくちゃいけない時に、なっちゃん感じだね。人の視線が嫌だとか？」

「……そんな感じかな。飯とか教室で食えないもん。とにかく中学ん時みたいに気楽につるめる奴いないんだよ」

樹里は何か嫌な予感がした。

「何かあったらすぐ連絡してね、必ずだよ？」

第四章 移民の敗北　ときめきと不安と、嘘

ときめきと不安と、嘘

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「杉原あ、らしくねえぞ？　ビツとしろ、ビツと！」

「すみません」

和道は久しぶりに、地元の族の集会に顔を出していた。だが、ここも昔のような居心地の良さはなかった。

ここでは進学校の生徒であることが、和道のコンプレックスになっていた。

「大地は最近、顔出さねえの？」

和道は近くにいた、中学の同級生に尋ねた。

するとソイツは先輩に聞こえないように、うめくような声を絞りだした。

「織山は別のチームに入ってたんだよ」

……なんだ、大地来ねえのか。

織山はもつとデカイチームに入ったらしい。

居心地の悪い和道は、酒をあおることくらいしかやる事がなかった。段々、往年の目つきに灯がともる。

「なあ杉原、オレ等と走んねえか？ お前みたいのが欲しいんだよ」
族も跡目に困る時代。

「すんません、自分、チームの看板背負うような器じゃないっス」
段々酔っ払ってきた和道が、トイレトペーパーに火をつけて便所から戻ってきた。

仲間の笑い声に導かれるように、何やら喚きながら走り出す。

「聖火ランナー！」

火に氣をとられてそのまま木に激突、もんどりうって倒れた。

「痛え……。おい、コソコソすんな！！」

騒ぎを覗いていた近隣住民の家に、その火の塊を投げ込む和道。
笑い声と一緒に爆音を響かせ、悪ガキたちは一斉散り散りに消えた。

「お前、酒入った方が面白えよ！」

和道をケツに乗せた先輩が、腹を抱えてバカ笑いをしている。
和道はこの言葉が、片時も頭から離れなくなつた。

和道自身、酒が入れば元の自分に戻れる気がしたのだ。

数週間後、和道の誕生日の三日前。

樹里は新しい下着を密かに身につけて、父親に言った。

「今日は三和ん家泊まるからね」

「おう、気を付けてな。おっとそうだ、あと近いうちよ、杉原くん
に寿司食わしてやるから、遊び来いって言っといてくれよ」

「……うん、わかった」

樹里の父親は、樹里が嘘をついていると見抜いていた。
だが和道なら、いいと思っていた。
職人の父が優しい眼差しで娘を見やる。

この土日、和道の家族は久しぶりに妙子の実家へ幸造と伸子に会い
に行く予定になっていた。

「……って事なんだけど、樹里、ウチ来ない？」

和道は胸が高鳴るせいで、何と誘えばいいのか、台詞を忘れてしま
った。

「うん、いいよ。泊まりなの？」

「樹里さえ良ければ」

和道の胸がひときわ高鳴る。

「……じゃあ、友達ん家泊まるって言っとくね」

樹里の胸は、ときめきと不安と、嘘をつく罪悪感で溢れていた。

…… 大丈夫、和くんだもん。

当日。

二人は食料と酒類を買い込んだ。

リビングでだらだらテレビを見ながら、珍しく樹里も酒を飲む。

和道はかなり酔っ払っているように見える。

ふいに樹里から和道に、もたれかけてきた。

何も言わず腕を回し、額を合わせる、和道。

この日、和道と樹里は二人揃って、ひとつ大人になった。

第四章 移民の敗北 愛は時に、残忍

愛は時に、残忍

三崎高校の生徒が、イベントの打ち上げなどでよく使う飲み屋がある。

呑み処かたりべ。

和道は清水先輩の紹介で、この店に出入りするようになっていた。

——お前、酒入った方が面白えよ！

あの時以来、毎日酒を飲むようになっていた和道。

学校にもよく酒を持ち込んでいた。

そうすれば、授業中の動悸や冷や汗、赤面をやり過ぎたからだ。

「マスター、明日も遅いつスか？」

「ああ、また頼むよ」

かたりべのマスターは、昼間は建築現場で働いていた。店は開店休業状態で、それだけでは生活が出来ない。

帰宅は夜十時頃。

ごく自然な流れで、和道が夕方から店を開けるようになっていたの

だ。

酒はいくらでも飲める。

アップライトのピアノも置いてある。

和道にとっては願ってもない環境だった。

……土夜だつてのに、客入んねえな。

一人酒を飲みながらピアノをほろ弾いていると、がらつとドアが開いた。

「いらつしゃ……おう、樹里か」

「へへ、来ちゃった」

樹里は最近、和道に逢えなくて寂しい思いをしていた。

水商売を始めた高校生と生活リズムが合わないのも、ごく当然のことだろう。

「なんか飲みますか？」

「じゃあカルーアミルクで」

和道は一口味見してから、樹里に飲ませる。

「学校はちゃんと行けてる？」

「行ってるよ、毎日二日酔いだけどね」

そう言つと和道は樹里のとなりに座り、ウイスキーグラスを傾け始めた。

それを複雑な気持ちで眺めていた、樹里。

……お酒飲んでるから和くん、変な発作起こさないで学校行けるんだよね。……でも。

「最近飲み過ぎなんじゃない？ 学校にもバレちゃうよ？ 和くんの身体が心配だよ」

大丈夫、と言いつつ和道は揺れながら便所へ向かった。

「ただいまあ、杉、シュウマイ弁当買ってきたけど食べる？」

十時過ぎ、マスターが帰ってきた。

「お帰りなさいい、頂きます！ あつ、オレのカノジョです」

樹里は軽く会釈した。

マスターが厨房に入ると、自然に和道のテンションが急に上がる。

……なんか、私よりもマスターという方が楽しそう。

独りぼっちの樹里に気付いた和道は、樹里にシュウマイ弁当を勧めたが、樹里は断った。

そんなゴキゲンの和道にも、終電の時刻は淡々と訪れる。

「お、やべえ樹里、早く支度しろ。終電何時だっけ？」

「……まだ少し大丈夫だよ」

和道はマスターに、ちょっと送って来ます、と言うと樹里と一緒に外へ出た。

「ちょっと和くん、フラフラだよ？」

「大丈夫だって。おー誠ちゃん！」

「杉ちゃん！ かわいい子連れてんじゃん」

どうやら飲み仲間らしかった。

和道はこの街では、二十三歳で通っていた。

「じゃあ気を付けて帰るんだぞ？」

そう言うのと改札の前で、和道は雑に樹里を抱き締めた。

……和くんのバカ。

樹里はあからさまに不機嫌に、終電間近の電車に身を預けた。樹里が家に着く頃には、すっかり日付が変わっている。

夜中、音を立てないように玄関を開けたが、父親はまだ今日の売り

上げ計算をしていた。

「お、樹里か。今日は友達んトコ泊まるんじゃないのか？」

「……ちよつと色々あつて。中止になった」

樹里は、和道が自分とは違う世界に行ってしまったような気がした。

第四章 移民の敗北 途切れた思い

途切れた思い

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

「最近和道のヤツ、何やってんだ？」

好二は日本酒をトプトプと注いだ。

「なんかバイトしてるみたいなんだけど、詳しい事言わないのよ」

そんな妙子は、風邪を拗らせていた。

「そうか。でもあれだな、和道もずいぶん落ち着いたんじゃないか？」

「それはまあ、中学の時に比べたらね。でも最近よく飲んでるみたい。酒臭いのよ」

「おお、そうか。一緒に飲めるようになったら楽しみだな」

「お父さん？ まだ未成年ですから」

好二は自分も大の酒好きなので、むしろ喜んでいうようだった。

全くこれだから酒好きは。

妙子は咳に乗じて、露骨に嫌な顔をした。

「兄貴もいろいろストレスあんじゃないの？」

ふいにそれまで黙っていた翔太が口を挟む。

翔太も中学生。

昔は大嫌いな兄貴だったが、自分も中学生になってみて、何故あれほど兄貴が荒れたのか少し解るような気がしていた。

もちろん、兄貴のようにはなりたくないと思っているのだが。

この年の夏、和道は膝の手術のため二週間ほど入院した。

小学校の時の飛び降りで、半月板を損傷していたのだ。その時痛めた首は、今でも左にきちんと回らない。

リハビリは順調で、九月の中頃には学校へ復帰できた。

「なんで入院の事黙ってたの!？」

樹里はカンカンに怒っていた。

「……いや、すぐ退院できるし、樹里もバイト忙しそうだったから、つい」

いつも支えてくれる樹里。

和道は自分なりに、心配をかけまいと配慮したつもりでいた。

「和くん、どんだけ私に心配かけてるか解る？ お酒の事もそうだし、発作の事もそう！ もうバカ！」

そう言うとき樹里は一方的に電話を切った。

ため込んでいた樹里の気持ちが一気に爆発した。

……和くん、全然私の気持ちなんて分かってない。

和くんが分からない。

「どうした、樹里。和道ちゃんとケンカでもしたか」

樹里の父親がのっそりやってきた。

「別に」

むくれた顔の樹里。

「男なんてなあ、カッコいいとこしか見せたがらないんだよ」

……私なら和くんの全部を受け入れられるもん。

「……まあそう、カリカリすんな。頭冷やして気が済むまで話し合えばいいさ」

学校に復帰した和道は、膝がまだ曲がらないため、動き易いボンタンははいて登校していた。

そんな和道をからかいに、二年生のグループがクラスまで来たらしい。

ヤンキーからチーマーへと流れていた時代。
ボントンは少々時代遅れになっていた。

また動悸がする。

和道は一杯ひっかけると、ボール片手に近くのコンビニ裏へ向かった。

樹里の事もあり、なんだかムシャクシャする。

……案の定、居やがる。

和道は脚を引きずりながら、ニンマリと笑顔を見せた。

「オレんとこ来たのは、どいつかの？」

「おおっ、杉原……」

言い終わらないうちに、ボールがソイツの頬にめり込んだ。

「あんま調子こくなや！！ 次はどいつじゃ！」

和道は三崎高校に入って、初めて暴力沙汰を起こした。

第四章 移民の敗北 過去には戻れない

過去には戻れない

[illegible]

停学中、和道は樹里に逢いたくて仕方がなかった。

……もう一度、はっきり自分の気持ちを伝えたい。

授業中、樹里は和道の事を想っていた。

……このままケンカ別れなんて、イヤ。

あ、と樹里は父親の言葉を思い出した。

……そういえば前、お父さん、和くんにお寿司ごちそうしたいって言うてた。

その日の夜、樹里は電話の前をウロウロしていた。

和道に電話をかけたいが、こっちからかけるのは癪だし、またケン力になりそうで怖い。

……やっぱ、明日にしよう。

その時、電話が鳴った。

「……樹里？」

和道だった。

和道も二時間迷った拳げ句の、電話。

「……今、停学食らっちゃってさ。」

「お酒バレたの？」

「いや、違っけど。今度ゆっくり話すよ」

「今度って、いつ？」

樹里は勇気を振り絞った。

「明後日の夜、ウチ来ない？ お父さんがね、和くんにお寿司食べさせたいって」

「え、ホント？」

樹里に満面の笑みがこぼれた。

「お父さん明後日、和くん遊びに来るけどいいでしょ？」

「おうっ、久しぶりだな！ 家出んとき以来か？」

樹里の父親は嬉しそうに目を細めて、一人娘を眺めるのだった。

……おじさんにもしばらく会ってないな。

和道はゆつくりと身支度を整えていた。

振り返るれば、樹里の父親には和道の転機、転機に背中を押されてばかりだった。

初めて遊びに行った時、友達との架け橋になってくれた事。

遊びに行くたびに、一緒になって笑わせてくれた事。

家出した時、抱き締めてくれて、だし巻き玉子を作ってくれた事。

……あの親子には頭が上がらないよ。

髪を整えながらふと将来自分の父親になるかも、と想像した和道は鏡に向かって存分に照れ笑いをした。

「さて、と」

まだ時間がある。

……樹里とゆつくり話すのも久しぶりだな。
なんか緊張する。

ビールを片手に和道は、以前樹里が欲しがっていたシルバーのペアリングを、そっとポケットにしまい込んだ。

その晩。

閉店間際。

じつと唇を噛みしめた樹里は、
独りカウンターの隅に座っていた。

「お父さん、あたし……」

「これでも食え」

遮るようにドンと、父は娘の前にどんぶりを置いた。
特製の海鮮丼。

樹里の好きなイクラが、山のように盛られていた。

父は暖簾を降ろすと、しばらく散歩へ出た。

「和くん、あたし、もうダメだよ……」

独りむせび泣く、樹里の背中。

和道はついに、現れなかった。

一瞬、また寝ようとした和道は、コメツキのように飛び上がったが、巻き戻せない、時間。

……樹里！

しかし、もう、届く事は無かった。

何度も謝ろうと思ったが、このまま消えた方が良さそうな気がする。合わす顔もない。

樹里からも、連絡は来ない。

いや、待っているかも。

……でもやっぱり、樹里の前からこのまま消えた方がいいよ、こんな奴。

嵐が過ぎるのを待て。

そして何事も無かったかのように振る舞え。

樹里が今、どんな気持ちでいるか想像すると、罪悪感でぺしゃんこになる。

こんな大罪人を、酒の力で記憶から消そうとした和道。

それでも自責の念が消える事はなかった。

酒を飲んで柱を殴りつける、毎晩。

余りのうるささに好二が怒鳴り込んできたが、いつものように殴られる前に、和道は壁に拳大の穴を開けた。

「おまつ、和道！！」

好二は和道を殴り倒した。

だが樹里の気持ちを思うと、痛みなど感じなかった。

「どうしちゃったの？ あの子……」

あまりの和道の変わり様に、妙子はうろたえていた。

好二は和道のあの言葉を思い返していた。

——お父さんみたいに、法律勉強したい。

独立して司法書士事務所を構えた好二。

せっかくの事務所を、好二一代で潰すのは惜しかった。

だからこそ、あの和道の言葉が好二の支えだった。

「和道、高校出れば法律の勉強できるぞ？ 今が踏ん張りどころじゃないのか？」

いつもの席で、膝を抱える和道。

そう、いつものように。

嵐が過ぎるのを待……

ガタン！！

「黙れ！！ 法律家だけには、絶対なんねよ！」

それだけ吐き捨てると、和道は家を飛び出していった。

「お父さん？」

妙子と祥太は驚いた。

……オレはそんなに欲張りか？

どうしてたった一つの期待を真っ向否定するかな。

好二は男泣きに泣いていた。

その頃和道は、久しぶりに飲み処かたりべにいた。
和道はドラマの一場面のように、両膝からガクリ、と崩れた。

サーフボードくらいの木製の看板。

古びたピアノ。

そこにはもう、

何も残っていなかった。

第四章 移民の敗北 からくりと鱗

からくりと魚群

「ママ、すべり台するー」

小さな男の子が無邪気に、滑り台へ近づいた。

「ダメッ！ こっちいらっしやい！」

春を装った母親は慌てて男の子を抱き抱え、その場を去った。

春らしい、午前中の陽だまり。

滑り台の上には、ビールのリッター缶とシケモク。

和道は放心したかのように、滑り台から吸い殻をすーっと滑らせた。

……そろそろガツコ向かうか。

三崎高校から少し離れた、茂木中央公園。

三年生になった和道は、こうして毎日、この公園で酒盛りをしてから昼登校するのが日課となっていた。

去年はこの公園に、ずいぶんお世話になった。

寝床が無ければ公衆便所のドアをひっ剥がし、布団代わりにした。

またこの公園は、三崎高の生徒がよく集まって、試験後のお疲れ飲

み会などをする。

それで和道も場所を知ったのだが、たむろしているのが後輩とは知らずに襲撃し、その騒ぎで飲酒していた後輩、十何人かを停学にしまった事もあった。

要注意人物、指定。

不良というより、人間として関わりたくない人。

三崎高付近で知らない生徒はいない。

それでも、三崎高校は和道を退学にしなかった。

代々三崎高には、素行不良で退学になった生徒は一人もいないとか。あと一年、目をつむれば伝統を守れるのだ。

この日、妙子は女性担任に呼び出された。

「……と、このように私どもとしては考えておりますので、この一年、出席日数さえ足りていれば、卒業させたいと思っています。本人にとっても、中卒と高卒とでは雲泥の差があります。是非ご家庭の方でも、ご協力下さい」

妙子は恐縮しきりだった。

と、一通りパブリックなコメントを述べた担任は、さらに続けた。

「ただはつきり申し上げて、杉原くんはクラスの癌のような存在です。普段の……」

さすがの妙子も、息子を癌呼ばわりされてカチンときた。

「先生お言葉ですが和道はああ見えても、根は優しい子なんです。そこまで言われるのは、私……」

次の瞬間、女性担任は鋭く妙子の眼を射抜いた。

「お母さん！」

それはお母さんだから言えるんです！

彼が社会からどのように見られているか、しっかり自覚なさい！
それが甘やかしだと自覚なさい！」

女性担任の言葉に、妙子は目から鱗が落ちたような衝撃を受けた。

その日の夜、好二と妙子は静かにテーブルに寄り添った。

「知らないうちに、勝手な理想の息子像を作っていたのかもしれないな」

好二は、和道の将来を考えて、法律家を勧めてきたつもりだったが、その「息子の将来」は、好二の勝手な願望ではなかったか。

妙子もまた、無条件に和道を信じるあまり、あるがままの息子の姿を見誤ってはいなかったか。

「オレはもう、高校さえ卒業してくれば十分だ。これもオレの勝手な願望か？ 妙子」

「いえ、和道にも私たちに対して責任があるわ。あの時、和道が自分で高校に行きたいと言ったから、私たちは学費を払ったのよ。卒業は最低限の義務だわ」

「えっ？ そうなん！？　すぐそこじゃん」

和道も身を乗りだした。

「先輩、お酒とか飲みます？　お姉ちゃんがバイトしてる店があるんですよ」

……好きも嫌いもねえよ、命だよ。

飲み処かたりべが潰れて以来、あまり外で飲まなくなった和道だったが、これがきっかけで七海とよく飲みに行くようになった。

「七海ちゃん、今カレシは？」

「矢秦にいます」

「じゃあ、けっこう遠距離だね」

和道はお通しのもつ煮込みにハマっていた。

「もう一人は近所でバイトしてるんです。ほら、中洲台の……」

「何、二股なの？　やるじゃん」

だが現実には起きない事が起きるものだ。

ある日、七海は和道と飲んだ後、近所のカレシとデートで、彼が迎えに来る予定だった。

だが七海を驚かそうと、矢秦の男が近くまで来ていて、急に七海に会いたいと連絡してきたのだ。

「どうしよ、先輩」

「とりあえずどっか避難してたら」

……面白くなってきたぞ。

七海は狼狽して、矢秦の男にこの店にいる事を教えてしまっていた。

そして七海は別の店で時間を潰していたのだが、ちょっと様子を見に戻った時、矢秦の男と店の前で遭遇。

そこへ先に店へ来ていた近所のカレシが、タバコ買いに外へ出てきた。

……さあて、ゴングがなった。

店の外で何やら言い争いが勃発。

そのうち店のドアが外れるくらいの勢いで、取っ組み合った二匹のオスが激突。

店主もキレた。

結局、七海は同時に二人の男を失った。

傷心の七海。

別れたから、というよりは男二人をコントロール出来なかった自分への苛立ちか。

「先輩……」

一部始終を見ていた、和道の所へやってきた七海。

「もう少し飲みませんか？」

……まあ少し付き合ってやるか。

今までとは違う、お洒落なワインバー。

「ねえ、先輩……」

上目遣いで擦り寄ってきた七海は、紛れもなく女だった。

この日から和道と七海は、お互い都合のいい関係になった。

第四章 移民の敗北 兄貴の背中

兄貴の背中

- - - - -
- - - - -
- - - - -

祥太は中学生になって、ギターと空手を始めた。

チューナーを使つての、初めてのチューニング。

ぎこちない家庭の空気を忘れさせてくれる、瞬間。

好二も妙子も兄貴の事で、手一杯。

なんだか自分だけ、蚊帳の外にいるような気がした。

……よし、チューニング完了！

祥太は覚えてたてのコードで、お気に入りの曲を時々立ち止まりながら、弾くのだった。

……ウチの家庭は至って普通だ。むしろ恵まれているほうだ。父さんは手は早いが、二人とも間違つた事は言っていない。現に自分は一度も殴られた事はない。

祥太はつくづく、和道は甘つたれたヤツだと思った。

……それに。

弦に弾かれたピックが落ちる。

……兄貴のおかげで、父さんのプレッシャーを感じる。

祥太は法律家ではなく、教育者になりたかった。だが、好二の思いを知っているだけに、将来の夢には極力触れずにいた。

……全部兄貴のせいだ。

祥太は激しくギターを掻き鳴らした。

そんな祥太も中三になると、ギターはもちろん、空手でも東日本を制するほどに成長していた。

この頃には背丈も和道より高くなり、その体格とイカツイ風貌は、悪役俳優にスカウトされるほど。

そんなある日のことだった。

祥太が道着に身を包んで、自宅前で修練を積んでいた時。

「おい祥太、全国レベルとやらのローキックを見せて見る！」

酔っ払った和道が、絡んできた。

……失せろ、チンピラ。

祥太は、たかだか街の喧嘩屋ごときに、一瞬でも怒りを覚えた自分

を恥じた。

だが和道はお構い無し。
キックミットを装着し、しゃがみこんだ。

「ほれ、早く」

祥太は手加減して、一発入れてやった。
だが意外にも、和道がキックミットの受け方を知っている事に驚いた。

「ほら、来いよ」

祥太はなんだかイライラした。

ドスッ！

「おらあ！」

ドスッ！！

「どうした、本気見せろや！」

祥太は思わず渾身の一撃を見舞った。

……バカだ、兄貴は。

おとなしく倒れればいいものを、意地で踏張った和道は、キックミット越しでも手首を痛めた。

「……あ、っ痛え」

うずくまった和道はこれ以来、手のひらを返して物を持つ事が出来なくなってしまった。

「おい祥太。オレにもやらせろ！」

……ったく、面倒くさいな。

「ちょっと、そんな脚上がんない、もうちょい下」

……っと！

思いがけず祥太は、横に一步踏み出した。
次はちゃんと構える。

「いくぞ、ッラァ！」

ドスッ！

「もういっちょー！」

……兄貴、全然腰入ってないよ。……でも。

予想外に力強いのを肌で感じた祥太は、兄貴も兄貴なりに何かと戦っているんだ、と直感したのだった。

第四章 移民の敗北 制服という鎖

制服という鎖

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

梅雨が明け、本格的に暑くなりだした頃。

その日の昼休み、和道は担任に呼び出された。

「これ、ご家族は？」

「知りません」

「とにかくこれは今、受け取る訳にはいきません」

誰も見当たらない廊下を通り抜け、プールサイドでぶかり、一服していた和道。

自分なんて。

ただの厄介者じゃないか。

ふと思い立って、退学届を書いたのだ。

和道にしてみれば、日頃からクラスのゴミだの癌だの言っていた担任が、退学届を拒む理由がわからなかった。

だが担任にしてみれば、和道といえども生徒。いくらなんでもこんな気紛れで、大事な決断をさせる訳にはいかない。

教師としての思いやりだった。

その日の夜。

「お前が高校行きたいって言ったんだろ？ 学費まで払ってもらって、せめて卒業するのが筋じゃないのか？ その後好きにしろ」

好二にそう言われて、和道は言葉に詰まってしまった。確かに筋が通らない。

「先生は出席さえしていればいいって、おっしゃったわ」

……筋は通さなきゃな。

それから和学校生活。

和道は何も言われないかわりに、誰にも相手にされなくなった。

教室はまるで、和道など存在しないかのような空気。

球技大会の時、バレーコートの脇で酔い潰れて寝ていても。

タバコでも、酒でも。

教室まで宅配ピザを呼んでも。

寂しくなつて、体育科の先生にバケツ一杯の水を被せたが、それでも特になし。

そんな話をベッドの中で七海にしても、手応えなどあるはずがない。

生殺しのような時間だけが過ぎていく。

和道はとにかく毎日学校に行けるように、部室にウイスキーをボト

ルキープしておいた。

手元に酒があれば、なんとかなる。

「杉原、ちよつと」

何かと思ったら、先生が試験問題を教えてくれた。

こんなことが何回あったろう。

……みんな大学入試で大変なんだろうな。
邪魔だよな、オレ。

ついに三年間、喋る機会なかったな。

和道はまた、体育館でピアノを弾くようになった。
この頃からまるで導かれるように、作品を書き蓄めていた。

……卒業まで、あと何日だ？

そんな事ばかり考える毎日。

まさに生殺し。

飼いきれ。

嵐が過ぎるのを待て。

そして何事も無かったように振る舞え。

やっとの思いで迎えた卒業式。

卒業証書。

こんな紙切れ一枚のために……。

和道は私服を持ってきていた。

式が終わると、制服をドカンとゴミ箱に投げ捨てる。

足枷を断ち切ったかのように、和道はついに街へと解き放たれたのだ。

第四章 移民の敗北 制服という鎖（後書き）

第五章 レイモンドと異邦人 7月26日掲載予定

第五章 レイモンドと異邦人 R a Y M O N D 1（前書き）

【あらすじ】

これ以上迷惑をかけられるか。

高校卒業と同時に、和道は実家を飛び出した。

だが酒浸りの男に優しい街は、数少ない。

ここは日本最大の歓楽街。

和道はこの、喧噪渦巻く街に流れ着いた。

第五章 レイモンドと異邦人 R a Y M o N D 1

第五章 レイモンドと異邦人

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
R a Y M o N D 1

「この辺にオレの歯、落ちてませんでしたか？」

ママは、自分の店に相応しくない男二人に若干、たじろいだ。

ギャラリー&カフェ、
異邦人。

「……いや見てませんけど、どうかされたんですか？」

ママは社交辞令的に言葉を紡いだが、男を見れば一目瞭然だった。

蛍光ピンクの髪に腫れた顔。

鼻に牛のようなピアスをした男には、だらしなく前歯が二本、無い。

和道は昨夜、身分証明できる物が欲しいと思い、原付の免許を取ろうと思った。

そして前祝いだ、と後輩数人と飲んだ帰り道。

原付で気持ち良く走っていると、後ろから車が煽ってきた。お前何様だ、と和道は蛇行運転を始めたのだが、勢い余って転倒してしまった。

和道の歯が無いのを見て、後輩達は慌てふためいたのだが、当の本人は「帰るぞ」と、何事も無かったかのように走り出したらしい。

「らしい」というのも、和道は酔いで全く事故を覚えておらず、朝の目覚め一発、飛び上がった後輩に電話をしたのだった。

そんなこんなで取り敢えず漆田と事故現場を訪れ、目の前にあったこの店を訪ねてきたのである。

仕事まで時間もあつたので、和道と漆田はこの異邦人という店で一服する事にした。

打ちっぱなしのコンクリートと、柔らかなBGM。

店内ではちょうど、絵画の個展をやっていた。

コーヒーで堪らなく前歯が痛むが、和道はこの店の雰囲気が入った。

「いいじゃん、この店」

コーヒーを下品に啜ると、漆田はいつもの早口で言った。

漆田礼司。

幅広い人脈には定評のある、闇の人材ブローカーだ。

国内外から漆田を頼ってくる輩は多い。

ただ時々早口過ぎて、何を言っているか解らない時がある。

「音楽やってる、でしょ？」

「……誰だい？ アンタ」

和道のどこを見てそう思ったのか、いきなり話しかけられて、びっくりした事を思い出す。

日本最大の歓楽街の一角。

レイモンドという、危険な匂いが鼻を突く、バーでの事だった。

だが一番驚いた事は、全くの別ルートで中学時代の悪友、織山もこの店に出入りしていた事だろう。

「大地！」

「和道！こんなトコで何やってんだ？」

意外な再会だった。

和道は高校を卒業すると、実家をすぐに出た。

これ以上迷惑はかけたくない。

生活のためバイトをいくつもやってきたが、永続きしない。

仕事中は当然、酒を抜いていたのだが、そうすると人目が気になり

動悸がした。

相変わらず赤面や手の震えがヒドくて耐えられない。

それに、非常事態にアドリブを利かせて対応する事が出来ないことに気付いた。

頭の中が真っ白になる。

……酒だけは絶対止められないな。

こうして段々、まっとうな仕事が出来なくなった和道は、この悪名高いレイモンドに流れついたのだった。

第五章 レイモンドと異邦人 R a Y M o N D 2

R a Y M o N D 2

- - - - -
- - - - -
- - - - -

陽射しとはうらはらに顔色の悪い和道が、ノートと白紙の五線譜を携えて異邦人へとやってきた。

先日、自分の歯を探しに来て以来、和道は異邦人へと通うようになっていた。

……ここにはピアノがある。そして、刺激的な空間だ。

異邦人はギャラリー&カフェ、と銘打っている通り、ギャラリーで様々な芸術表現者にスペースを提供していた。

絵画をはじめ、写真、音楽、創作劇、ダンス等多岐に渡り、和道が特に心打たれたのは、あの滝澤俊太郎本人による詩の朗読会だった。

和道はこの刺激的な空間に身を置いて、自身の音楽創作の拠点としていた。

それは、ありのままの感情を焼き付ける作業。

「ずいぶん熱心ね」

異邦人のママが注文のビールを運んできてくれた。

だが和道はそれには答えず、ひたすら心の痛みと向き合っていた。

…… 一つ年上の彼女に出会ったのは、一年半前。

和道は生まれて初めて、一目惚れをした。

それをきっかけに、七海との体だけの関係にもピリオドを打った。

だから彼女が告白を受け入れてくれた時は、本当に嬉しかった。

それから一年半、和道は変わらない情熱を持ち続けていたが、彼女は違った。

…… 一体いつ頃からだったんだろう？もしかして最初から！？

胸の痛みに、和道は悲鳴を上げそうになった。

何度もデートをした。

何度も笑い合った。

何度も食事をして、

たまには涙を見せた。

ケンカもして、

二人とも謝って、

心を重ねて、

体も重ねた。

和道は彼女を恋人と呼び、

「……」

思わず唸った和道は、ビールを流し込んだ。

……彼女は和道をストーカーと呼んだ。

偶然街で会った時、彼女は連れの男の後ろに身を隠し、こう言った。

「もう、いい加減にして！私にまとわりつかないでよ！！」

「おめーか、ストーカー野郎！」

連れていた見知らぬ男が、和道の胸ぐらを掴む。

……何だ？これは？

状況が飲み込めずスイッチの入りそびれた和道は、この、なんだか分からない男に、言いたいように言わせていた。

ただ途中で「警察」という単語が聞こえて、チョーパン一発、反射的に逃げてきた。

嵐が過ぎるのを待て。

そして何事も無かったように振る舞え。

……これが俗に言う、二股、ってやつか？

ふと、七海が二股をかけていたのを思い出した。

男たちが争っているのを、面白おかしく見ていた和道。
あの男たちの気持ちがやっと分かったような気がした。

と同時に、そんな七海と体だけの関係を持っていた自分に、吐き気がした。

……愛って何だ。

和道は人の何を信じればいいのかやら、分からなくなっていた。

ピリリリリ、ピリリ……

一心不乱に譜面を書いていた和道の脇で、唐突に携帯が鳴りだした。

……まったく空気が読めねえ奴だな。

漆田だ。

……求人募集だな？

和道は電話に出ずにビールを飲み干し、荷物をまとめると、レイモンドへと急いだ。

……次はどんな仕事持つて来たんだ？

異邦人とレイモンド。

この、全く異なる世界に入り浸る自分は、どこの世界の人間だろう
と思った。

第五章 レイモンドと異邦人 不機嫌な女

不機嫌な女

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「おはようございまーす、今日もよろしく願います」

スタジオに入ると、和道はスタッフに挨拶をした。

また作業の続き。

「……このフレーズ、右いっぱい振って、800Hz付近抑えてみて下さい」

和道は1stアルバムのレコーディング中だった。

高校時代から書き蓄めた六十曲余りから、十曲を選んだ。

漆田から紹介された、グラフィックデザイナーのデヴィンというアメリカ人が、和道の音楽をいたく気に入り、ジャケットデザインを担当してくれる事になっていた。

大柄で陽気だが、それでいて繊細な仕事をする。

……まったく、漆田の人脈は何でもありだな。

ピリリリ、ピリリリ……

「ちょっとすいません」

慌てて和道は別室に移った。

「おう、久しぶりだな、どうした」

地元の後輩からだった。

「先輩にちよつと話してもらいたい子がいるんすよ。風俗の子なんすけど、態度悪くて」

「しょうがねーな。じゃあ一回顔出すわ」

和道は久しぶりに青春の風を感じて、少しホツとするのだった。

一週間ほどして、地元へ帰ってきた和道。

夕方、後輩たちと落ち合い、早速その子と話が出るシチュエーションに持ち込んだ。

その子は「今日、杉原先輩が来る」と聞いて、すっかり警戒していたようだった。

有名ブランドのジャージをだらしなく着こなしている。

「名前何ての？」

「……麻美です。私をどうするつもりなんですか？」

……何かトゲのある子だな。

「別に売り飛ばしたりはしないから、安心しなさい」

麻美の表情が険しくなった。

「何か荒れてるみたいだけど、あいつらと何かあったの？」

麻美はうつむいた。

「みんなとは何もありません」

「じゃあ、どしたん？」

和道は話の流れで聞いたただだったのだが、麻美はあからさまに面倒くさそうだった。

「先輩には関係ないじゃないですか」

……生意気だな。

「麻美ちゃんさ、それは誰かに話した事あんの？」

麻美は首を横に振った。

取り敢えず、和道は紙に自分の電話番号を書いて、麻美に手渡した。

「ま、良かったら。別に獲って喰うわけじゃないから」

「……」

小さく下を向いたまま、麻美は何も答えなかった。

さて、夜は別件。

和道は一升瓶をらっぱ飲みしながら、何人かで山奥に来ていた。交渉相手、というかその相手も一緒だ。

和道はこの件の詳しい事情は知らない。

ただ万が一の時は現場をまとめてくれ、と以来されているだけの事。

一人山奥へドンドンと分け入る和道。

「ちょっと、危ないッスよ！」

「おあつ！」

酔っ払い和道はB級コントのように、崖から転落した。

和道はすぐに起き上がったつもりだったが、しばらく気絶していたらしい。

幸い大きな怪我も無く、無事に帰宅した和道だが、ふと携帯に伝言メモがある事に気付いた。

「誰だ？」

麻美だった。

第五章 レイモンドと異邦人 大地

大地

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

ピンポーン。

和道が急いているのを嘲笑うかのような、チャイム。

ガチャ、つとドアが開くと、和道は連れの女の子を置いて、一目散に便所へ駆け込んだ。

「ま、キミも入んなよ」

織山がそう言うのと、麻美は「お邪魔します」と恐る恐るマンションへ上がった。

しばらくして、落ち着きを取り戻した和道が部屋へ戻ると、派手な先客がいた。

「ユカです」

「マリでえーす!」

これ見よがしのVサイン。

「大地ー、いつの間に女囲ったんよ?」

「おととい知り合った。和道もその子誰よ?」

「麻美ちゃん。地元の後輩だよ、大地知らね？」

和道はこうして気分転換がてら、麻美を地元から連れ出してやるようになった。

レイモンドで再会した和道と織山は、それ以来、織山の家で暇さえあれば昔話を肴に、飲み明かしていた。

「……こいつ、和道。昔は悪かったんだぜ」

「人の事言えんのか？」

二人の先客は、遙か北の都でキャバ嬢をしていたそうで、最大の歡樂街を夢見てこの街にやって来たという。明け方、無防備に道端で寝ていた二人が、通行人に空き缶を投げられているのを織山が見て、拾って来たらしい。

「おまえら、居着くんじゃねえぞ？」

「はい！」

織山の言葉をしっかりと聞いているのか、ユカとマリは底抜けの愛嬌を振りまいた。

「あ、そうだ。和道、葬式行く？」

「オレはパス、漆田の関係で」

関係団体の長が亡くなり、その葬式に二人も呼ばれていたのだ。

和道は、漆田の身内のイベント興行がダブルスタで行われるので、レイモンドの仲間とケツ持ちとして顔を出す事になっていた。

……あそこのVIPルームはゆったり出来るんだよな。

思わず顔がほころぶ。

和道は正直、クラブ遊びに興味は無かった。

だが、ダブルスタのVIPは静かで、なおかつフロアの様子もモニタリング出来るので、ゆっくり酒が飲める。

その当日、ダブルスタの前に荒っぽい運転の高級車がズラリと並んだ。

「杉原さん、お持ちしますよ」

ニヤリと漆田は和道のセカンドバッグを持つと、VIP用エスカレーターを使い、一般客に和道を見せつけるかのように振る舞った。
漆田は、こうした人を立てる演出が好きだった。

……大地を驚かせてやるか。

和道は葬式中であろう織山に電話をかけてみた。
と、じきに切られた電源。

「おまつ、シャレンなんねえって！ 小指イツたかと思った」

その夜、オールバックにビシッと決めた、喪服の織山はその状況を事細かに話し出した。

和道はおちょこ片手に、腹を抱えて笑っていた。

……この稼業、大地がいるなら楽しいか。

一緒にバカをしていた中学時代。

いろいろ悩んでいたが、今思えば若かった。

そんな青春時代を共にした織山だけは、信じられるような気がした。

第五章 レイモンドと異邦人 独白

独白

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「……OKです、ありがとうございました！」

するとスタジオに拍手が起こった。

和道の1stアルバムも、ミックスダウンまで終了した。
和道はマスターリングまで同席するつもりだ。
そしてプレスは台湾で行う。

ジャケットもデヴィンがなかなか良い仕事をしてくれて、満足だった。

「麻美ちゃん、何飲む？」

「私はアイスコーヒーで」

「ママ、オレはいつもの」

「はい、ビールね。それにしても杉原くんが女の子連れて来るなんて、珍しいわね？」

その日の午後、和道と麻美は異邦人へ来ていた。

「地元の後輩なんですよ」

「あら、そう?」

勘ぐるようにママに見られて、麻美は恥ずかしかった。

自分のアルバムについて熱心に語る和道の姿が、麻美の瞳には無邪気に映った。

……周りの人は怖いけど。

麻美は、何かと自分を気遣ってくれる和道は、優しい人だと思うようになっていた。
少なくともあんな男達より。

「……先輩、この後時間あります?」

もう少しだけ、麻美は和道と話したかった。

両手いっぱいコンビニ袋を抱えた和道は、思わずよろめいた。

「ちょっと先輩、そんなに飲むんですか?」

公園のベンチで待っていた麻美が笑う。

「無いよりはあった方が いい だろ?」

ひとしきり乾杯した後、麻美がぽつりぽつりと話し始めた。

「あのね、先輩。先輩は女の子の事、汚いって思った事ありますか？」

和道は足を組み直して、あのストーカー呼ばわりした女を思い出していた。

「……いや、特にないかな」

「……私、初めて付き合ったカレシに、汚いって言われたんです」

それは絞りだすような声だった。

和道は次の言葉を待ったが、その沈黙は長かった。

「どした？」

「私、汚い女なんです……」

やっとの事で麻美はそう言うと、両手で目頭を押さえた。
和道はなんとなく想像がついた。

「無理して言わんでいいぞ？」

「私、お兄ちゃんに襲われたんです、無理やり、嫌だって、イヤっ

て言っただのに！」

麻美は感情が高ぶって、震えていた。
和道が体勢を変えようとすると、麻美はビクツと身構えた。

麻美の言うお兄ちゃんとは、小さい頃から遊んでもらっていた、十歳年上のお隣さんだった。

中三のある日、麻美はドライブに誘われ、何の疑いも持たずについていったところ、山道を少し入った車中でレイプされた。
そしてそれが麻美の、初めてだった。

その男は隣家の息子で妻子持ち。
騒ぎになるのが怖くて、麻美は誰にも打ち明けられずにいたのだ。

「……それで、カレシは初めてで、私は初めてじゃないって言って、
そしたらいろいろ聞いてきて」

……それで汚い、って言われた訳か。

激しく嗚咽する麻美が過呼吸気味だったので、和道はコンビニの袋を渡した。

ついていく、お前が悪い。
彼はそうも言ったらしい。

……それで自分を傷つけるようなことするのか？

和道は、なぜ麻美が風俗で働いているのか、分かるような気がした。

第五章 レイモンドと異邦人 その夜、

その夜、

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

機嫌良さげに麻美は鼻歌を歌っていた。

「恥ずかしいから止めろって」

和道のアルバムの曲だった。

女性に不信感を持つ、和道。

男性に不信感を持つ、麻美。

同じ匂いを感じたのだろう。

麻美はあれ以来、時間の許す限り和道にくっついてまわった。和道もレイモンド以外なら、それを許した。

大地の家にも常連になった麻美。

大地は最近千尋というカノジョができ、居座っていたキャバ嬢を追い出して二人で暮らしていた。

「和道、今日の撮影はどんな感じだった？」

織山は和道に酒を注いだ。

「何、チヨロいよ、怒鳴って暴れるだけだもん」

ある番組で使う、モザイク越しのヤラセ乱闘シーンの撮影だった。
酒さえあれば、何でもできる。

「おっ、ずいぶん豪勢になったね、千尋ちゃん」

「お待たせ！」

今日は和道と麻美、織山と千尋の四人で鍋パーティー。

「いやあ、やっぱり鍋には日本酒だな」

「しかし和道、お前いつつも酔っ払ってるよな？」

……杉原先輩は、これまでどんな人生だったんだろう。

麻美はふと気になって、つい尋ねた。

「織山先輩、杉原先輩って、昔はどんな人だったんですか？」

「こいつはねえ、ヒデーんだ！」

酔った織山は待ってましたと言わんばかりに、面白おかしくまくし立てた。

「でも和道はよ、ホントは優しい奴なんだよ」

……何の事だ？

「中一だったかなあ、夜中みんなで花火して。うるさくて通報され

たんよ。そしたら警察がオレの名前教えろって話になって。そしてらコイツぶちギレて、なんでオレの名前は聞かねえんだって」

「それはあれだ、大地がアタマだと思われたのが、気に入らなかったんだよ」

和道がすかさず突っ込んだ。

実際そうだったのだが、織山の中では和道の友達思いな一面としていい話になっていたようだ。

二時間後。

和道は酔い潰れて寝てしまった。

「なんで杉原先輩は、いつも酔っ払ってるんですかね？」

麻美は織山に聞いた。

「きつと、寂しいんだよ」

織山は真顔でそう言いながら、吸盤を和道のおでこに張りつけた。

しばらく放置された和道の額は、赤紫の立派な日の丸になっていた。

大地と千尋が大笑いするのに麻美はムツとしたが、何も知らない和道の寝顔は、純粹な人そう、と思った。

第五章 レイモンドと異邦人 926 1

926 1

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「……マスター、同じの下さい」

いつもながら、マスターの存在感の消し方には恐れいる。

昔はかなりの有名人だったこの人物は、どれだけの闇を見てきたの
だろうか。

「……どうだろね？ やつてみる？」

レイモンドのカウンターには、織山、漆田、和道が並んでいた。

「……オレは乗る」

「オレも」

アジア系グループとの仕事だった。

まとまった金になりそうだ。

「じゃ、こっちサイドの窓口が決まったら、また連絡する」

そう早口で言い残すと、漆田は店を後にした。

「ところで和道、麻美ちゃんと付き合っちゃえばいいじゃん」

ビジネスの話から一変、思わず和道は、カクテルを吹きそうになった。

……なんだ唐突に。ま、これが大地の良いところなんだけどね。

「急になんで、そう思う？」

「やっぱ、新しい恋しねえと、忘れらんねーぞ？」

和道は大地に、女性関係も話していた。

大地なりに心配してくれているのが嬉しかった。

「麻美ちゃん、良い子じゃん。お前等の関係、分かりづらいんだよ。いつも一緒にいるくせに」

「……そうだね」

和道は遠くに視線を投げた。

……なんだか気付いたら、一緒に、いたんだ。

翌日。

異邦人。

店のBGMとして和道がピアノを弾いているのを、麻美は離れた席から見守っていた。

……この姿が一番、自然。

四六時中一緒にいる麻美は、そう感じていた。

「麻美ちゃん、仕事どうよ？ 男性不信は相変わらず？」

席に戻った和道は、いつものようにビールを口にした。

「……うん。先輩はどうなの？ まだ女の人信じられない？」

「うん。……ちょっと、出よっか」

異邦人の傍には、遺跡公園がある。

その中を二人は、ごくゆっくり歩いていた。

「うちらって、どういう関係なんだろうな。大地に昨日言われたんだ、不自然だって」

「そうですよね」

女性に不信感を覚える和道。

男性に不信感を覚える麻美。

和道の少し後ろを麻美が着いて行く。

「似た者同士、か。うちら、どうしたら変われるんだろうな」

和道も麻美も、たぶん同じ事を考えていた。

日もだいぶ傾いてきて、しばらく無言で歩いていた二人。

「……なあ、麻美ちゃん」

和道から動いた。

「マイナスとマイナスは、プラスになるんだって。オレら二人なら乗り越えられるような気、しない？」

「する」

麻美は即答した。

ずっと待っていたような気がする。

後ろを歩いていた麻美が、ツツツと和道の前に出て来た。

「私、先輩の彼女になりたいです」

照れながらも麻美は、向日葵のような笑顔でチョコンとお辞儀をしたのだった。

第五章 レイモンドと異邦人 潜伏

潜伏

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「どうした？」

和道がレイモンドでダーツをしていた時だった。

「ちょっとマズイ事になっちゃって……」

「もうちょい早い段階で電話してきなよ」

高校時代の飲み仲間だった。

知らないうちに、こっち側の世界のダミー会社の役員になっていて、急に怖くなったという。

こうした場合、必要以上に首を突っ込まないのが鉄則だ。

「じゃあ、逃げるのね」

すぐに西側に連絡を取った和道。

「……って事なんですよ、しばらく預かってもらえないスか？」

結局、西日本内陸部に潜伏先を用意してもらった。

ピリリリリ、ピリリリリ……

……今度は何？

漆田だった。

「はい、え、レイモンド。うん、はい？ そうなの？ 大地は？」

仕事のトラブルだった。

最近取り締まりが厳しいとは思ったが、そろそろ危ない。仲間が、といつても横の繋がりはないので誰だか知らないが、何人が摘発されたりらしい。

大地もまだ足が着いてなかったので、二人それぞれ、しばらく潜伏する事になった。

「……うん、そうなんよ。急にごめんな」

「気をつけてね」

この頃の麻美は、風俗を辞め、実家と和道の家を往復する毎日を送っていた。

和道は地方の農村へ入り、住み込みで農業を始めた。

思いの外大変な仕事で、だが和道には新鮮で楽しかった。

朝は五時に畑集合。

力仕事は手首や腰、膝があまり良くない和道には大仕事である。
また雨の日など、どうしても朝から飲んでしまつて、親方によく怒られた。

だが、和道は思った。

……田舎つて案外怖えな。

近所付き合いが濃密な分、恨み辛みが溜まつたモメ事は大変みたいだ。

よく親方も「アイツは山に埋めてやる」と言っていた。
本気で漆田を紹介してやろうかと思うほど。

また、爺さまもぶつ飛んだ人で、何を思ったか別のバイトの子をトラックで轢いて病院送りにしてしまった。
和道と一緒に火の不始末をお越し、村一番の火事を起こした事もある。

こうした中で和道は漆田と連絡を取り合い、情勢を見極めていたのだが、結局収穫の時期丸々農家で過ごす事になった。

おかげで数ヶ月後、帰る頃には和道の体格は一回り筋肉質に大きくなっていた。

「麻美、元気だったか？」

和道が家に帰ると、麻美とカレーの匂いが待っていてくれた。

「和道くん！」

和道と麻美は軽くハグをした。

「私、新しい料理覚えたんだよ？」

……それでカレー、ってところがまた可愛いよな。

「んん、美味しい！」

「ほんと？ 良かった。カレーって家庭毎に味違うから、和道くんの口に合うか心配だったんだ」

「おう、バッチリ」と言いながら、ふと実家の事を思い出した。

好二や妙子は元気になっているだろうか？

祥太も……大学生くらいか？

「……和道くん」

麻美から密着するように、隣へ座った。

「大丈夫？」

「うん」

「手、握ってもいい？」

麻美も握り返した。

和道は麻美の目を見ながら、ゆつくりと肩に手を回す。
腕の中で麻美がリラックスしているのを感じ、再びアイコンタクトを取る。

ゆつくりと和道は、麻美と額を合わせ、優しく鼻の頭にキスをした。
微笑む麻美。

もう一度確かめるように、麻美を見つめた。

静かな室内。

和道は優しく、今度は唇を合わせてみた。

「……もう一回して」

麻美が擦れた声で言った。

和道は麻美の口を吸い、今度は舌を這わせる。

その瞬間、「あ……」と麻美の口から漏れた。

これが二人の初めてのキスだった。

第五章 レイモンドと異邦人 家族

家族

- - - - -
- - - - -
- - - - -

中洲台の街灯が切れかかっているのか、チカッ、チカッと瞬いていった。

「和道のヤツ、あれから連絡よこさないな」

好二は最近お気に入りの焼酎を、グラスに注いだ。

「どこで何やってんのかしら、ご飯ちゃんと食べてるかしら……」

妙子は目に見えて、やつれていた。

和道が家を出て四年、連絡は最初の一年目に一度あっただけ。

「まあ、ニュースにも名前出てこないし、まっとうに生きてるんだろ」

「お父さん、当たり前でしょ？　きっとあの子なりに精一杯やってるわよ」

最近、好二はシヨボくれていた。

「お父さん、今日はもうそれくらいにして」

妙子はむしり獲るように焼酎ボトルを奪った。

去年の夏、祥太は泣きながら「ボクは学校の先生になりたい」と言
った。

「父さん、ごめんなさい」

とも。

その言葉を聞いて、好二はショックだった。

司法書士事務所の跡継ぎがいなくなった事もある。

しかし、和道を跡継ぎの重圧で苦しめて以来、好二は、祥太には好
きな事をさせてやりたいと思っていた。

「それでも祥太はプレッシャーを感じていたのか」

まだ子供だと思っていた祥太が、そこまで悩んでいたとは気付かな
かった。

「まったく、父親失格だ」

「お父さん？ お父さんがいつも子供たちの事を考えていたのは、
誰より私が知ってるわ」

ばやく父親に母は毅然と言った。

「でも、親の思い通りにはならない。『そっちに行っちゃ危ない』

と思って手で塞いでも、そっちに成長する子供は、指の間からでもすり抜けていくのよ」

いつになく妙子は饒舌だった。

「和道があの時、受験に受かったとしても、結果はこうなっていたと？」

「あたしはそう思うようになった。子供は親の持ち物じゃない。一番近い他人なのよ」

「他人、つてのは言い過ぎじゃないか？　だが、親が子供に教えられる事なんて、たかが知れてるのかもしれない」

ただいま、と祥太が帰ってきた。

「おい、祥太。お前も一杯付き合わないか？」

これも血筋だろう、祥太も大の酒好きだった。

「どうしたの？　マジメな顔して」

祥太はオヤジ臭くビールを流し込む。

「祥太は教育学部の学生として、教育ってなんだと思う？」

直感的に兄貴の話をしてたんだな、と祥太は思った。

向かいの駐車場で、何やら若者がはしゃいでいる。

「……とまあ、ボクは思っただけだね」

そう言いつと、熱を帯びた教育論者は缶ビールを逆さに、最後の一滴まで飲み干した。

そして最後にこう付け加えたのだ。

「あと、自分でやろうとしている事には、手を出さずに見守ってあげる。それも一つの教育かもね」

第五章 レイモンドと異邦人 926 2

926 2

- - - - -
- - - - -
- - - - -

その日、和道は黒塗りの高級車の後部座席で、普段よりハイペースな飲みっぷりだった。
頭の形の良い和道は、それを見せつけるかのような五厘刈りに手入れの行き届いた口元の髭。

対照的に助手席で靴を脱いで、足を投げ出す漆田。

「飲んでんの、バレんなよ？」

病院へ着く前に、和道に釘を刺した。

「ご無沙汰してます、杉原です」

「漆田です」

「おう、入れや」

予想外にかん高い声が響く。

「失礼します」

入り口で挨拶をする和道と漆田を、その人物は病室に招き入れた。

いかつい男がベッドサイドに張り付いている。

「いかがですか？ お加減の方は」

「なあに足一本だけよ、退屈しとるわ」

日頃お世話になっていた人物だった。

昨夜、何者かに車ごと突っ込まれたという。

犯人は現行犯逮捕されたが、背後関係は表向き分からない事になっている。

「漆田、今日のパーティーよろしく頼むわ」

「預からせて頂きます」

今夜は、この人物の妾が有名雑誌専属モデルになった祝いのパーティーなのだ。

見舞いを終わると、和道は一度自宅へ戻った。

「おかえり、お昼食べた？」

「おう」

……麻美はホッとするな。

最近この世界が、妙に窮屈に感じていた和道だった。
気が付けば昔に比べて、バカ騒ぎが出来なくなったような気がする。
今はいいが、十年、二十年後の自分がまるで想像出来ない。

幾つかの団体から「就職」のオファーがあつたが、全てお断りして
いた和道。

かといって、漆田のようにフリーで動ける自信も無い。

足を洗う事も考えたが、和道の纏った刺青がそれを許さなかった。

……大地なんか、どう考えてるんだろ。

「和道もこつち座んなよ」

……麻美とも、これからどうすんだ？ 和道、二十四歳。

ソファーに座り込むと、そのまま麻美に潜り込んだ。

「やつ、ちょっと膝枕？ スーツ、シワになっちゃうよ？」

そう言いながらも、麻美は和道を受け入れた。

和道はそのまま柔らかく、眠りについた。

「……そろそろ起きないと、遅れるよ？」

「……ああ」

「着るもの、そこに出しといたから」

和道はモゾモゾと着替えると、冷蔵庫からビールを一本取り出した。

……冷たくて、気持ちいい。

ほとんど一気に飲み干すと、和道は「行ってくる」と家を出た。

こうして勢いをつけないと、「杉原和道」を演じられない自分に、
気付かないふりをする。

嵐が過ぎるのを待て。

そして何事も無かったかのように振る舞え。

……パーティーは盛況。

一般の人も多く訪れる中で、和道は身内の下の者だろうか、見知らぬ連中からずいぶん、挨拶をされた。

タバコをくわえれば、見知らぬ女が火をつけてくれる。

グラスにも気を配ってくれる。

帰りは漆田が車を手配してくれていた。

「……麻美？」

自宅に帰ると、灯りがついていない。

……おかしいな、今日は泊まるって言ったのに。

「麻美！」

急に不安にかられた和道は、風呂場やクローゼットまで乱暴に開けていた。

「……あ、もう帰ってた？」

外から麻美が戻ってきた。

和道は思わず玄関まで走って、でも優しく、麻美を抱きしめた。

十年後、二十年後の自分なんて想像できなかった。

……でも。

そんな未来に、麻美がいてくれたら。

「ちょっと、あんまん潰れるー」

「結婚、しないか？ 麻美」

第五章 レイモンドと異邦人 926 2（後書き）

第六章 Beautiful World 8月2日掲載予定

第六章 Beautiful World 決別（前書き）

【あらすじ】

麻美にプロポーズをした和道は、麻美の父親への筋を通すため足を洗う決意をする。

そんなひたむきな姿に、麻美も和道の両親に挨拶をしなければと考えていた。

第六章 Beautiful World 決別

第六章 Beautiful World

- - - - -

- - - - -

- - - - -

決別

- - - - -

- - - - -

- - - - -

その年のクリスマス。

和道は異邦人で、飛び入りでコンサートに参加した。

アットホームな空間での、ピアノの弾き語り。

アットホームな観客。

その中には麻美の姿もあった。

酔いに任せて十曲余り。

拍手に誘われて席へ戻ると、温かく麻美が迎えた。

その左薬指は、キラリ眩しかった。

「和道ー、素敵だったよ!」

「そうだろ?」

相変わらずの酔っ払い。

最近、顔に出るようになったな、というのが麻美の印象だった。

……昔は全然分かんなかったのにね。

和道は最近、レイモンドより異邦人に顔を出す事が多くなっている。2ndアルバムの創作をしていた事もあるが、やはり麻美との将来を考えると、レイモンドとは距離を取った方が良いように思えた。

……大地にはちゃんと話さないとな。

ついさっきまで弾き語っていたとはとても思えない、和道の眼光だった。

年の瀬も差し迫った頃。

「……そしたらよ、この紐、結んでみろって言われてよ」

「お前それ、容疑かけられてんだよ！」

ガハハッ、と奥の方から笑い声が聞こえてきた。

……大地のヤツ、遅えな。

和道が話がある、と大地に言ったところ、大地も何か話があるらしく、レイモンドで待ち合わせていた。

「マスター、もう一杯ください」

お代わりに口をつけ始めた頃、大地が寒そうにやって来た。

「おお悪い、ちょっとゴタゴタしちゃってよ」

「遅えーよ、何か飲めば？」

「……オレさ」

大地はオーダーが済むと、急に声を落とした。

「和道だから言っけどよ、オレ、千尋と結婚する事になりそう」

「ええっ!？」

思わず和道は椅子を軋ませた。

「まだ時期は決まってるじゃないけどね、そういう方向。で、和道は？」

チリン、と新規の客が入って来た。

「おい、マジかよ!？」

ガタン!

大地も負けじと椅子を軋ませる。

「めでてえな、おい。今日は飲むかー!」

意外な展開に大地は屈託の無い笑顔を見せた。

「……でさ、大地はこの稼業、続けんの？」

「続けるよ、何お前、やめんの？」

和道は、悪い事をした子供のように俯いた。

「……そのつもり」

大地は身を乗り出してきた。

「和道、別に悪いとかじゃねえけど、今さら堅気んなれんのか？
酒ばっか飲んでらんねえぞ？」

……そう言われると、急に自信無くなんじやんか。

でも。

「やってみるつもり。それが出来たら、籍入れる」

「……そっか」

……世話になったな、大地。

「それだけ言いたかったんだ、じゃあな、大地」

……もうこの店に来る事は無いだろう。大地や漆田にも、もう。

「和道！」

振り向くと、織山は真顔で和道を見つめていた。

「……オレに払わせるつもりか？」

「あ、悪い」

慌てた和道の首根っこを、織山はグイッと掴んだ。

「いいか、ココはおごってやるから、次はお前がおこれ」

……別れを言いに来たのに。

揺るぎない織山の友情に、和道はふいに涙がこぼれそうになった。

第六章 Beautiful World 条件

条件

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「麻美の家族は、どんな感じだったの？」

「私は一人っ子で、お母さんは小さい頃、死んじゃった。お父さんは、分かんないな。学校の先生なんだけど、私はずっと、私より生徒の方が好きなんだって思ってた」

麻美は薄暗いベッドルームの、和道の腕の中に納まっていた。

赤い三角形の置物が目を引く。

「お父さんにも、ちゃんと挨拶行かないとな」

麻美がするつと身を起こす。

蒲団がはらりと流れた。

「来てくれるの？」

「そりゃそうだろ、筋通さない」と

和道もゆつくりと起き上がる。

「……麻美、明日からここ泊まるな。オレあ麻美のお父さんから見たら、ただのチンピラだ。ちゃんとした職に就いたら、改めて麻美

を貰いに行く」

薄暗闇に、刺青の紋様が浮かび上がる。
麻美はじいっと和道を見つめていた。

「分かった、そうする。そしたら私も、和道のご両親に挨拶行く」

「ウチか……」

和道は言葉を濁した。

……もう何年連絡してないんだ？ でも、それも筋か。

「一回連絡してあげなよ？ きつと心配してるよ？」

……こんな姿見せたら、悲しませるだけだ。

ずっとそう思って、連絡を避けてきた。

……だが、麻美の事はどうだ？ 喜んでくれるか？ それとも麻美を悪く言うだろうか？

「……私なら大丈夫だから」

どういう意味かは分からないが、とにかく麻美はそう言った。

翌日から麻美は、実家に帰るようになった。

少しずつ麻美の物がなくなっていくたび、寂しさが募っていく。

……明日からレコーディングと、ハローワーク通いだな。

和道にとって音楽創作とは、自分だけではもはや処理仕切れない感情を、浄化する役割を果たしていた。

1stでは、自分の過去の記憶を焼き付けた。

2ndでは、自分の「今」を焼き付けるつもりだ。

麻美のいる、今を。

今回もジャケットはデヴィンが担当する事になっていた。

そして翌日。

和道は初めてハローワークなる場所に足を運んだ。

タッチパネルに戸惑いながらも、仕事を検索してみる。

たくさんあるようで、一件も引っ掛からなかった。

…なんだ、頭来んな。

和道はまず、時給や日給のシステムに苛立ちを覚えた。

……一ヤマってないかな。

拘束時間の長さも気に入らない。

それに。

……すごい皆、オレの事見てないか？

周りの人が、自分の姿を笑い者になっているような気がしてならない。

しらふの和道は動悸がし始めた。

嵐が過ぎるのを待て。

そして何事も無かったかのように振る舞え。

結局あの頃から、何も変わってはいないのだ。

たまらず酒を買いに生きながら、一思案。

……そうだ、不動産で地上げを検索してみよう。

ちなみにそんな仕事は、ハローワークにはない。

第六章 Beautiful World 次男の憂鬱

次男の憂鬱

- - - - -
- - - - -
- - - - -

その頃、中洲台の和道の実家では、好二と妙子が困惑していた。

「こんなチャンスはなかなか無いんだよ！　どうか、許してください」

そう言っていると、祥太は深く頭を下げた。

「でも後、半年じゃない。せめて卒業してからでもいいんじゃないの？」

妙子は同意の目を、好二に求めた。

「……それも待てないほどのチャンスなのか？」

「そうなんだ」

「私は、とてもじゃないけど、そんな事許せません」

妙子はキツパリと言った。

祥太は今、人生の岐路に立っていた。
涙ながらに「学校の先生になりたい」と言っていた祥太は今、プロのギタリストへの道を進もうとしている。

祥太は大学に入り、よりギタリストとしての才能を開花させていた。そして、世界的に有名な日本人ギタリストに師事していたのだが、今回師匠について、N・Y・へ渡るチャンスを手に入れたのだ。

一人のミュージシャンとして、人脈発掘にもなる。

そのために、大学四年まで順調にきたが、ここで中退してアメリカへ渡りたい、と言うのである。

「あの和道だつて、高校頑張って卒業したのよ？」

「兄貴とボクは違う！」

祥太はキツと妙子を見据えた。

すると好二がゆっくりと喋り出した。

「父さんはな、プロを目指す事に反対してる訳じゃないんだ。ただ、親に対するけじめとして、母さんは卒業が最低条件だと言ってる。オレもそう思う。それに、だ」

好二は椅子に座り直した。

「もし将来、プロになれたとしても、指一本、壊して弾けなくなったらどうするんだ？ その時、家族がいれば尚更だぞ？ あと半年我慢して、教職持ってたほうが将来の保険になるだろ？」

……そんな事、言われないでも分かっている。

家族も持たなければいい！

祥太と好二たちは、平行線のままだった。

「祥太があんなに意地を張るのも初めてね」

「そうだな」

好二は妙子の肩を揉んであげていた。

「前に妙子が言ってた事、思い出したよ。ほら、手で押さえても、指の隙間からすり抜けてく、って話」

「ああ、そうだったわね。……ねえ、こんな時、和道だったら何てアドバイスするんでしょうね？」

好二の肩を揉む手が止まった。

「さあ。ただ、どっちに賛成するかは分からんが、オレ達や祥太とは全く違う発想で考えるような気がするな」

妙子は肩に乗ったままの好二の手に触れた。

「私もそう思う。私は祥太の味方しそうな気がするけど」

ボソッと、好二が呟いた。

「……和道は今頃、どんな大人になってるんだろっな」

第六章 Beautiful World 交錯点

交錯点

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「ああっ!!」

「どうしたの？」

和道と麻美が夕食の準備をしていると、たまに和道が叫びだす。

「あのハローワークってのがどうも苦手だよ。オレ、しらふだとやっぱダメなんだよ」

「じゃあ結婚、諦める？」

「ヤダッ！」

和道はどうやら麻美の尻に敷かれるタイプになりそうだ。

「レコーディングのほうは？」

「順調だよ」

「楽しみにしてるねー。ねえ、和道は音楽で食べてこうとは思わないの？ 本格的なのに」

「音楽はライフワークだ。ハナから金銭を絡めるつもりはない」

「ふーん」

あんまり理解してないようだったが、説明が面倒くさかった。

このところ、酒も適量にしようと思えば和道は努力していた。
そのため余計イライラする。

麻美も最近、和道が怒りっぽくなっているのを見て、無理してないか少し心配だった。

「仕事もよ、バイトとか、接客係はあるんだよね。あと内職。でも給料がな」

和道がぼやく。

「でも、世間の人はそれで頑張ってるんですよ」

いただきまーす、と和道ががつついた。

「うめえな、これ！」

「麻美特製カニクリームコロッケだよ！ けっこうテク使うんだから」

和道に素直に喜んでもらえて、麻美は嬉しかった。

「そう、話戻るけど、高卒と大卒ってやっぱり給料違うのな」

「へえー、そうなんだ」

「でな、ちよつと考えただけど、オレ資格取ってみようかなって」
珍しく真面目な和道であつた。

「えー、何の？」

「宅地建物取引主任者」

麻美はポカンと口を開いた。

「不動産関係のヤツなんだけど、資格手当が付いたりするんよ」

「それ、難しいの？」

「国家試験だよ、国家試験！ 法律系！」

するとさりげなく麻美が突っ込んだ。

「それ、実家のお父さんに相談してみたら？」

……そういえば昔、絶対法律だけはやんねえって言ってたのにな。

「良いきっかけじゃない。向こうも連絡待ってると思つし、法律のことならお父さんも嬉しいんじゃないかな」

その日、麻美が帰った後。

しばらく和道は落ち着かなかった。

……麻美のせいだぞ。

そして日本酒をかつ食らうと、携帯を手にした。

プルルル、プルルル……

「はい、杉原でございます」

……母ちゃん。

「もしもし」

和道は深呼吸をした。

「あの、和道ですけど」

「和道！？ あんた今、どこにいるの？」

「あの、母さん、親父いる？」

「いるわよ、ちょっと待ってて。……お父さん！ お父さんてば、和道よ。早く来て」

妙子の様子が手にとるように分かる。
バタバタと音がした。

「もしもし、和道か？ 今なにやってるんだ？」

「親父……、実はさ、仕事の関係で宅建取ろうと思うんだけどさ、難しいのかな？」

「宅建か。法律系では取りやすいと思うぞ。民法と宅建業法がメインかな？ あとは税法、宅地造成、農地、建築基準……」

……親父、分かんないから。

「そうなんだ、ありがとう。どう？ みんな元気にしてる？」

「まあな。お前も元気にやってるのか？」

……ちゃんと覚えてくれてるんだ。

「……実はさ、結婚しようと思ってる子がいるんだ。一度挨拶行くから」

すると電話口の向こうで、

「妙子、和道が結婚の挨拶に来るって！」

……こんな姿、ホントは見せたくない。

でも麻美、ありがとう。

五年振りの親の元気な声、悪くない。

第六章 Beautiful World Feeling Blue

Feeling Blue

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ハアッと麻美はため息をついた。

独り、マンションで和道の帰りを待つ。

麻美はあれ以来、実家に帰り父親と暮らしていたが、父親の反応は冷やかだった。

「なんだ、今さら帰って来て」

麻美は和道との事を話した。

「今まで同棲まがいの生活してたくせに、急に帰れだ？ ずいぶんと都合のいい男だな！」

麻美の父親は吐き捨てた。

そんな父親との二人暮らしは、やはり虫の居どころが悪い。

……和道と筋通すって決めたんだもん、頑張らなくちゃ！

そう自分を励ます麻美だったが、父親が言った「都合のいい男」という言葉が、頭から離れなかった。

時計を見ると、もう十一時を回っていた。

……今日は遅いのかな。

麻美は、レコーディング中に電話をするのは和道やスタッフに迷惑だと思い、遠慮していた。

麻美は和道の夕食にラップをかけると、しょんぼりと帰って行った。

夜中二時頃、和道は帰宅した。

テーブルの上では夕食が一人前、和道を待ちくたびれている。

……今日も待っててくれたのか。悪い事したな。

今までは二人で夕食、が当たり前だったのだが、今は資格の勉強もあり、麻美に毎日来てもらうのは悪いような気がした。

……今度から早く帰れる日だけ、予め連絡するか。

翌日、レコーディングの合間を縫って、和道は麻美に電話をした。

「……うん、そう、だから明日から大丈夫な日だけ連絡入れるから。うん、いつもありがとな、昨日のも美味しかったよ」

「それで試験はいつなの？」

「十月中旬かな」

わかった、と麻美は電話を切った。

……十月か。半年も先。

急に寂しさに包まれた麻美。

麻美が実家に居づらいのには、他にも理由があった。
あの「お兄ちゃん」も、まだ隣に住んでいるのだ。

……今日はパアツと、地元の友達とこ遊びに行こうかな！

「え！？ お前、杉原さんと結婚すんの！？」

「……………うん」

その夜、照れる麻美を尻目に、友人達はリアルに引いていた。

「ってか、『お前』なんてもう呼べねえな。姐さんだ、姐さん」

「別にいいって」

ふと今さらながら、私は和道と釣り合っているのかと不安がよぎる。
「姐さん」と呼ばれる事にも抵抗がある。

……和道に逢いたいな。別にウチのお父さんなんて、気にしなければいいのに。

居場所と時間を持て余しぎみの麻美は、そっだ、と閃いた。

……私も働いて、和道との結婚生活に備えよう！

そう思い立った麻美は、取り敢えず求人雑誌に目を通し始めたのだ
った。

第六章 Beautiful World 二人の音

二人の音

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「……じゃあ、行ってくるから」

おやじバッグとギターケース。

祥太はそれだけを持って、旅立とうとしていた。
妙子は見送りに来なかった。

「祥太。ここまで来たら、思う存分、やって来い。半端はするな」

好二にはもう、それしか言えなかった。

何か言いたげな祥太だったが黙って頷き、自宅の玄関はピシヤリ、と閉められた。

「……もう、行ったのね」

「ああ」

妙子が目を腫らせたまま、必死に窓枠越しに祥太の姿を探していた。
祥太のN・Y・行きへの決意は、やはり固かった。

「子供の幸せは、親が決める訳にはいかんからな」

好二は妙子の肩を、そっと抱いて言った。

「結局、オレ達は見守る事しか出来ないんだよ、人生一度きりなんだから」

「もう一回行きます」

ブースの和道からスタッフへの指示。

初めて和道のレコーディングを見に来たデヴィンは、ここまでやっているとは思わなかった。

どうやら和道の頭の中には、完成品があるらしい。

それをいかに忠実に再現するか、という作業のようだ。

当然のようにそれは、機材環境であったり、マイクの立て位置だったり、和道たちスタッフの力量によって、限りなく不可能に近い。

そんな時、和道の苛立ちは自分の中へ向けられる。

それを発散させるために、ブース内にはサンドバッグや木製の板があり、和道はテイクを重ねるたびにそれらを殴りつけた。

午前十時から午後六時半まで。

その間、休憩は三十分のみ。

そしてその後は、資格の勉強。

麻美と過ごす時間は当然のように、劇的に少なくなっていた。

「和道！」

「遅えよ」

今日は麻美と二週間ぶりのデートだった。

麻美が小走りに抱きつくと、和道はヒドく酒臭い。

「まあた、今日も飲み過ぎなんじゃないの？」

「いやあ、麻美に逢えんのが嬉しくてさ！」

上りのエスカレーターに乗ると、和道はベルトにひょい、と腰掛け
た。

と、そのまま和道は向こう側へと転落し、ショウウィンドウとの間
に挟まる格好になった。

「和道！ 大丈夫？」

麻美は恥ずかしさと心配で、すぐに反対下りで降りて来たが、今度は

「麻美い！」

と、上り側から飛び移ってきた。

「ちよつといいから来て！」

麻美は和道を引きずって、薬局まで来た。

「ちゃんと消毒しないと」

「え？ 何が？」

和道は気づいていなかったが、落下した時に肘をぱっくり割っていた。

「ちょっとハシヤギ過ぎ！ いい年して！ もうお酒、飲むな！」

「そんなの出来る訳ねえだろ！」

さすがの麻美もこれには怒った。

「もういい、帰る！」

そついうと麻美は真っ直ぐ改札へ向かった。

……何？ 追っても来ないわけ？ せっかく二週間ぶりに逢えたのに。

二週間分の寂しさが、涙となってこぼれる。

麻美は、酒を止めない限り和道の未来は無いと思った。

……やっぱり私が働かなきゃ。

麻美は少しずつ、追い込まれていた。

第六章 Beautiful World 正直なカラダ

正直なカラダ

[illegible]

[illegible]

「うん、うん。……」

「なんか和道っぽいな、悪い意味で期待裏切んねーよ、お前」

和道は久しぶりに、大地に泣き事を言った。

「でもそこで後追えなかったのは痛いよ」

「やっぱそう？ 千尋ちゃん……」

あからさまに落ち込む和道を見て、織山が酒をこれでもかと注いだ。

「でもよ、フツー駅前で流血した酔っ払いがいたら、警察来るべよ？」

「ま、そうだな」

大地も頷いた。

その頃、麻美は一人で異邦人に来ていた。

「あなた、そこまでして杉原くんと一緒にになりたいの？」

コクン、と麻美は頷いて、和道が信賴しているママだからこそ、とりとめもなく話し出した。

和道に逢えない寂しさ。

父親や「お兄ちゃん」がいる実家にいる事の苦しさ。

愛情を確かめたくて、つい言い過ぎる自分。

酒に飲まれる和道。

そして。

そんな和道を守りたくて

風俗に戻った、自分。

「ちゃんと話せる時間、作った方が良いわね」

「でも和道忙しいし、勉強もあるし」

そんな麻美に、ママは静かに言った。

「あなたが実家に戻ったのは、何のため？ 杉原くんが資格取ろうとしているのは、何のため？ 全てあなた達二人が幸せになるためでしょう？ あなたが遠慮する事は、何もないのよ」

……ママの言う通りだよね。

「ママありがとう。ちょっと電話してきます」

麻美は今日初めての笑顔を見せた。

ピリリリリ、ピリリ……

「おっ、大地やべえ、麻美から電話だ！」

酔っ払って横になっていた和道だったが、思わず飛び上って後退りをした。

「バアーカ、ちゃんと仲直りしろ！」

「警察のせいだぞー！」と大地は叫んだ。

「……もしもし、うん、今大丈夫？」

後ろで、大地の雄叫びが聞こえた。

……何なの？

「え？ 来週の水曜日？ うん、開けとく、何食べたい？」

……何？ 私とは逢う時間無いけど、大地先輩とは会えるんだ。

ふと父親が、和道の事を「都合のいい男」呼ばわりしたのを思い出した。

……私は都合のいい女ってこと？

翌週、水曜日。

二人はベッドの中で揺れた。
麻美は感じたフリをした。

最後の瞬間を繋がったまま迎えた事に、嫌悪感。

「麻美、何かあったか？」

さすがに和道も、麻美の不自然さが気になった。

「ううん、何で？」

「いや、何も無いならいいけど……」

「うん。……ね、もし私がいなくなったら、和道どうなっちゃうんだろうね？」

麻美はとびきりの笑顔を見せた。

「そりゃ生きてけないわ、考えただけで怖い」

「やっぱ、そーだよねえ」

……私がいなくなったら、この人どうなっちゃうんだろう。

だから私が和道を守るの。

第六章 Beautiful World 926 3

926 3

- - - - -
- - - - -
- - - - -

早いもので、資格試験まであと二週間余り。

和道は初めて、麻美をスタジオに招待した。

大音量で流れる、まさに完成したばかりのアルバム。

ロブのジャケット見本品を手に取り、解説する和道。

「……つまりあれだ、心理テストのようなモンだ。見る人によって、何かを奪おうとしてるようにも見えるし、守ろうとしているようにも見える。あるいは、捨てようとも、な。麻美は何に見える？」

唐突な質問に、麻美は心の準備が出来ていなかった。

「私には……、捨てようとしてるように見える、かな？」

「おお、この抽象画を見てそう解釈したのは、オレに次いで麻美だけだ。なかなかセンスいいな」

……やっぱり麻美、変だ。

和道は、ここ最近の麻美は心ここにあらず、というか疲れていると
いうか、何か異変を感じていた。
連絡も以前より取りづらい様に感じる。

……今だっ てそうだ、オレと目を合わせた がない。

こう した時の和道は、とても敏感 だった。

「今日この後、みんな で打ち上げやるから、麻美も来 ないか？」

和道は少し探りを入 れたいと思った。

「うーん、どうしよ つかない。……今、お父さん風邪で寝込んでんだよね。今日はパスし とく。勉強も忘れちゃ だめだよ？」

「分かった、夜、電 話するから」

……麻美の、嘘が下 手なところが好き。

目を合わせずに、麻 美はそう言った。

独りぼっちの麻美の 後ろ姿を、和道は目に 焼き付けなければなら なかった。

……何か、バカにさ れてる気分。

仕事のために資格を 取ると言っておきなが ら、この時期になっ て もアルバム制作に時間 を費やしている和道の 神経が、麻美には理解 出来な かった。

……私は、和道を守 るうと、必死なのに。

「お、降ってきたな」

打ち上げを終え店を出ると、ぼつりぼつりと雨が振り出した。
天気予報では明日一日、雨。

湿気が嫌いな和道はタクシーを拾った。

「あ、もしもし、麻美？ 今日に来てくれてありがとな。……お父さん大丈夫だったろ？」

家に着くなり、和道は麻美に電話した。
嫌に沈黙が長かった。

「……大丈夫だったよ」

麻美も歯切れが悪かった。

「十分知ってると思うが、オレは回りくどいのが大嫌いだ。その上で聞くが、最近何があった？」

「……別に何にもないよ」

「いや、オレも麻美をずっと見て来たんだから、それくらい分かるよ？」

「だから何も無いってば！」

麻美はこれでも平静を保つのに、一生懸命だった。

それに反比例するかのような和道。

「麻美が何を言っても、受け止めるから」

……だめ、言っちゃだめ。

麻美は必死に堪えた。

フウツと和道は息を吐いた。

「……オレに気を使ってくれなくてもいいから。だってさ、ここま
で感づいちゃってんだよ？ お互い、もう楽になる？」

和道は涙声になっていた。

嵐が過ぎるのを待て。

そして何事も無かったかのように振る舞え。

ひとしきりの沈黙の後、麻美は言葉を噛みしめるように吐き出した。

「私ね……、私、和道への気持ちがどっか行っちゃった」

電話越しに、麻美の嗚咽が鳴り響いた。

大雨の夜だった。

926 4

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「……和道への気持ち、どうか行っちゃったの」

麻美はやつとの思いでそう言うと、大雨に飲み込まれそうな、弱々しい嗚咽を漏らした。

「……いつから？」

和道も涙声だった。

「分かんない。でも寂しくって。なかなか逢えなくて、和道の気持ち確かめられなくて。でも私たち、たくさんの事乗り越えて来てから、大丈夫だと思ってたのに」

麻美はせきを切った様に、しまっていた思いを溢れさせた。

「でも現実には結婚するってなったら、不安もいっぱい出てきて。私は和道に相応しいのかな、とか。凄く悩んだ。でも途中から、私がいなくなったら、この人どうなっちゃうんだろって、そればかり考えてた。和道を守らなきゃって。でもそれは……」

和道は真っ赤な目をつぶった。

「なあに？」

「もう、もう愛情じゃなかった。誤解しないでね、和道を嫌いになった訳じゃないし、他に好きな人が出来た訳でもないの。ただ和道への気持ちだが、……どっか行っちゃったの」

「もう、やり直せないのか？」

この間が、たまらなく怖かった。

「……ごめんなさい。ホントにごめんなさい、試験が終わるまでは絶対、何も言わないつもりだったのに」

気がついたら、和道も涙でボロボロになっていた。

「いや、言ってくれてありがとな。一人でつらい思いさせちゃったな。ゴメン」

一際、電話口の嗚咽が大きくなったのを聞いて、和道も堪えきれなかった。

二人は、心行くまで泣いた。

この二年がムダではなかった事を、まるで確かめるように。

「……麻美は、ホントに支えだった」

「うっん、私こそ和道に出逢えて、幸せだったよ」

この時間を永遠に引き延ばしてやりたい。

だが、その時はやってきた。

「…………じゃ、さよなら、麻美」

「さよなら、和道」

プーッ、プーッ、プーッ。

……オレ、麻美と別れたのか？

大雨の中、朝まで放心状態だった和道。

二日ほど喋る事が出来なかった。

歯を食い縛っていないと、とんでもなく深い場所から涙が突き上げてくる。

三日目、ポストに合鍵が入っていた。

受け入れ難い現実が、そこにはちゃんと、あった。

嵐が過ぎるのを待て。

そして何事も無かったかのように振る舞え。

「なんで麻美が必要だと言えないんだ、オレは！」

全てを失ったかのように、喉の奥の激痛を酒で和らげようとした和道。

気がついたら、異邦人へと足が向いていた。

「……そう、別れたの。麻美ちゃん、私にも相談に来たのよ？」

「そうだったんですか？」

初耳だった。

「あの子の事だから、きつと言わなかったでしょうけど、あの子の名誉のために伝えとく。麻美ちゃんね、最悪あなたを養ってでも、あなたと一緒にいたかったの。そのために麻美ちゃん、また風俗の世界に戻ったのよ？」

……麻美！？

今さら、涙がポタリと落ちた。

麻美が風俗で再び働き始めたという事。

どんな記憶が呼び戻されるかという事。

その意味を一番よく解っているのは、自分だから。

異邦人のママは最後に付け加えた。

「そんな麻美ちゃんが、一番望んでいた事。それはあなたの社会復帰よ？」

「今度の試験、全身全霊で挑みなさい」

第六章 Beautiful World エンドロールを汚す男

エンドロールを汚す男

- - - - -
- - - - -
- - - - -

和道はそれ以来、全ての時間を勉強に費やした。

そう、思い出す時間を作らないように。

資格を取れて初めて、悲しみに暮れる資格がある。

麻美は和道を守るために、風俗へ戻ったのだ。

……もし不合格だったら。

和道は何一つ、自分の手の中には残らない気がした。

そして迎えた試験日。

和道は受験者の数に驚いた。

この人たちもそれぞれ、様々なものを背負ってこの場所に来ているのだろう。

和道は募る思いを、答案用紙にぶつけた。

「……という訳で、イレギュラーですが、お願いします」

疲労困憊。

試験が終わった午後、和道はロブやスタッフ達と緊急ミーティング

をしていた。

これから自分が、どのように麻美との事を消化していくか。結末は分らない。

だが、その気持ちの軌跡を生々しく記録したい。

こうして形として吐き出さないと、和道は気持ちの整理が出来ないと思ったのだ。

そんなコンセプトで、3rdアルバムのレコーディングが静かに始まった。

そして初めて、本名「杉原和道」名義での制作だった。

その夜、ロブと二人で飲んだ後、和道は久しぶりにレイモンドへ立ち寄った。

漆田にも偶然会ったが、もう和道にビジネスの話が回って来る事は無かった。

帰り道。

酩酊した和道は、ゴミ集積所に埋もれていた。

「オレなんか、棄てられちまえーっ！ オレが悪いんだよ、半端もんが！」

ゴミの山から和道が叫ぶ。

おもむろに携帯を取り出し、リダイヤルを押す。

「……もしもし」

麻美は、和道をなんと呼んだらいいか、戸惑った。

「麻美い！ 今から行くから刺してくれ、頼む！」

和道が泣き叫ぶ。

電話口で麻美は泣いていた。

和道は自分のあまりの愚行に、携帯を投げやった。

……何やってんだ、オレ。正真正銘のクズ野郎だ。

和道は周囲構わず、犬ころのように泣いた。

次の日、和道は麻美の親友とホテルに入った。
だが結局、できなかった。

「私って軽いよね……」

関係の無い、その友人まで泣かせてしまった。

そんな痛みと戦い続けた、ある日。

和道は異邦人でピアノを弾いていた。

「あら、それ良い曲ね」

ママに誉められるのは、初めてだった。

「……あの人が俺に残してくれた曲なんだと思ってます」

来月開催されるスパイスレコードのイベントに、和道は出演予定だった。

だが3rdアルバムを聴いた主催者は、「これは人に聞かせてはいけない」と、和道の出演を見送った。

それほど、和道の汚れなき醜さがこびり付いていたのだ。

気紛れで実家にも報告しようと思った、和道。

この年から、履歴書に一行加わった。

免許・資格

宅地建物取引主任者

第六章 Beautiful World エンドロールを汚す男（後書き）

第七章 回帰線の軌跡 8月9日掲載予定

第七章 回帰線の軌跡 ゲッバイ、アイノス（前書き）

【あらすじ】

和道は麻美への思いを引きずりながらも古巣のマンションを引き払い、新しい生活を始めた。

そして普通の会社員として、ついに家族との再会をも果たす。

和道は、こんな時間がいつまでも続くものだと思っていた。

第七章 回帰線の軌跡 グッバイ、アイノス

第七章 回帰線の軌跡

- - - - -
- - - - -
- - - - -
グッバイ、アイノス

「杉原和道です。今日からよろしくお願いします」

真つ赤な顔をして、和道は新入社員の挨拶をした。
申し訳程度に拍手が起こる。

「君、宅建持つてんの？ 全然生かしてないじゃん」

面接日、遅刻して来た和道に担当者は突っ込んだ。
親会社は超有名企業だが、孫会社にもなるとその面影すら無い。

「資格があるからといって、職種を限定してはいけませんので」

しらふで震えながら、和道は適当な事を言った。
本当はいくつ面接を受けても落ちるので、手当たり次第応募して
ただけだった。

坊主に髭面の、挙動不審な男。
なかなか雇い手はいない。

……赤面、どう思われてんのかな。

「……うん、採用、決定。髭さえ剃れば」

「え？　ありがとうございます！」

今までの敗戦記録が嘘のような、呆気ない採用。

「早速、案内するから」

そう言うと、せっかちな面接官はそそくさと準備を整えた。

実際、宅建を持ってみて一番多い依頼が、織山を通じての「名義貸し」だった。

それでは元の木阿弥、と地道に求人当たっていたのだ。

異邦人のママから聞いた、麻美の気持ち。
無駄にするつもりは、ない。

「これを機に、引っ越してみるか？」

誰に言うでもなく、ボソツと言ってみた。
思い出がたくさん詰まった部屋。
いつまでも捨てられないもの。

……そんな過去は、もう引き出しにしまってもいいよね？
思い出すのはやはり、辛い。

……思い出す時間は、作らない。

そんな思いを胸に、和道は無心に仕事に打ち込んだ。
だが、客商売はやはり、和道にはストレスだった。

客に何か聞かれると、頭が真っ白になり、動悸や赤面を起こす。
客だからと横暴な人には、余計にである。

……オレはこんなに肝っ玉の小せえ男だったのか。

今更ながら、しらふの自分の姿が情けなかった。
アルコールもこの時期は、仕事終わりにビール500ml三本に押さえる努力をしていた。

だがしかし、「誰に口聞いてんだ？」と殴りつけたくなる自分もいる。

職場の先輩に呼び捨てにされても、またしかり。

酒を飲むと、すぐに往年の無法者が顔を出すのだった。

入社して一ヶ月ほど経った頃、和道は思い出の古巣を後にした。

新天地、富士川。

会社にも歩いて通える、新興都市だ。
実家からもほど近い。

……一度、顔出してみようか。

そんな考えが頭をよぎる。

自分の中で、過去のしがらみは、文字どおり過去のものになった。

独立した今なら、好二とも対等に話せそうな気がする。

……親父たちや祥太は、どう思ってたんだろ？

祥太、オレの事恨んでるよな。

兄貴が全て振り払った期待に、親思いの祥太はきっと、応えようと
するに違いない。

ふと、自分がとんでもない親不孝者に思えた。

その夜。

和道は何と切り出そうか、まだ悩んでいた。

ブルルルル、ブルル……

「あ、もしもし？ オレ……和道です。はい、何とか。それでさ、
最近仕事で、富士川に引っ越したんよ。そうそう」

「……よかったら一度、顔出しなさいよ」

口はばつたい和道は、電話口の妙子に先を越されてしまった。

第七章 回帰線の軌跡
それぞれの年月

それぞれの年月

[illegible]

「……お邪魔します」

「フ、フ、フ」

それはとても堅苦しい、六年振りの再会。

「思ったより、元気そうだな」

……親父、ずいぶん小さくなったんじゃないか？ 母ちゃんも、老けた気がする。

和道の率直な感想だった。

「長い事連絡取れなくて、すいませんでした」

和道の声は震えた。

昔と同じ、体育座りをして顔を埋めていた、あの席。

幼少の原風景が、鮮やかに背筋をつたう。

居心地悪そうに、和道は一応頭を下げた。

好一の鉄拳に備えて、齒を食い縛る。

嵐が過ぎるのを待て。
そして何事も無かったかのように振る舞え。

「ビールでいいか？」

その様子をじっと見ていた好二はそれには答えず、ビールを二本持ってきた。

「……元氣そうで良かった」

妙子が目を潤ませる。

……おい、違うだろ？

「まずは再会に、乾杯でもするか？」

……何言ってんだ殴れよ、怒鳴れ！

だが時の流れは確実に、この家族を押し流していた。

ふいに罪悪感がむくむくと、和道を混乱させる。

和道は自分など存在しない方が、好二と妙子が楽だろうと思い、家を出た。

それがどうだ。

目の前の好二と妙子の変貌ぶりは、いや、歳老いた姿は、和道には
樂をしてきた人間には見えなかった。

……もしかして、かえって迷惑かけてたのか？

「……ごめん」

和道はさらりと、だが心を込めてもう一度、呟いた。

結局この日は、大した話はしてない。
ただ、祥太が渡米していて来月帰ってくる事、その一連の経緯に、
和道は驚いた。

「……それから、」

和道は聞かれる前に話した。

「前に言ってた結婚の話、無くなったから」

「……そうか」

好二は少し寂しそうな目をした。

「じゃ、また来るよ」

そう言っと、和道は懐かしい匂いのする玄関を後にした。

一度振り返ると、好二と妙子はまだ見送ってくれていた。

「和道もそれなりの苦勞は、してきたみたいだな」

和道が帰った後、好二は一人飲み直していた。

「そうね、腹も立つけど、あの子、大人の顔になってたわね」

好二と妙子は実際、泣きこそすれ、和道を忘れた事は一度たりとも無い。

もちろん好二は、ぶん殴ってやろうと思っていた。

だが目の前にいたのは、もはや息子ではなく一人の男、和道だった。

……あの、もやしっ子が雑草に化けたか。

「なあ、妙子。もう一度、ゼロから和道と付き合ってみないか？」

妙子は好二に微笑みかけた。

「あなた、新しい飲み仲間が出来て、嬉しそうよ」

それは月の明るい晩だった。

第七章 回帰線の軌跡 表現者たち

表現者たち

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「へえ、音楽やってんだ。実は僕も油絵をやってるんですよ」

そう言つて笹野は枝豆をつまんだ。

興味深そうに、和道も日本酒をかつ食らう。

「どんな絵描くの？」

「風景画が多いかな」

職場の責任者、笹野は和道と同年という事もあり、よく仕事帰りに飲むようになっていた。

笹野は最近、責任者となつたばかりだった。

最近やっと仕事の流れも掴めてきて、少し余裕が出てきた和道。

こうして職場の人間とマメに飲みに行く事で、人間関係を作る事を覚えた。

この時まだ職場の人間は、酒が入ると急に生き生きとする和道を、仕事とプライベートを使い分けるタイプなんだ、くらいにしか思っていないかった。

「今、アルバムを制作中なんだよね」

「あ、じゃあかなり本格的にやってるわけだ」

笹野は和道の飲みっぷりについてくる。

……笹野も「杉原組」に誘ってみるか。

和道は4thアルバムのレコーディングを始めていた。

その一環として、和道は通称「杉原組」と呼ばれる表現者集団を立ち上げ、主宰を務めていた。

これは和道とデヴィンを中心に、ミュージシャンはもとより、写真家、画家、彫刻家、イラストレーター、映像、ファッション、ジュエリーデザイナー、漫画家、漫談師など多様な表現を持つ人間が集まったユニークなものだった。

これに加えて、言葉を元々大切にしていた和道は、音楽詞だけでなく、五、七、五の韻にも興味を持ち、さらにそこから毛筆、顔彩、墨絵へと広げていった。

こうした流れで、飲食店から暖簾作りを依頼される事もある。

こんな話を笹野にすると、ぜひ参加したいと言う。

かくしてまた一人、「杉原組」の仲間が増えた。

だがそれは同時に、和道の本質を垣間見る事になる。それが後々問題になっていくのだが。

「どうも、お疲れ様です」

和道はやっと酒にありつけると思っていると、胸が踊った。

「あれ、高村さん？」

「あ、お疲れ様です」

二歳年下の職場のムードメーカー、高村聖美だ。

「家こっちのほうなんですか？」

「ええ」

高村の住まいは、ちょうど和道の新居の前を通り過ぎた、大通り沿いにあった。

そんな訳で必然的に和道と高村は、帰りが一緒になる事が多い。

「高村さん恋人は？」

すると嬉しそうに「付き合って一ヶ月！」とのろけだす。

「どんな人なの？」

「……んー、それは内緒という事で」

……高村さんて、話し易い人だな。

「杉原さんはどうなんですか？」

「僕はいないです、所帯持つ気ありませんから」

「あー、そうなんですかあ」

正直、和道は麻美の一件で男としての自信を失っていた。

そうした部分では、まだまだ消化不良を起こしていたのである。

第七章 回帰線の軌跡 祥太の帰国

祥太の帰国

- - - - -
- - - - -
- - - - -

職場での高村は、それはそれは天真爛漫なキャラクターだった。
職場の空気は、彼女が握っているようなものである。

そんな彼女を、自分と比べては尊敬の眼差しで見ていた和道。
帰り道が一緒の彼女とは仕事帰り、かなりプライベートな事まで話
すようになっていた。

「お父さんの具合があんまり良くないんだよね……」

彼女は父子家庭で、父親は内臓の病気で入院している。
そのため、高村はパティシエという夢を諦め、弟と二人、家計を支
えつつ、父親の看病をしているという。父子家庭と聞いて、思わず
麻美を思い出した。

そんな彼女を見て、和道はふと思った。

……親父や母ちゃんも、そういう時が来るんだな。

恥ずかしながら高村の話を聞くまで、両親の将来なぞ考えた事のな
い和道であった。

思い返せば、親孝行らしい事など一度たりともした事がない。

……来週祥太が帰国したら、一回みんなを食事にも招待するか。

家族が揃うのは、実に六年振りである。

「……って計画してるんだけど、高村さん良い店知らない？」

「洋食で良ければ、北口のホワイト・ガーデンって店、おすすめかな。家族向けだと思うよ」

その日も帰りが一緒だった二人。
富士川の飲み屋は知っているが、食事処は全く知らない和道であった。

「おい、ずいぶん洒落た店、予約したんだな」

「そんな事ないって」

ホワイト・ガーデン。

普段あまり外食をしない好二は、落ち着かない様子だった。

「兄貴！ 久しぶり」

「おー、祥太、なんか貴禄でたな」

ごく自然にハグをした二人。

口髭を生やして、祥太もすっかり大人の男になっていた。

昨日の便で帰国した祥太。

どうやら演奏旅行の手応えは、十分にあったようだ。

「で、向こうではどんな生活してたの？」

妙子も嬉しそうに料理を口にした。

「ま、師匠の付き人だからね。おかげで、アメリカでの人脈は築けたかな。来月のブルーレイズ・ノート・フェスに出演するから、良かったら、ぜひ」

有名なフェスだ。

……祥太も自分の道を歩いてるのか。

デカい肉にかぶりつく祥太の姿に、内心、和道はホツとした。

「ちょっとお父さん、飲み過ぎですよ」

「今日くらい、いいじゃないか。和道も祥太も、ほれほれ！」

好二は和道がこうした席を設けてくれた事、初めて家族揃って酒が飲めた事が、嬉しくて仕方ないらしい。

そして和道も、こんなに無邪気な好二の顔を初めて見るのだった。

「……じゃ、そろそろ開きますか」

好二と妙子は「ご馳走になります」と和道に会釈した。

ドタン！

帰りぎわのことだった。

和道がレジで支払いをしていると、後ろで音がした。

「おい、親父！」

好二が転んで、頭を支えに「く」の字に折れ曲がっていたのだ。

「ああ、すまん、大丈夫だ」

和道に抱き抱えられて、申し訳なさげな好二。

……もう親父も、いい歳なんだな。

和道には、酔っ払った好二の背中が小さく見えた。

世代交代。

自分は今も、家族を支えていく立場なんだと感じずにはいられなかった。

第七章 回帰線の軌跡 値踏みする男

値踏みする男

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「……そう、それでな、オレさ、千尋と籍入れたんよ」

織山は和道に遠慮したのか、言いづらそうだった。

「おお、そうかあ。良かったじゃん。お祝いやろうぜ」

……あの大地も結婚か。

和道は感慨深げだった。

少し羨ましくもあったが、織山の結婚は嬉しいニュース。

「今度、漆田とかと飲むんだけど、和道も来るか？」

「あ、行こうかな、いつ？ ……お、休み前だよ、しこたま飲むべ

！ あっそうだ、最近よく飲む奴いるから、そいつも連れてくわ」

和道は最近「杉原組」のメンバーになった、上司の笹野を連れて行く
こうと思いついた。

普段しらふでビクつきながら仕事をしている自分の、過去の一面を
見せつけたいという気持ちが確かにあった。

翌週の金曜日、大地たちとの合流まで少し時間があつたので、和道

は笹野と先に始めていた。

「へえ、大地くんか、カッコいいなあ。杉原さんもいろいろあったんだね」

大地の事を話しているうちに、つい自分の話も洩らした和道だったが、むしろ笹野は憧れを持って聞いていた。

「千尋ちゃん、久しぶりい！」

既に出来上がっていた和道は、漆田とも抱き合った。

織山のボディーガードだという、巨漢の男が仰々しく和道に挨拶をする。

「何、和道の上司？ いやあ、こいつにまさか会社勤めが出来るとは思わなかったわ」

織山はそう言うと、笹野に昔話をするのだった。

「その話、会社で立場無くなるから止めてくれる？」

そう言いつつ、得意気な和道。

普通の居酒屋チェーン店で明らかに浮いている男たちに、笹野は若干戸惑い気味であった。

「まったく、何あの店員」

レジで何かトラブルがあったのか、千尋が不貞腐れて戻って来た。

十分もしないうちに、他の客はみんな帰ってしまった。

灰皿が厨房に投げ込まれる。

最後まで頑張っていたカウンターの男も、漆田に促されて帰り支度を始めた。

店長の胸ぐらを掴んで、離さない和道。

怒号飛び交う中、仲裁にきた警察官の様子。

見ると聞くとでは大違い。

話だと楽しく聞けた笹野だったが、実際に巻き込まれてみて、ショックを受けた。

こうした場面で警察とやり取りするのも初めてだった。

「笹野さん、すみませんね」

和道は得意気に言い放った。

結局、笹野は終電を逃してしまった。

「爆弾だあーっ！」

笹野がビクッと振り返る。

和道が厨房にあった玉ねぎを、スクランブル交差点の雑踏めがけて投げ込んでいた。

……何なの、この人たち。

大笑いする和道や織山たち。

だが笹野は、和道は利用価値がある、と思った。

第七章 回歸線の軌跡 不可思議な娘

不可思議な娘

[illegible]

[illegible]

「すいません」

「あ、はい、お客様」

「この使い方が分からないんですけど」

「はい……、少々お待ち頂けますか？」

そう言うつと、和道は逃げるように走り出した。

「すいません、お客様ののご案内をお願いします」

和道はどっしやり、冷や汗をかいた。
まだ動悸が止まらない。

……やっぱり、接客はキツイ。

「ちよつと杉原さん、顔真つ赤よ？ 大丈夫？」

高村が声をかける。

……お客さんはどう思ってるんだろ。

高村のフォロー無しでは、きっと和道は仕事を続けられなかっただろう。

そんな様子を責任者の笹野が苦々しく見つめていた。

笹野はあの飲み会以来、和道に接しづらくてしょうがない。

和道の鬼のような形相が忘れられない。

現に二人の関係は複雑であった。

同じ年だが職場では笹野が上司。

「杉原組」では和道が主宰。

そしてここ最近の職場の人間関係は今、高村と和道が中心になっている。

知らないうちに、責任者である笹野には聞かれたくない、他の社員の悩み事を聞くのが、和道の役割になっていた。

責任者になって間もない笹野は、自分だけが孤立しているようで面白くないのだ。

その日の帰り道、和道が最近書道に凝っている、と高村に話すと、

「私もやる！」

と言いだし、和道の家に来る事になった。

一通りの準備をすると、

「ちょっと向こう行って」

仕方なく和道は隣の部屋で待つ事にした。

…… ったく、鶴の恩返しか？

「…… できた！ 見て、見て！」

思わず和道は吹きだした。

「ちょ、何やってんの？」

どうだ、と胸を張る高村の作品は自分の「足形」だった。

「ちょっと足洗いたいから、シャワー貸して」

「洗面所の横」

高村は真っ黒な足の裏を見せながら、片足でぴよんぴよん、風呂場へ向かった。

…… 変わった子だ。

半紙の上の小さな足跡を見て、また笑ってしまう和道。

それ以来、高村はちよくちよく和道の家に着っては、遊んでいくようになった。

そんなある日。

ラブホ街の一角にあるラーメン屋で、和道がビールを飲んでいた時のこと。

何気なく外を眺めた和道は、あつ、と身を隠そうとした。

高村がカレシと歩いているのを目撃したのだが、その相手が問題だった。

和道もお世話になっている、本部の部長だ。

……部長、フツーに妻子持ちだったよな？

それでカレシの事は話したがらなかったのか。

しかも、ウチの会社は社内恋愛に厳しい。

と、高村も和道に気付いて、そそくさと逃げていった。

翌日、仕事の帰り道。

「大丈夫だって、誰にも言わないから」

「ほんとにお願いね」

高村が必死になっているのがおかしかった。

「でも、まさかあの人とは」

「わあー、わあー！」

和道はつくづく、高村は面白い子だと思った。

第七章 回帰線の軌跡 個展とプライド

個展とプライド

- - - - -
- - - - -
- - - - -

祥太は先日出演したブルーレイズ・ノート・フェスにて、大賞を受賞した。

一人暮らしを始め、プロのギタリストとして全国を飛び回るようになった祥太。

そんな弟の活躍ぶりを、和道はネットで検索するのが密かな楽しみだった。

和道も4thアルバムを「杉原組」の力で完成させ、満たされていた。

一曲ごとのコンセプト写真と詞の融合。

それらを着物地と一緒に蛇腹につなげ、経典のようになったジャケット。

「けっこうゴツいもんになったっしょ」

「そうだね、音楽というより、もうトータル・アートじゃない?」

ある日の仕事帰り、笹野から和道を飲みに誘った。

「……あのさ、僕も油絵の個展やってみたいんだけど、協力してくれない?」

笹野も「杉原組」メンバーに触発されて、自分なりの芸術哲学を持つようになっていたのだ。

……杉原を使うのが、手っ取り早い。

「OK、任せといて」

和道は笹野に、異邦人を紹介した。

笹野もそのまま日程調整に入る。

ふと和道は思いついた。

「油絵に囲まれた、音楽パフォーマンスやってみない？」

「面白そうだね、杉原さんやってくれんの？」

和道は首を横に振った。

「今年のブルーレイズ・ノートで大賞取ったトリオ、連れてくるってのはどう？」

和道はいたずらっ子のように、笹野を見上げた。

「え？ そんな事出来んの？」

「スケジュール合えば。ウチの弟なんよ。普段油絵に興味ない人にも、かなり見てもらえるよ？」

……やっぱり杉原は使いようだ。

「あー、なんで杉原さんの周りってそんな人集まるんだー！」

ヨイシヨする笹野に、和道はふざけて「人徳じゃね？」と答えてみた。

その数日後。

「杉原組」の飲み会があった。

笹野が役者の卵を連れて来るという。

和道が笹野を見つけた。

「笹野さんお疲れ、弟の件、スケジュール取れたわ」

「マジで？　ありがとうございます！」

ペコリと頭を下げた笹野は、連れを紹介した。

「蜂谷くん。彼がこないだ話した、劇団の」

「なん、思ったより弱そうやな」

蜂谷の思いがけない発言で、笹野は凍り付いてしまった。

「あの、え、杉原さんゴメン！　蜂谷まだ……」

「……まあ、ゆっくりしてけや」

和道はそれだけ言うと、蜂谷の肩をポンポン、と叩いた。

……蜂谷、やめてくれ。

笹野は祈った。

だが、残酷にも祈りは通じなかった。

宵の口が回った頃、蜂谷がデヴィンに言い放った。

「ガイジンサンデスカー？」

和道はテーブルをひっくり返す勢いで、無言で蜂谷を引きずり出した。

「すいませんでした！」

そう言いながら、笹野が何度も二人の間に割って入る。

最後には、床に額をつけて大声で土下座までした笹野。

「笹野さんよお、あんた会社じゃ、オレの上司なんだからよ。そんな真似すんなって」

和道はようやく蜂谷を離れた。

「ホントに申し訳ございませんでした！」

笹野はもう一度、頭下げた。

……個展が終わるまでの我慢だ。

個展が終わるまでの。

第七章 回帰線の軌跡 お前なんか

お前なんか

- - - - -
- - - - -
- - - - -

どういう風の吹き回しであろうか？

職場責任者、笹野の吹き回しである。

だがこの頃まだ、和道は何も知らなかった。

夏の余韻がまだ色濃いこの時期、和道は富士川とは別に、宮田営業所の責任者に抜擢された。

とはいっても、宮田は半年以内に閉鎖される事が決まっており、クビにしたい人間が送られてくる「処刑場」。

そつ、和道の仕事はここに送られて来た人間に、自分から「辞める」と言わせる事だった。

午前中は宮田、午後は富士川と一日二ヶ所で勤務。

和道は宮田で、金を貰ってイジメをするのが堪らなく嫌だった。

小さい頃を思い出して、自分の矛盾した行動に嫌気がさす。

中でも、

「杉原にハメられた！」

と言われたのが、一番傷ついた。

……オレだって、やりたくてやってんじゃない。ただどな、拾って

くれた会社に、恩義があるんだよ！ でも。

こんな愚痴を、和道はよく高村に聞いてもらうのだった。

「でも、元々は問題ある人達なんですよ？」

カクテル派の高村が珍しくビールを頼む。

「でもよ、クビならクビ！ って言えはいいじゃん。なんか陰湿だよ、オレを悪者にしてよ、やり方汚えよ！」

ドン！ と寝込んだ和道が、テーブルを叩いた。

「ちよつと杉原さあ、今日も飲み過ぎ！」

べろんべろんの和道を連れて、高村は店を出た。

「つと、ほら危ないでしょ！」

急停車したタクシーに向かって、和道は何事か叫んだ。

……杉原さんの気持ち、分かるよ。

自分も何度か、会社の体質に嫌気が差した事があったが、そのたびに「生活のため」「入院費のため」目を逸らしてきた。

……杉原さんは純粹過ぎる。でもそれが、人を惹き付ける。

最近よく、二人で飲みに行く。

和道の昔の恋愛話なんかを聞くと、特にそう思う。
駆け引きを知らない。
そのたびに、

「杉原は自分で思うより、ずっと良い男だから」

と、高村は言つて聞かすのだった。

「ほら、家着いたよ。鍵は？」

高村は鍵を引つたみると、家の中へ和道とお茶のペットボトルを放り込んだ。

「明日は朝イチで富士川だからね、間違えんなよ？」

高村は暗い夜道を一人、とぼとぼと歩き出した。

「うわっ、酒臭！」

翌朝。

高村は鼻をつまんだ。
目がまだ半分開かない和道。

「あー、二日酔いだわ。こんな事、昔は無かったのに。あ、昨日ありがとね」

「黙れ酔っ払い！　　ったく、何回介抱してるの思ってるの？」

和道は可愛らしく、手を合わせた。

……最近、飲めなくなったな。顔にも出るし。

飲んでパアツとしたいのに。

このごろは記憶を無くしたくて酒を飲む、和道であった。

第七章 回帰線の軌跡 タブー

タブー

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「司法書士も民事絡んできて、大変なんじゃない？」

「そうだな、実際は登記関係が主な業務だったからな。勉強する事が増えた」

好二は遠い目をした。

和道は食事会での好二の姿を見て以来、実家にちよくちよく顔を出すようになっていた。

やはり、段々と年老いていく両親が気になる。

それなりの社会人になった自分の姿を見せて、せめて安心させてやりたかった。

「和道は今、あれだ、あれから恋人はできたか？」

まったくおかしいタイミングで、好二が言う。

「いや、所帯持つ気は無いから。孫は祥太に任せる」

…… あーまた、いらん事言った。

和道は浅はかな自分を反省した。
好二と妙子もしばしの沈黙。

「……まっ、そのうちな」

そんな好二の言葉が痛かった。

「きっと、和道なりに辛い思いしたんでしょっね」

和道が帰ってから、妙子がしんみりと言った。

「だろう。何年も音沙汰なかった和道が、結婚の挨拶のために電話してきたのが、始まりだからな」

好二と妙子は、和道の空白の六年、何をしていたのか怖くて聞けなかった。

和道も、あの頃の話は二人を悲しませるだけ、と話さないようにしていた。

暗黙の領域。

タブー。

……この刺青は見せられない。

着替えの途中、和道は鏡の前に立ち尽くした。

「へっへー、どう？」

数日後、高村はまた和道の家遊びに来ていた。

「どう？　じゃねーよ、人の名前、何だと思ってるんだよ！」

高村が誇らしげに見せる半紙には、「杉原和道」の文字。
良く言えば、へたウマ。

高村はすぐにもう一枚、筆を下ろした。

……ホ、ル、モ、ン。

「ぷつ、何でだよ！」

「あー、間違えた！ 『ほおずき』って書きたかったの！」

こんな高村に、和道は何度腹を抱えて笑ったことか。

麻美と別れて二年。

自然に笑えている自分に気付いた。

……高村さんのおかげだな。

和道は高村に、不思議な感情を抱いていた。

一緒にいるだけでいい。

それ以上は何も望んでいないし、部長との間に入る気もさらさら無い。

ただ言葉にすると、「好き」としか言い様がないのだ。

高村は、今度は何とも言えない、おそらく動物であろうつモノを書い

ていた。

……これもきつと、杉原さん笑うんだろうな！

高村は、笑いのツボが同じ和道といると楽しかった。

部長とは違う、空気のような存在。

こんなに男の家に入り浸っている事は、もちろん部長には言えない。
そんな、秘密の関係。

笹野の個展まであと一週間。

こんな日がずっと続いていくんだと思っていた。

第七章 回帰線の軌跡 謀略のシチュエーション

謀略のシチュエーション

[illegible]

[illegible]

笹野の個展、最終日。

異邦人で歴代二番目の客入りだとか。

「じゃ、祥太、よろしくな」

「任せといて」

……頼もしくないか。

和道は「杉原組」主宰として、着物姿で牛耳っていた。

タングステン。

軽快に唸るウッドベース。

油絵で造られたステージで、

祥太は奔放に、繊細に音を紡ぐ。

息のあつたトリオは、まるで会話を楽しんでいるかの様に、オーデ
イエンスを揺らす。

拍手喝采。

大盛況。

だてにブルーレイズ・ノートで大賞を取ったトリオではなかった。

「こんなスゴい事になるとは思わなかったよ！　ありがとうござい
ました！」

「おう、お疲れー」

笹野は深々と、和道と祥太に頭を下げた。

……杉原おつかれ、そしてサヨウナラ。

それから一週間後、和道に辞令が出た。

和道は離れた可児坂営業所に、責任者として赴く事になった。

……なっ、急に。
それに責任者って。

仕事面で、特に高村と離れる事が不安だった。

「杉原さん、今日飲み行こうよ」

……笹野。

和道は薄々、感じていた事があった。

嵐が過ぎるのを待て。

そして何事も無かったかのように振る舞え。

「笹野さん、オレの事、嫌いなんだろう？」

「ホントはね」

あつさり答えた笹野。

二人はチン、と軽くグラスを合わせた。

それは和道の心に、ひびが入った音でもあった。

和道は何事も無かったように、ゆっくりと味わった。

最後の勤務の日。

「高村、オレの最後の仕事だ」

そついうと、和道は高村を連れ出した。

何か言いたげな空気が漂う。

麻美と別れて以来、女性に対して臆病になっていた和道。情けないことに、たった一言を口にするのに明け方までかかってしまった。

だが高村も、和道が何を言おうとしているか分かっていたのだろう。そんなにも長い間、何も言わず、優しく待っていてくれた。

明け方、帰り道。

「最後まで家まで送らせる」

それは和道なりの、愛情表現。

「私と部長はね、最初……」

とぼとぼと和道の家を通り過ぎたころ、高村は少しずつ語りはじめた。

高村にとって、どうしても不倫までして部長じゃないとダメなのか。

高村が部長との関係に悩んでいた時、和道は励ました事がある。

それは間違いではなかったと、素直に思った。

別れの時。

「杉原は自分で思ってるよりずっといい男だから」

最後にもう一度、高村は確かにそう言った。

「当たり前だろ」

それだけ言っと、和道は去り際に小さく手を振った。

「さようなら」とは二人とも絶対に、言わなかった。

第七章 回帰線の軌跡 謀略のシチュエーション（後書き）

第八章 生きるということ 8月16日掲載予定

いよいよ佳境に入っていきます。

第八章　生きるということ　重くなった身体（前書き）

【あらすじ】

信頼していた笹野の策により、異動を命じられた和道は新天地可児坂で悪戦苦闘していた。

そうした中、和道は死を望む少女穂乃香と出会い、様々な重圧に巻き込まれていく。

第八章 生きるということ 重くなった身体

第八章 生きるということ

重くなった身体

「じゃあ、今度から自分でやって下さい」

そう言つと、男はプイッと立ち去つた。

……なんだ、その言いぐさは。

嵐が過ぎるのを待て。

そして何事も無かつたかのように振る舞え。

激しい動悸がする。

冷や汗と同時に、怒りも込み上げた。

だが、しらふの和道はそんな部下を、さらに指導するほど強心ではなかった。

それが接客の態度か？

和道はイライラしていた。

その林という部下は、商品知識が足りない分、お客様を言いくるめるような接客をしていたのだ。

和道が「勉強が足りないんじゃないか？」と言うと、これである。

知らないことは、もちろん和道にだってある。

だがそれを補おうとせず、不誠実な仕事をする林が、和道には信じられなかった。

リーダーが働かない現場は、ダメになる。

それが信条の和道に言わせると、可児坂営業所のスタッフは、みんないい加減に見える。

当然のように、クレームが多い。

クレーム処理は、責任者である和道の仕事。

そんなこんなで、和道は本部に叩かれる。

取引先にも叩かれる。

特に取引先のお偉いさん、岳という男は、高圧的でねちねち嫌みを言う、和道の一番苦手なタイプだった。

もつとも、これらを改善して業績を伸ばす、というのが和道の使命なのだが。

……ひよつとしてオレも、笹野に尻拭いをさせてたのかな？

笹野は、綱渡りのような和道の接客に、一度も口を挟んだ事はなかった。

実際自分が責任者になってみて、笹野の職場での孤独感が分かったような気がする。

だが、笹野には裏切られた、という思いの方が強かった。

最近は大忙しで、音楽創作も、異邦人でピアノを弾く事も出来ない。

……くそっ！ イライラする！

思わず資材を蹴倒して、二つダメにしてしまった。

「ちょっとあたし、笹野はもう無理！」

高村だった。

最近よく電話してくる。

「何、今度はどうしたの？」

……みんな勘弁してくれよ。自分とこだけで手一杯だよ。

和道の正直な気持ちだった。

和道が富士川営業所を追い出されて以来、笹野のやり方に、他の社員からも非難の声が上がっているらしい。

高村以外の同僚からも、そんな相談がきていた。

「笹野、お前が一人で大丈夫というから、杉原を動かしたんだぞ？」

「大丈夫です。問題ありません」

……杉原が抜けたせいだって言うのか？

笹野は本部からも釘を刺されていた。

「ただいまー」

「おー、お帰り！ 今日伸子がお前の好きな豚カツ作るつてよオ」

和道はネクタイを外しながら、台所を覗きこんだ。

「ばあちゃん、ただいま。……ばあちゃん、ただいま！」

「あら、お帰り」

……じいちゃんもばあちゃんも、すっかり耳が遠くなった。

和道の勤める可児坂は、家から電車で一時間ほどかかる。それに比べ幸造と伸子の家までは、バスで十五分ほど。

疲れて帰りが面倒な時は、たまに幸造の家に泊めてもらう事があった。

移動時間も含めると、一日の拘束時間は約十四時間。なんだか気分的にも余裕が無くなった気がする。

少なくなった自由時間には、酒を飲むぐらいしかする事がなかった。

第八章 生きるということ 運命の日

運命の日

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「どうしたの？ 相談って」

和道は多忙の合間を縫って、実家に立ち寄った。

スーツの上着を椅子の背中にかけて、何よりもまずビールを口にする。

好二たち両親に頼られるなんて、生まれて初めての事だ。

和道は内心、嬉しかった。

好二と妙子は顔を見合せていたが、意を決したように妙子が口を開いた。

「……和道、水川さん覚えてる？」

……母ちゃんの仲良しさんだよな。確かウチの近くに住んでたはずだ。

「あー、あのスラッとした人でしょ？」

妙子は何かを喉に詰まらせたように続けた。

「水川さん家に、穂乃香ちゃんてお嬢さんがいるの、知ってるでしょ？ その子がね、二十七日に自殺するって言ってるらしくて……」

「明後日じゃん」

和道は椅子をキッツと引いた。

……穂乃香ちゃんて確か、拒食症の子だったよな。

「実は穂乃香ちゃんのお友達が去年、自殺しちゃったらしいの。穂乃香ちゃんが発見したらしくて、相当ショック受けたみたいで……」

その友達の命日が、明後日二十七日だという。

「水川さん達も必死に説得してるみたいなんだけど、全然聞く耳持たないみたいで。それでね、和道」

妙子がまじまじと、和道の顔を覗き込む。

「水川さんのお母さんがね、和道に話をしてもらえないかって」

……え、オレ？

「ほら、あなたが若い頃いろいろあったの、水川さんも知ってるでしょ。あの水川さんがこんなお願いしてくるなんて、よっぽど追い詰められてるのよ」

和道は正直、怖くなった。

「よっぽど追い詰められてる」状況？

だったら、和道が話したのに自殺されたら、自分のせいだと言われ

るんじゃないか？

……第一、オレは他人だぞ？

人間なんて大概、他人のせいにしたがるだろ？

「事が事だから、無理に引き受けなくてもいいのよ？」

堪らず妙子がフォローをいれた。

嵐が過ぎるのを待て。

そして何事も無かったかのように振る舞え。

……いや、それは違う。

和道は気づいた。

……もうこの時点で断つても、オレが話さなかったから、自殺したと思うだろ。

引き受けるしかないんだ。

和道は腹をくくった。

知らず知らずのうちに、周りの大人が責任の擦り合いをしている事

に気付け！

オレは自分の意志で、穂乃香ちゃんに会いに行く。

「……いや、話すわ。明日の夜行くって伝えといて」

……念のため、二十七日は休みを取るか。

翌日、出勤した和道は朝から本部とクレームの対応に追われていた。

「……はい、本当に申し訳ございませんでした、それでは失礼致します」

……ああ、胃が痛い。

夜、水川家を訪れると、か細い女性が殴られているところだった。

今思えば、この日は運命の日だったのかもしれない。

第八章　生きるということ　ほのかな匂い

ほのかな匂い

- - - - -
- - - - -
- - - - -

透き通るような白い肌。

スレンダーとはもはや呼べない、細く華奢な脚線。
窪んだ虚ろな瞳が、床を彷徨う。

きつと穂乃香は、きれいな子なんだと思う。
ただ十九歳という若さは感じられなかった。

……オレと同じ匂いがする。

和道の直観は、そう言った。

さっきこの華奢な身体を叩いていたのは叔父だという。
和道はとっさに、二人の間に割って入っていた。

「今から、穂乃香ちゃんと二人にさせて下さい！　それから、絶対に部屋に近づかないで下さい。お願いします」

穂乃香の父親が落ち着かないので、和道はもう一度念を押した。

自殺予告日、前日。

「オレはな、女に手を上げる男が大嫌いなんだ」

穂乃香の部屋で二人きりになると、和道は小さく言った。

「話はだいたいお母さんから聞いたよ。でもよ、穂乃香ちゃんからも聴かないと不公平だろ？」

そう言いながら和道は、ドアの外を確認した。

「うん、誰もいないから安心しな」

そう言いながらも、和道は恐怖を覚えていた。

……今、舌でも噛み切られたら、オレの責任だ。

嵐が過ぎるのを待て。

そして何事も無かったかのように振る舞え。

「和兄……」

穂乃香は何の前触れもなく突然やって来た和道に、びっくりしていた。

状況がいまいち飲み込めない。

……和兄まで私を止めに来たの？ みつともないよ、ママも、パパも。私も。

どうせまた、説教でしょ？

みんな悲しむとか、生きてれば良い事あるとか。だが一向に、その肝心の説教が始まらない。ふと時計を見ると、沈黙が二十分ほど続いていた。

「……和兄、ママに頼まれたの？」

「いや、話は聞いたけど、勝手に会いに来た」

「……遺書、書き忘れちゃった」

「じゃ、オレが聴いといてやるよ」

何かの駆け引きを始めるような、穂乃香の言葉。和道は爪いじりをやめると、視線を投げかけた。

「……どうして私なんか逢いに？」

和兄は、私を見届けに来てくれたの？

そういえばずっと、一人になりたかった。

穂乃香が何度も自殺未遂を繰り返すため、ここ最近は二十四時間、両親が交代で監視していた。

母親はそのために、仕事も辞めた。

今この家族には、気の休まる時間が皆無だったのである。

「……私ね。友達、殺しちゃったの。いつも一緒だったのに。うん、私が勝手に友達だと思ってただけかも。何にも辛いつて言ってくれなかったから」

和道は黙って聴いていた。

「……私って最低。何にも分かってなかったくせに、友達ぶって。だから少しでも苦しさを分かってあげたくて、リスカやODも始めたの」

どうやら亡くなった友人には、自傷癖があったらしい。

「こんな最低な女、存在する価値も無いのに、ママもパパもそんな事ないって言う。私はお母さん達が思ってるような子じゃないのに、ホントの私を見てくれないの……」

穂乃香は、自分でもびっくりするほど、溢れるままに言葉を紡いでいた。

そんな穂乃香の言葉に、和道はただじっと耳を傾けていた。

あれから四時間半。

「……それでフリチンで走り回ったら、怒られるわ、殴られるわで。今度は和道が、自分の小さい頃の話をしていた。」

穂乃香も時折、笑顔を覗かせた。

「なんか笑ったの、久々かも」

……やっぱりこの子、同じ匂いがする。

「また聞かせてやつから」

そう言つと和道は、静かに電話番号とメールアドレスを書いた。

「穂乃香ちゃんのは？」

白々しく和道が尋ねる。

そう言われると、穂乃香も書き出していた。

「……これ、明日まで、って事ないよね？」

内心、祈るような緊張感。

「……もう少しだけ通じると思う」

和道がゆっくりと、穂乃香を両親の元へと導く。

務めは果たした。

思わず大きく息を吐き出していた。

和道はやっと、逃げ場の無い責任感から解放されたのだった。

第八章 生きるということ 緊縛

緊縛

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「いいか、よそから人員引つ張つてまで勝手に休むんじゃない！
分かったか？ 責任者」

「すみません、以後気をつけます」

やれやれ。

穂乃香の件で急に休んだことへの本部からの注意だった。
だが和道の頭の中は、穂乃香の事でいっぱいだった。

「家で食べると、どうしても吐いちゃう」

「じゃあ、オレがいる時だったら背中さすってやるよ」

最近、毎日電話をするか、仕事帰りに会いに行っている。

「あの子、和道君のことなら聞いてくれると思うんです！」

穂乃香の両親からさがるように哀願され、和道は穂乃香の友人として、また命綱としてこの家族の間に立たされることになったのだ。

だが、たまたま連絡を取らなかった日。

「和兄にこんなに優しくしてもらって、もう思い残す事はありません」

ん」

そう書き残して穂乃香は睡眠薬をすり潰し、おびただしい量を飲んで病院へ運ばれていた。

それ以来、和道は毎日連絡を取らないと、不安でいてもたってもいられなくなってしまった。

……自分の言葉一つで、人が死ぬかもしれない。

穂乃香の両親からの期待が、重くのしかかる。

和道の口から両親の言うことを聞くようにと、言って聞かせること。だがそれは、穂乃香の望む言葉の対極にあるもの。

自分のせいで何かが起きるのが怖かった。

だが現実には、和道の目の前で手首を切られ、刃物を奪い取ろうと返り血を浴びることもある。

死ぬんだからと食事も水分も頑なに摂らない。

為す術のなさに、和道は毎日無力感と絶望とに向き合わなければならなかった。

「ちょっと聞いてよ、また笹野がさ」

「また何かあったの？」

……ごめん高村、今ホント、余裕無いんだよ。

可児坂営業所も相変わらずでクレーム処理に追われる。

本部にも取引先にも叩かれる。

胃がキリキリする。

いつ穂乃香から電話が来るか分からない。

穂乃香の最期の電話に出られない、という状況が恐ろしくて、和道は仕事中でもこっさり携帯を握りしめていた。

着信やメールが届くと、ドキツとする。

今の和道には、気を休める時間が全く無かった。

そんな自分を支えてくれるのは、やはり酒の力だった。

睡眠時間を削り、帰りの電車の中でも飲む。

和道も相当追い込まれていたのだ。

だが、残酷にも穂乃香は、日に日に衰えていく。

電話で話す事も難しくなり、メールでのやり取りになっていた。

そんな中、本部から部長が来訪した。

相変わらず抜き打ちである。

「今日は杉原にお願いがあって来たんだ」

……こういう時は、良い知らせじゃない。

「横川と新横川にも営業所あるの、知ってるだろ？」

「……はい」

部長はゴホンと咳払いをした。

「杉原に、この可児坂と横川、新横川、三つ面倒見て貰いたいんだ」

……可児坂でもいっぱいはいなの？

嵐が過ぎるのを待て。

そして何事も無かったかのように振る舞え。

携帯電話を握りしめながら、和道はジェットコースターに乗った時のような内臓の収縮感に耐えていた。

第八章　生きるということ　母と娘

母と娘

[illegible]

「穂乃香ちゃんの事、本当にありがとうね。水川さんのご両親も感謝されてたわ」

妙子からの電話だった。

……この間に穂乃香から電話がかかってきてたら、どうするんだ。

イライラが募る。

「でも和道は無理してない？ 最近よく水川さんとこ、顔出してく
れてるみたいだけど」

「大丈夫だよ、今忙しいから、また今度」

ハアッ。

……全然大丈夫なわけないだろ。

毎日毎日、人の死に直面する生活。

誰にも迷惑はかけまい、という気持ちと助けを求めたい気持ち。

ええい、こんなに弱くてどうする！

自分を奮い立たせるように、和道はウイスキーボトルを傾けた。

穂乃香の母親は、穂乃香を愛している。

穂乃香も母親の事を「嫌いだけど、好き」と言っていた。

「好きだけど、嫌い」とでは全く違う。

要はお互い、愛し合っているのだ。

それなのに相手を想ってした事が娘を、母を傷つけてばかり。

最近知ったのだが、穂乃香は拒食症や自傷行為の他にも、パニック障害を持っていた。

和道は穂乃香の事をもっと知ろうと、関連のある本を読み漁るようになっていた。

もつとも酔いの回った和道は、ほとんど覚えていないのだが。

翌日の仕事帰り、和道が水川家を訪ねると穂乃香の入院について話し合われていた。

水分すら摂らない穂乃香の身体は、もう一刻の予断も許さない状態だった。

「……の病院だと最低三ヶ月の入院だそうだ。穂乃香の場合だと、やはり行動を制限されるみたいだな」

……そりゃそうだ、自殺未遂を何度も繰り返してるからな。

「私、入院なんてしないから」

穂乃香は弱々しく、そう……

ガタッ！

「三ヶ月も穂乃香は精神病院に監禁されるって訳？ そんなの私、耐えられない！」

……おい。

「お母さん、娘はペットじゃありませんよ？ あんたが耐える、耐えないの問題じゃないだろ！！」

思わず和道は怒鳴りつけた。

……何を言ってるんだ、この母親は。娘の前で。

穂乃香が自殺未遂をするきっかけは、確かに友人の死だったのかも
しれない。

だが、しかし。

もっと根本的な部分で、この家庭に問題があるのではないか。
和道はやるせない気持ちで胸が悶えた。

……早く自分が死ねば、みんなケンカにならなかったのに。

そんなやり取りを見た穂乃香は、肩を震わせて泣いていた。

翌日の朝、二日酔いの和道は満員電車の中で揺られていた。
こここのところ、可児坂で乗り換えて横川方面の電車に乗ると、必ず

下痢を起こす。

堪らず途中下車することも珍しくない。
入社して三年。

正月も無く、ずっと年中無休で働いてきた。

……たまには連休くらい、よこせよ。

ピリリリリ、ピリリリリ……

心臓が飛び出すかと思った。

人波に逆らうように携帯を取り出すと、やはり穂乃香からのメールだ。

「明後日入院だって」

和道はなんとも言い様のない胸騒ぎを覚えた。

第八章　生きるということ　失踪

失踪

[illegible]

翌日、雨。

穂乃香の入院前日。

今日は和道の貴重な休日だ。

……今日は朝から飲めるな。穂乃香の様子見たら、久しぶりに異邦人にも顔出すか。

もう長い事、音楽やピアノから離れていた。

あの頃は、創作活動という気持ちのアウトプットがあった。

それが今はどうだ。

今は何もない。

酒はどんな記憶も消してくれる。

だが翌日には、さらなる後悔を伴って蘇ってくる。

そういう意味では、酒はストレスのインプットジャックなのだ。

和道もそれに気付いてはいた。

だがそれでも、一時の忘却を欲せずにはいられないのだ。

と、唐突に電話が鳴った。

「穂乃香がいなくなっ たんです！」

母親の金切り声が耳をつんざいた。

……二十四時間、監視してたんじゃないの？

ザワザワと全身総毛だった和道。

心臓が緊急事態にバクバクと走り出す。

……今のあの子、一人にさせたら。

「まずいぞ、まずいぞ！」

そう一人呟いた和道は、雨風を振りほどくように自転車を走らせた。

「お父さんが目を離れた隙に！」

……そんな話、どうでもいい！

どうやら、いなくなっ てから一時間以上はたっているという。
父親は探しに出ていた。

外は大雨。

極限状態の母親とは別に、とにかく和道は自転車を走らせた。
当てなどあろう筈がない。

……近くに踏み切りがある。

救急車が目の前に行く。

サイレンの音が耳から離れない。

……どれくらい走った？

穂乃香、どこだ、どこにいる？

電話もメールも応答無し。

和道はもう、ずぶ濡れだった。

信号待ちがイライラを最高潮に導く。

青になった途端、飛び出した交差点で人を轢きそうになった。

……どけ！

「すみません」

……いいから、どけて！！

激しくペダルを踏み鳴らすその脚が、勢いよく滑る。
が、すぐに踏みとどまった。

「穂乃香！」

まるで、スローモーションのように振り返る女性。

あるうことか、飛び出してきた少女は**ずぶ濡れ**になった彼女本人であつた。

その夜、和道はまるで英雄のように水川家に迎え入れられた。

「穂乃香、心配したのよ！」

ずぶ濡れの我が子をタオルで抱き締めた母、そして父も同じように

泣き崩れていた。

「和道くん本当にありがとう、ありがとう。今夜は是非うちで夕飯食べていって」

…… ああ、奇跡って、あるんだ。

和道も極限の緊張から解放され、お言葉に甘えて特上寿司をご馳走になることにした。

「和道くん、お酒好きだったよね？　たくさんあるから、どうぞ飲んでって」

穂乃香の父親も、ヒーローのために取って置きのワインを開けてくれる。

「ありがとうございます、頂きます！」

——和道は結局、この水川家の一大事に日付が変わるまで酒を止めることが出来なかった。

水川夫婦は正直、明日の入院準備もあるので早く帰ってもらいたかったが、さすがに穂乃香の手前、何も言えない。

だが午前二時頃ドンドン、と酔っ払って玄関を叩く和道には、さすがの父親も「帰ってくれ」と追い払った。

だが命の恩人はその仕打ちに、激しく罵声を浴びせかけるのだった。

第八章　生きるということ　定心

定心

- - - - -
- - - - -
- - - - -

寝起きにゴクリと喉が鳴る。

寝巻きでビールはこれまた美味い。

和道はひとり、穂乃香と出逢ってから、の事を思い返していた。

……なぜ穂乃香はあそこまで追い詰められていたのだろう。

和道は、家族の在り方を考えていた。

母親の愛情表現。

父親の存在感の無さ。

母親の期待に応えようとする、穂乃香の強迫的な努力。

それが娘の等身大の姿だと、信じてやまない母親。

詳しいことはわからないが、穂乃香は幼少の頃、親戚に育てられていたようだ。

きっと穂乃香は、寂しい思いをしていたのだろう。

……だから、余計に母親の期待に応えようとするのか？
構ってほしくて。

母親もそれを負い目に、過剰な愛情表現をしていたのでは？

実は穂乃香が入院してから一度、和道は水川夫婦と話す機会があった。

その時、母親は印象的な言葉を口にした。
穂乃香のお見舞いに行った時の事である。

「笑顔が昔の穂乃香だった」

「早く元の穂乃香に戻って欲しい」

和道はどこか違和感を覚えた。

もちろん母親の早く元気になって欲しい、という願いが詰まった言葉なのは、和道もよく分かる。

だが「昔の穂乃香」「元の穂乃香」に戻ったとしても、帰ってきた環境が同じならば、もう一度同じ事が繰り返されるんじゃないか？

「……だから、これから新しい関係を築いていく事が大切なんじゃないでしょうか？」

出過ぎた真似だとは思ったが、和道は率直な意見を述べた。
真意が伝わったかどうかは分からない。

和道は空になった缶ビールをクシャツと潰すと、今度は一升瓶に手を伸ばした。

和道は今回の穂乃香のことを通して、人の心理に興味を持つようになった。

親と病院との間には、一体どれくらいあるの隔たりがあるのだろうか？

親は「ウチの子に限って」と、よく言う。

そつは言わなくても「憑きものが憑いた」等と、他のせいにしたがる。

あるいは見て見ぬふりをする。

とにかく自分の子供が「心を病んだ」という事実が受け入れられない。

「盲腸で入院した」とは言えるが、「拒食症で入院した」とは言えない。

これではいくら子がSOSを発信しても、届くべき所に届かないのではないか。

もちろん、医療現場の問題や詐病の問題もあるだろう。

だが和道は、こうした患者の家族と病院、患者と医療との架け橋がまだまだ不十分なのは、と感じたのだった。

……もしかしたら、今まで後ろめたかった自分の経験が生かせるのかもしれない。

そう感じた瞬間、和道の心が熱く高鳴った。

それは今まで感じたことの無い感覚でもあった。

今はまだ、穂乃香の一件で舞い上がっているだけかもしれない。だがもし半年後、同じ気持ちを持ち続けていたならば。

……それに、自分のルーツも分かるかもしれない。

和道は、大学に行きたいと思った。

第八章 生きるということ 定心（後書き）

第九章 試練 8月23日掲載予定

第九章 試練 虚無（前書き）

【あらすじ】

穂乃香と出会い、自らの進むべき道を見出した和道。

だがそこには負の財産も存在していた。

そしてついに、和道を蝕んでいた本当の病魔が姿を現す。
出口があるのかさえ分からない、最後の戦いが始まった。

「社会人入試、か」

和道は大学に行く決意を固めていた。

灯された情熱は、覚める事は無かったのである。

合格すれば、仕事も辞めるつもりでいた。

……辞めどきも大切だな。

和道は拙いながらも、三つの営業所を管理する責任者。
バイトを辞めるようにはいかない。

可児坂営業所は地道な努力が実り、業績が前年比130%前後をキープしている。

だが、横川と新横川がどうしても上手くない。

こちらは深夜まで残業する事もしばしばある。

相変わらず横川方面の電車に乗ると、決まって下痢を起こす和道であった。

「あー、何か落ち着かないな！」

髪をグシャグシャに掻き乱すと、冷蔵庫に向かう。

プシュツ。

「おー、冷えてるねえ」

ビールを飲み出して、ふと最近独り言が多い事に気づいた。

……あと、よく癇癢を起こすようになったかも。

夕べも泥酔して帰って来たのだが、手元がふらついて玄関の鍵が上手く入らない。

抑えようのない怒りが込み上げてきた。

「ッダラアッ！」

拳が強いうえに酔いで痛みを感じない和道は、玄関のドアを殴ってへこませた。

こんな具合に、他にも下駄箱と台所下の扉を蹴破っている。

酔いの回った和道の独り言が、また始まった。

「寂しいよ……。誰か相手しろよ！」

一種の燃え尽き症候群なのだろうか？

穂乃香と出逢った、あの頃。

毎日独りで、穂乃香の命を背負っているかのような錯覚。

それを押し付けられるプレッシャー。

目の前で手首を切られた時の血の匂い、無力感。

不安で連日、安否を確認せずにはいられなかった自分。

穂乃香が失踪した時の、まるでドラマのような搜索劇。

それと同時に、突然三ヶ所の責任者となった重責。

新しい人間の苦悩。

連日のクレーム処理。

本部と取引先からの怒号。

笹野を憎みながらも、高村達の愚痴を聞く自分。

それが今はどうだ。

穂乃香が入院して落ち着いた途端、急に静まり返った。
水川夫婦も和道を避けている節がある。

酒癖の悪さに、出来れば関わりたくないのだろう。

結局、和道に残ったのは酒だけのように感じられた。

……いや、待てよ？

和道は千鳥足で着替えを始めた。

……そうだ忘れるな、オレにはピアノがあつた！

大急ぎで財布を掴むと、和道は両指を波打つように動かした。

電車に飛び乗り、異邦人へと向かう。

駅の階段も、自然と足早になる。

……ママ、元気かな？

ママの顔を思い浮かべただけで、温かく笑顔がこぼれた。
逢いたいよ。

五線譜を持って。

漆田と。

麻美と。

クリスマスコンサートや、

「杉原組」のイベント。

和道の過去の栄光が詰まった、
麗しの、異邦人は

更地と看板だけになっていた。

第九章 試練 前兆

前兆

プシュツ。

ネクタイをだらしく緩めた和道が、ビールでゴクリ、ゴクリと喉を潤している。

周りの客の奇異な視線にも、すっかり慣れた様子だ。

「次は新横川、新横川」

車内アナウンスが流れると、和道は慌ててビールを飲み干す。そしてワイシャツのボタンをはめると、ネクタイをきゅっと絞った。

……
 ったく、面倒な仕事だよ。

これから営業先回りである。

最近和道は、横川と新横川の移動時間の四十分、酒を飲むことを覚えてた。

酒が無いと、どうしようもない孤独感に苛まれ、仕事も手に着かない。
い。

「お疲れさまでーす」

いつもより陽気な和道に、少し戸惑い気味の担当者。

「あつどうも杉原さん。あの、こないだの件なんですけど、本部に確認取れました?」

……何だっけ? あっ忘れてた。

「すみません、もう少しお時間頂けますか?」

担当者は不満を口にしようとしたが、和道の拳を見て思わず絶句した。

拳の皮が破けて、生々しく血が滲んでいたのだ。

「杉原さん、手、どうかしたんですか?」

「いや、ちょっとぶつけてしまいました」

和道はさらりと答えた。

……やっぱり言われたか。

異邦人が潰れてからだろうか。

ここところ、自分の感情を抑えきれない場面が増えた気がする。激しい怒りもあれば、絶望的な孤独感もある。

穂乃香も退院したが、以前のように連絡は来なくなった。それが余計に、寂しさを増幅させる。

……もうオレは用済みって事？ 穂乃香も笹野と同じかよ。

こうした時ピアノに触れられない事が、さらに和道を突き落とす。それほど異邦人は、和道の心の拠り所だったのだ。

そして耐えられなくなると、四キロほどのハンマーで拳を打ち付けるようになった。

血でぼろぼろになった拳を見ると、やっと存在する事が許されたような気になる。

「今日も営業トークしか喋らずに、一日が終わるのか」

……誰かと話したい。

ピリリリリ、ピリリ……。

「よう、元気かあ？ 今日の夜、飲み来ない？」

……大地だ！

どこに断る理由があるのか？

「おう、行くよ。今からだ、九時半くらいかな」

もちろん明日も仕事だ。

だがそんな事言ってられるか！

「お前、また殴ってんだろ？」

その夜、和道と織山は近所のバス停で飲んでいた。
千尋のつわりがひどく、タバコの匂いまでダメらしい。

「なんだ、大地もパパかあ……」

とても喜ぶ織山の姿を見て、和道も嬉しかったが、これでもう今までみたいには遊べなくなる、と一抹の寂しさもあった。

「酒はなあ、記憶を無くすためにあるんだよ！」

熱弁をふるう和道は、すでに完璧に出来上がっていた。

……あの和道が会社勤めなんて、いろいろ大変だったろう。

織山がそんな思いを馳せていると、目の前にバスが止まった。
もちろん、バス停だから当たり前なのだが。

「んだ？ ツラアッ！」

和道が突然２リットルボトルをバスに投げつけた。
バスは慌てて扉を閉めて発車しようとしたのだが、和道がすぐに追いついてドアをガンガン叩く。

「開けんか、コラアッ！ 誰ん目の前に停まっとんじゃ！」

そう言いながら、運転手を引きずりだそうとする和道。

織山が間に入って面倒な事にはならなかったが、織山には、和道が相当なストレスを蓄め込んでいるように見えた。

第九章 試練 激高

激高

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「今日の岳さんの送別会、杉原さんもいらっしやいますよね？」

「ええ、もちろん」

……飲み会断る酒飲みが、どこにいる。

岳とは、取引先のお偉いさんだった。

クレームなどで、よく和道を高圧的に怒鳴り散らして、その後になちねちと嫌みを言う。

和道はそんな岳が大嫌いだった。

そんな男が、やっと転勤になるらしい。

「じゃ、お先です」

今日は定時に上がった。

送別会まで、まだ一時間ほど余裕がある。

……先にどっかで、一杯やってるか。

和道はほど近い、いかにも地元を愛しているような小さな店に、腰を落着けた。

ピリリリ、ピリリ……

「はい、もしもし？ 久しぶりだね」

穂乃香だった。

「今、大丈夫？ 特に用は無いんだけど、和兄の声聴きたくなっちゃって」

乾いた砂漠に水が染み渡るような、感覚。
和道ははつきり分かった。

……オレは今、穂乃香と話したかったんだ。

「なんか、今日は元気そうな声してんじゃない？」

「そう？ きつと和兄と話してるからだよ……」

穂乃香は、主治医が嫌いだと言っていた。

「和兄が先生だったら良かったのに」

甘い言葉だが、とても危険な言葉。

穂乃香は、和道の大学進学のかっかけではあるが、目的そのものではない。

そうこうしているうちに、送別会の時間をとくに過ぎてしまっていた。

「じゃ、そろそろ送別会に顔出して来るわ」

携帯を耳と肩に挟みながら、和道は会計を済ませた。

「和兄、あんま飲み過ぎちゃダメだよ？」

切り際にそう言われて、和道はムツとした。

「すみません、遅れました！」

「遅いよー、杉原さん。ボク、嫌われたのかと思った」

和道が申し訳なさそうに座敷へ上がると、岳がちくりと言った。

……黙れ。

岳は和道の四歳年上だ。

和道は挨拶だけ済ませると、岳からなるべく離れた席に着いた。

「ちよつと女の子、もつとこつち来なよ！」

そんな岳に、アルコール補給が済んでいる和道は抑えがたい嫌悪を抱いた。

……どうする？

取引先のお偉いさんだぞ？

でももう、異動する。

大丈夫じゃないか？

岳の怒鳴り声や嫌みが、ぐるぐると頭の中で再生される。

ドンッ！

和道はあからさまに、ジョッキを叩きつけた。

「岳さん、オレとも話しましょうや！」

そう言うのと和道は、岳の目の前にドカンと座った。周りは静まり返り、だが岳は目を逸らさなかった。

「あんた、どんだけ皆に嫌われてるか、知ってるか？」

和道は日頃蓄めていた鬱憤を、怒鳴りつけてやった。それでも顔色一つ変えない岳。

そんな様子に、なんだか自分が小さく思えた和道は激高した。

「たかがこんな仕事で、偉ぶってんじゃねえぞ！！」

途端に岳がテーブル越しに、和道の胸ぐらを掴む。

和道は反射的に、岳の後頭部にジョッキを叩きつけた。

岳も負けてはいない。

スタッフたちが騒然と、なだれ込んできた。

第九章 試練 贖罪

贖罪

- - - - -
- - - - -
- - - - -

……なんて事しちゃったんだ！
考えればすぐ分かるだろ？

これはオレと岳のケンカじゃない。

会社の看板背負ったケンカだ。

会社に迷惑をかけるつもりじゃなかった。

だがオレ一人のせいで、会社の立場がまる潰れだ！

岳に謝らなくては。

悔しいが、どんな事になっても、オレが岳に頭を下げねば。

朝から和道は、激しい二日酔いと、悔やんでも悔やみきれない既成
事実に吐きそうだった。

満員電車の中でも、知っている限りの、あらゆる罵詈雑言を自分に
浴びせていた。

夢か何かであって欲しい。

「……おはようございます」

充血眼の和道に対するスタッフの目は、明らかに白かった。
というか、恐ろしいモノを見ているようだった。

スタッフからすれば、日頃おとなしくとも勤勉であろうとする和道の姿は、尊敬の対象ですらあったのだ。

休憩所で、和道は酔い覚ましのお茶を飲みながら、岳を待った。岳も和道を探していたのだろう、ほどなくして現れた。

「岳さん！ 昨夜はお詫びしてもしきれない事をしてしまい、本当に申し訳ありませんでした！」

和道の、産まれて初めての土下座だった。

「……杉原さん、たんこぶ出来ちゃったよ」

「申し訳ありません！」

泣き出しそくに震える、和道の声。
他の社員も好奇の目で見ている。

「ああ、あれか。お礼参りってヤツか」

「申し訳ありませんでした！」

「まさか、お客様にはあんな事、しないよねえ？」

仁王立ちで見下ろす、岳。

和道には岳の黒い革靴しか見えなかった。

嵐が過ぎるのを待て。

そして何事も無かったかのように振る舞え。

「ま、今回の件は私も殴らせてもらったので、痛み分け、という事で。上には報告しませんから、せいぜい安心して下さい」

それだけ言うと、革靴は去っていった。
周りがヒソヒソしている。

……笹野はこんな思いで、オレに土下座していたのか？

和道は「杉原組」の飲み会で、蜂谷を殴り倒した自分に土下座をした、笹野の姿を重ねていた。

昼休み。

みんなが出払っても、和道は独り、所内に残っていた。
高校生の頃から、人前で食事が出来ない。

……何やってんだ、オレ。

この場所で自分が築き上げてきたものを、一晩でブツ壊しやがって。

意味もなく、デスクの引き出しを開け閉めする。

またイチから、いやマイナスから積み上げる苦勞を考えると、絶望的な気分だった。

本部は何も知らずに、また無理難題を吹っ掛けてくるだろう。
何気なく見つけたカッターの刃を、意味もなくカチカチと鳴らしてみる。

全部、自分のせい。
どうしようもない、バカだ。

逃げられるもんなら逃げ出したいよ。
でも、やるしかない。

ああ、岳からの堪らない屈辱感！
きつと周りは、「土下座の杉原」と陰で呼ぶ。

ああ、もう仕事辞めたい。
でもこんな男、雇うヤツが他にいないわけがない。

逃げ道はもう無い！
やるしかないんだ、やるしか。

嵐が過ぎるのを待て。
そして何事も無かったかのように振る舞え。

……振る舞えないよ。

カチツ、とカッターの刃が止まった。

……こんなバカ野郎を、自分で許せる訳ないだろう？

和道は穂乃香の、改造された手首を思い出した。

……こんな人間が、みんなと同じように、生きてて良い訳がない！
ワイシャツを二の腕までまくると、刺青が顕わになった。

逃げ道が無いなら、せめて罰をお与え下さい！！

でないと申し訳なくて、みんなに顔向け出来ません！！

和道は刺青の牡丹をズタズタに切り裂いた。

その切り口は、なんて美しいのだろうと思った。

第九章 試練 深海

深海

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「おい、強盗じゃねえって！」

明け方、和道はコンビ二で取り押さえられた。
素直に、先が折れた木刀を渡す。

ほどなく警官がやって来た。

「また杉原さん、今日はどうしたの？」

「おめえナンだ、バカにしてんだろ！」

和道は大袈裟なくらい、巻き舌を使った。

最近、和道の家の周りは巡回強化地域になっていた。というのも、和道が酔ってウルサイからである。

とにかく夜中じゅう、叫ぶ。

それを近隣住民から、「隣の家でケンカしてる」と通報されたのが、最初であった。

警官が訪れると、和道が一人酔っ払って、何事が罵っているだけ。

そんな事が何度か続き、すっかりお馴染みの「困ったさん」になっている。

この日は、新聞勧誘の態度が余りに悪かったので、明け方苦情の電話をかけた。

しかしあっさりと切られ、通じなくなった電話。

頭に來た和道は、木刀片手にブンブン走る配達員を取っ捕まえようとしたが、上手くいかず、それでコンビ二で新聞屋の住所を聞こうとしたのだった。

この日も一通りの検分が終わると、和道は歸された。
さすがに木刀は押収されたが。

そして、いつも警官に言われるセリフ。

「今日も仕事なんでしょ？」

そんな時、和道は決まって伏し目がちに苦笑いをする。

……オレだって自分がクズだってことくらい、分かってるんだよ。

カチャッ。

そしてこの日の夜も、勢いよくエンターキーが押されていた。
途端に罪悪感が襲ってくる。

だがこれは仕事終わりの儀式。
職場責任者の和道は、勤務表を改ざんしては給与の水増しをするようになっっていた。

……安い給料でこき使いやがって。
毎日の酒代くらい許されるだろう？

胸の奥に深い海がある。

その海の中を、さらに潜水していくダイバー。

広がるのは、もはや風景とは呼べない視界。

上を見上げると、遥か海面から誰か話し掛けてくる。

……ああ、林か。

本当は一秒たりとも、こんな場所にいたくはない。
だが生活のため、酒代のためだ。

仕事が終わりに、酒を飲み始めると眼が爛々としてくる。

和道は海面まであと一歩のところまで、来ているのだ。

食事より、酒。

……だが、酒は無責任にも、途中でオレを放り出す。

そして、和道は毎回、見てしまうのだ。

情性も及ばず、再び海中へと引きずり込む、恨めしいモノ。

それは他でもない、自分自身のこのカラダ。

それをカタチ創っている、積み上げてきた全ての過去。

だからいつも、自分を罵る。

自分に刃物を突き立てるのだ。

何日か前、朝になっても血が止まらず、目が覚めたらベッドは凄惨な血溜まりと化していた。

昨日は耐え切れず、ハンマーで叩きつけたい衝動片手に穂乃香に逢いに飛び出した。

和道の傷に気が付いたのも、手当てしてくれたのも、穂乃香だけ。

……オレ、このままだと事故死するかもしれない。

同日。

和道の四度目の異動が発表。

笹野の代わりに、富士川営業所の責任者として、復帰する事となった。

だがそんな事、和道にはどうでもよかった。

嵐が過ぎるのを待て。
そして……。

第九章 試練 緩流

緩流

「そういえば最近和道のヤツ、何も言つてこないな」

「元気にやってんじゃないかしら？　今、横川まで通ってるって。忙しいんでしょ」

好二と妙子は、すっかり二人暮らしが板についてきたようで、好二はすっかり炊飯係になっていた。

最初の頃はお粥にしたりと失敗はあったが、今では五穀米を独自ブレンドで炊くほど。

昔は家事など、これっぽちもやらなかった好二の変化である。

「祥太も頑張ってるみたいだな。ホントにギターで食ってけるようになるとは」

その時、ピンポンと、来客があつた。

「ちよつとお父さん、お願い」

手が離せない妙子に変わって、好二が迎えに出た。

「おー、いらっしやい」

「お邪魔しまーす」

祥太だった。

今日は久しぶりに時間をつくり、実家を訪れる約束になっていた。仕事帰りか、ギターケースを背負っている。

「母さん、ただいま」

「あら、いらっしやい。今日は餃子作ってるの」

「おー、いいねえ」

先に始めてるぞ、と妙子に言うと、好二と祥太はさっそく一杯やり始めた。

「そついえばけっこう前だけど、兄貴のイベントに呼ばれて演奏したんだよ」

「なんだ、あいつそんな事してんのか？　どんな感じだった？」

「それがさ、兄貴の関係ってよく知らないんだけど、兄貴、人望あるのね」

好二は枝豆が変な方に入りそうで、むせた。

「そうなのか？　意外だな」

それにね、と祥太はビールを飲み干した。

「兄貴、親分肌でさ。みんなに尊敬されてるみたいだった」

「何、何、どうしたって？」

妙子も一段落して、合流してきた。

「いや、祥太がな、和道のイベントに参加したらしいんだが、和道は見かけによらず親分肌で、人望厚いんだって」

「へえ！ 意外」

感心したように、妙子もビールを口にした。

好二もなんだか嬉しそうだ。

「……で、祥太は最近どうなんだ？ 恋人は出来たか？」

「ちょっとお父さん、最近そんな事ばかり」

妙子が好二に箸を手渡す。

「いやあ、やっぱり孫の顔見てから死にたいからなあ」

祥太は答えるかわり、おもむろにギターを取り出して、しなやかに、ゆったりとした曲を弾き出した。

「プロの演奏を聞きながらの晩酌か、贅沢だなあ」

祥太もいっぱしの大人、言いたくない恋の一つもあるのだろうか。

祥太は最近、好二が丸くなったように感じていた。

昔のキラキラした感じが、もうない。

毎日変わらないようできて、

好二も、

妙子も、

兄貴も、

もちろん自分も、

緩やかに、だけでも確実に変わっているんだと思った。

誰も知らないところで。

第九章 試練 覚悟

覚悟

- - - - -
- - - - -
- - - - -

……うう、気持ち悪い。

ピリリリ、ピリリリ、ピリリリ、ピリリリ、ピリリ

「……はい」

妙子だった。

「おはよう、最近ご無沙汰だけど、元気にしてる？」

これは母親の勘なのか、と和道は思った。

「……おうよ、元気だよ。うん、大丈夫だって。あとそっだ、言っ
てなかったと思うけど、今月から職場、また富士川になったから」

「じゃあ、たまには顔見せに来なさいよ」

泣きそうになった。

こんな姿、見せられる訳ない。

「……まあ、そのうちね、はい、はい」

ピリリリ、

……今度は誰！

「はい？」

「……おはようございます、高村です。えーと、申し訳ないんですけど、今日休ませてもらっても、いいですか？」

……マジかよ、今日はホント勘弁。

「……分かった。オレ出るわ」

ふらふらと着替え始めた和道。

テーブルの脇には、まだ大学の願書が置かれていた。

和道が笹野の後任として富士川に帰ってきて、二つ良かった点がある。

一つは通勤が徒歩になった事。

もう一つは、また高村と一緒に仕事が出来ようになった事だ。

だが、二人の状況はあの頃とは大きく変わっていた。

和道は今、穂乃香の勧めで精神科にかかるようになり、「うつ病」と診断されていた。

だが酒と自傷については、何を言われるか怖くて話せずにいた。

一方の高村は、不倫相手の部長の子を身籠り、一人で育てる決心を

していた。

高村は特につわりがひどいタイプらしく、こうして休む事がしばしばあった。

こうした状況は事情が事情だけに、二人だけの秘密として、お互いの急休をカバー出来るようなシフトを作っておいたのだ。

「おはようございまーす、今日は高村さん休みです」

昼頃、職場へ入った和道。

が、余りの気持ち悪さにすぐに便所へ直行、三十分ほど吐いていた。

……なんだ、この気持ち悪さ。二日酔いとは違う。

「杉原さん、今日は私たちに任せて、今日明日ゆっくり休んでください」

「……え？ 大丈夫？」

実は他のスタッフも、和道と高村の具合が悪そうな事くらい見抜いていた。

「任せてください！」

……みんな。ありがとう。

すぐに引きずられるように、タクシーで病院へ直行した和道。とてもじゃないが、座ってもいられなかった。

「こりゃ、気持ち悪くもなりますね、下が136もある。上が183」

和道は確かに、昔から血圧が高かった。

血圧の薬は飲みだしたら、一生飲むようになる。

和道は二十代にして、薬を服用するようになった。

「……先生。黙ってたんですけど」

血圧が落ち着くまでの間、先生の予約がキャンセルになった時間。

和道は言うなら今しかない、と思った。

「……オレ、腕を切っちゃうんです」

一瞬、間があった。

「ちょっと見せてもらっても構いませんか？」

和道は無言でワイシャツを脱いだ。

医師は、思わず喉から変な音を発した。

刺青と斬り傷。

……まるで、猫に引つ搔かれてボロボロになった襖だ。

医師の率直な感想だった。

「……杉原さん」

「はい」

和道は最終的に、大きな総合病院への紹介状を持たされた。

……これ以上周りに、親父に、母ちゃんに、祥太に、迷惑かけてたまるか。

それに、大学行って勉強するんだろ？

治療して生きるか、このまま死ぬか。

和道はこのシンプルな問いに、しかし、ありったけの勇気を振り絞って答えを出したのだ。

第九章 試練 根茎

根茎

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「部長、お話があります」

酒で勢いをつけた和道は、部長の携帯に直接電話をかけた。

その夜、和道は部長と喫茶店にいた。

店内は雑然としていたが、和道は意識的に声のトーンを落とした。

「部長、私に十一月いっぱい、休暇を下さい」

十一月、実は大学の入試もある。

「なーにを、そりゃ無理だよ？」

「それがダメなら、仕事辞めさせて下さい」

部長が真っ直ぐ和道を見つめる。

和道も必死に応戦した。

「何だ、何があった」

部長も話が冗談で終わらない事を、悟った。

「あの、実はですね。私、今、……抗うつ剤飲んで、やっとの状態
でやってるんです」

「そりゃ、オレもたまに飲んでるよ?」

……何を言うか。高村がお前の子を身籠ってる事も知らないくせに。

和道はそんな部長が、急に面倒くさくなってきた。

「お願いします。どうしても一度、心身共に休ませたいんです。ダメならクビにして下さい」

うーん、と部長は考え込んでしまった。

沈黙が痛い。

だがしばらくすると、デカイ顔がぬうつと寄ってきた。

「一ヶ月休んで、十二月には復帰するんだな」

「はい」

「……分かった。調整してみるよ」

和道は本当に、肩の荷が降りたような気がした。

……これでやっと、治療と受験に備えられる。

こうして手に入れた奇跡的な休暇。

何気なく体重計に乗った和道は「あつ」と声を上げた。

痩せたとは思っていたが、体重が13キロも減っている。

それなのに鉛のように重い身体。

それは座つてもいられないほどだった。

家の前のゴミ捨て場に、ゴミを捨てに行くのにも大変な精神力を必要とする。

アルコールで括約筋も弛緩するのか、排泄物をそのまま垂れ流してしまうことも一度や二度ではなかった。

そんな日常の小さな選択すら、判断力が乏しくなっていたのだ。

睡眠もままならない。

なんとか酔った勢いで寝るものの、二時間ほどで目が覚める。睡眠薬も服用するのだが、効いた感じがしない。

「今日こそは寝たい、今日こそは……」

そんな思いで酒を飲みながら、一錠、また一錠と睡眠薬をワンシート服用したら、今度は二十時間ほど眠りっぱなしになった。ふと、ODのきっかけはこういう事なのかもしれない、と和道は思うのだった。

「杉原さん。二番診察室へどうぞ」

新しい病院の初診日。

医師には、最初から全てを話そうと決めていた。

飾り気のない、独特の匂いのする待合室。

ずいぶん長いこと、長椅子に横になっていた気がする。

マスク越しではあるが、意外に若そうな医師だった。

いろいろと問診をしていく中、アルコールの話になった時。

自分の飲み代は月十三万くらい、と答えたあたりから医師の目の色

が変わった。

「それはお店とかで？」

「いや、外では飲まないようにしてます」

「お酒で失敗したな、なんて思うことはありませんか？」

ぐつと言葉を詰まらせたその瞬間、和道の目から大粒の涙がこぼれ落ちた。

「……助けて、助けて下さい」

和道の手を持って、じっと見つめる医師。

上着を脱いで見せると、乾ききらない斬り傷も潤んでいた。その刺青はまるで、和道の背負った罪の証しそのものであった。その後、頭のCTスキャン等の検査。

結果。

和道は「うつ病」「アルコール依存症」と診断されるに至った。

アルコール依存症患者、特有の手の震え。
脂肪肝。

脳もアルコールの影響で、萎縮していた。

だが和道は、精神障害者のレッテルを貼られたことよりも、むしろホッとしていた。

ドラマなんかより、自分の飲み方のほうが異常だと知っていたから。たくさん苦しい思いもしてきたから。

……これだったんだ。

自分を責める心が少しだけ、楽になったような気がした。
だがそのすぐ後に、絶望的な言葉を聞かされる事になる。

「杉原さん。今日からあなたは、お酒を断たなくてはなりません」

……は？ 嘘だろ？

「まずアルコールを抜く事が大前提です。でないと、うつ病や自傷行為にアプローチする事は出来ません」

……薬やなんかで治るもんじゃないの？

こうして和道は、アルコール依存症の専門医のところへ、再び転院する事となってしまった。

第九章 試練 明暗

明暗

和道は文字通り、悶絶していた。

酒、酒、さけ！

断酒を宣告されたあの日、家に帰つた和道は口を付ける事なく、全ての酒を台所に流した。

口を付ければ、また際限なく溺れる事は自分でも分かっていたのだ。プーンとアルコールが鼻を突く。

和道の人生、いつも裏切ることを無く傍にいてくれたのは、酒だけだった。

流れ行くアルコールを見て、和道は涙を堪えきれず、気が付くと声を上げて泣いていた。

……これからは、ずっと独り。

和道がまず断酒を始めて、最初に困ったのが時間の使い方だった。

「一日」って長過ぎるよ。五、六時間で充分だ！

何をしていいのか、何をすべきなのか分からない。

米を炊いてる間は何をすればいい？

テレビを見ながらする事は何？

それを教えてくれなかった医師を、和道は恨んだ。

そのうちに、自分でもびっくりするくらい手が震えるようになった。
それとも回らない。

あり得ない声や歌が聞こえてくる。

「おい誰だ！ どこだ、出て来い言つとろうが！」

和道は歌声が聞こえないように、郵便受けや通気孔、窓や換気扇、
至るところをガムテープで塞いだ。

だがそれでも、聞こえてくる声、声、歌。

……怖い、こんなだったら、酒飲んで死んだほうがマシだ！

アルコール依存症の離脱症状について、小冊子を見ながら医師と勉強していた和道だったが、こんなに恐ろしいとは思っていなかった。

……あの時、「治療」じゃなくて、「死ぬ」を選択した方が楽だったんじゃないのか？

……いや、違う。もう家族に迷惑かけないって決めたんだ！ でも死んだ方が迷惑かけずに済む？

理性とは、混沌。

和道は部屋の隅で丸くなり、まるで禅問答のように繰り返すのだった。

こんな状態で、入試当日を迎えた和道。

昨夜は一睡も出来なかった。

受験するのは、この一校のみ。

今の自分にとって「不合格」とは、まさにこのまま廃人になる事と一緒に。

……生きる希望が欲しい。

だがそんな和道の一番の心配事は、朝出血が止まっているか、だった。

抗うつ剤を普段の倍ほど服用し、途中コンビニで鉛筆と消しゴムを買った。

和道は遅刻ギリギリ、試験会場に着いた。

緊張で胃が痛む。

社会人入試は、小論文と面接。

小論文は時間が足りず、無理やり結論にこじつけた。

面接では、穂乃香の家庭を見て自分が感じた、医療と患者との隔たりについて述べた。

和道は不安だった面接より、小論文が心配だった。

そして十日後。

「あと十分か」

…… ああ、胸がバクバクする。

発表が近づくにつれ、和道は堪らなく不安になった。

一人、家のパソコンの前で待つ。

直接見に行くほどの勇気と元気を、和道は持ち合わせていなかった。

そして、発表の時間。

学校のHPにアクセスする。

まだだ。

カチツと更新。

まだ。

更新。

…… 見るの、怖い。

マウスを持つ手が震える。

来た！

慎重に受験番号を確かめる。

願いと恐怖の交錯。

そろそろこの当たり。

何度か見直した。

…… ない。

和道は、そこに絶望を見た。
これから何を求めて生きれば……。

ん？

よく見ると、頭文字のアルファベットが違う。
和道が受験した学科の合否は、まだアップされていなかったのだ。

……今度こそ。

不思議な事にその時、願いも恐怖も、和道は持ってはいなかった。

……あつた。

もう一度確かめる。
確かに。

……確かに。

……やった、やったよ！

和道は気付けば、わんわんと泣いていた。

本当に、暗闇の中に一筋の光を見たような気がしたのだ。

「嬉し泣き」という言葉がある。

……ホントに、嬉しくて泣く事ってあるんだ！
涙の温度が違う。

その夜、和道は実家へ電話をかけた。

そして両親に初めて、大学生になる事を告げたのだった。

第九章 試練 明暗（後書き）

第十章・最終章・あとがき 八月三十日掲載予定

和道氏が最後に行き着いた場所とは？
次週【完結】

第十章 生きてさえいれば ありがとうの裏側（前書き）

【あらすじ】

和道はついに自らとの真っ向対決へと踏み出した。

だがそれは決して平坦な道ではなかった。

それこそが『病氣』の恐ろしさである。

絶望の淵に立たされた和道に、再起の道はあるのか？

- 完結 -

心の紐が解けた。

……それにしても。

「和道がビール飲まないなんて、初めてじゃないか？」

好二がそう言いながら美味そうに水割りを口にすることを、和道は奪い取ってやりたかった。

今日はもう帰ろうと思うのだが、身体が言う事を聞かない。椅子に座っているのも苦しい。

「……ちよつと、横になってもいいかな？」

嵐が過ぎるのを待て。

そして何事も無かったかのように振る舞え。

「なに？ 具合悪そうね、大丈夫？」

妙子は和道の異変に気付いていた。

……和道から連絡がない時は、だいたい風邪で寝込んだり、具合悪い時。最近、前みたいに顔も出さなくなっただし。

「あんたももうすぐ三十路でしょ？ 一回人間ドックでも行ってみたら？」

……ああ、もうダメだ。限界。

「じゃ、そろそろ帰るわ」

これ以上、平静を装うのはキツかった。

帰りの電車の中。

当然、席を譲ってくれる人などいる筈もなく、和道は苦しそうにドアにもたれていた。

「開くドアにご注意ください」

胸の深海に潜っていた和道は、そのまま転倒した。

恥ずかしくていったん車両を降り、ベンチで次の電車を待つ。

月明かりが、蒼い。

……いつまで、嘘を突き通せばいいんだろう。

ずっと自分を偽って生きたような気がする。

そう思うと苦しくて、堪らなく酒を飲みたくなる。

だが、今の和道の身体は、酒を飲みたくてもを飲めないカラダになっていた。

二度目の転院先で、抗酒剤を使うようになったのだ。

抗酒剤を使うと、身体はアルコールを分解できなくなる。

早い話、酒を飲むとあっという間に急性アルコール中毒のような状態になるのだ。

つまり、死ぬ事もある。

離脱症状はだいぶ良くなった和道だが、うつ症状がひどくなっている気がする。

……やっぱり、心理職は無理か。

一般的に心理職は、自分の心に余裕がないと勤まらないと言われる。クライアントにも、不必要な不安を与えてしまうだろう。

和道はまさか、自分がこんな事になるうとは思っていなかった。

……いや。

うつ病もアルコール依存症も克服できる。

克服できれば、逆に大きな財産となるはず。
今のこの体験が武器になる。

和道にとってこれは、文字通り人生を賭けた闘いそのものなのだ。

第十章 生きてさえいれば スリッパ地獄

スリッパ地獄

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「……はい、長くて三月いっぱいです。ご迷惑おかけしますが、よろしく願います」

和道は電話口に向かって、きっちり頭を下げた。

「お前、そんなに飲んだのか？ 無理させて悪かったな。分かった、あと少し頑張ってくれ」

和道の退職伺いだった。

……富士川は杉原、高村とセミリタイヤか。全く、富士川営業所は鬼門だな。

部長は自嘲ぎみに、笑った。

部長はつい先日、高村が自分の子を妊娠している事を知った。

それも出産のため三月で退職すると言われて、初めて知ったのだ。

それは別れの時でもあった。

最初からシングルマザーになる覚悟の高村。

部長はせめて認知を申し入れたが、高村はそれさえ断った。

「この子の父親も、私です」

そう言った高村の真っ直ぐな視線を、部長は受け止められなかった。

……こういう時、男は弱いよな。

どこかでホッとしている自分。

部長は、けっきょく自分は高村には釣り合わない男だったんだと悟ってしまった。

「……さて、杉原の後任を考えなきゃいかん」

部長は何かを振り払うかのように、うーん、と伸びをしてみた。

さて、和道は仕事もセミリタイヤし、週四日、五時間勤務となったのだが、精神状態は日に日に悪くなっていた。
飲酒欲求との我慢比べは、氣力を奪っていくだけ。

……あれ？ 何でここにいるんだっけ？

和道は仕事中でも、たびたびそう思う事があった。
最近では自傷さえ、する氣力もない。

週一回の通院。

酒も飲めず、夜も眠れず、繁華街を避けて夜通し彷徨う。
知らない路地が怖くて、同じルートしか歩けなくなった。

どうしても行き場に困ると、診察日でもないのに病院の待合室に、
いさせてもらっつ。

脱け殻。

「もう、半分、魂抜けかかってるよ」

寂しくそう言っても、聞いてくれる人が誰もいない、現実。

和道は昔の記憶を思い起こしていた。

織山や漆田は、今頃どうしているだろうか。

そういえば、何日前、妙子と、それから織山から電話があった。出るか迷っていたら、切れた。

……あの頃は、元気だったな。

酒があつたからだ。

学校行くのか？

ホントに通えんのか？

ああ、元気ならね。

親父たちもこんな姿見るの、イヤだろ？

酒さえ飲めれば何も問題ないのに。

酒。

酒！

酒さえあれば、すべて元通りだと思わないか？

夜中にコンビニ行って、

「お願いだからこの両手縛って下さい」

そこまでして、我慢しなきゃいけないのか？
ビニール紐持つて。

コレがまとも？

治療するって、これが治療？
どっちにしろオレは廃人じゃねえか！

ただ、一つだけ心残りは、穂乃香がいなくなった夜。
迷惑かけたことを謝ってない。

うん謝ろう謝るべきだ。

和道は何かに誘き寄せられるように、外へ出た。

長い間、これを待っていたよ、
自販機。

ガタン！

プシュッ。

あとは野となれ、山となれって、知ってるか？

ゴクッゴクッ……。

……これだよ！

おおお。

和道は感じた。
生きている鼓動を！

和道は走った。
水川穂乃香の家へ！

最後の角を回った？

目も回った。

心臓が暴れ狂う。

チャイムを押す、押す！ 早く！

抗酒剤はこの瞬間のためだけに、ある。

そのまま和道は、防御本能を失った倒れ方をした。

そしてこの日。

好二と妙子は初めて、息子の病を知ったのだった。

第十章 生きてさえいれば 届けよ、愛

届けよ、愛

- - - - -
- - - - -
- - - - -

好二と妙子は、同様に押し黙っていた。
ついに見られてしまった、本当の姿を。
最も恐れていた事態だった。

和道は何も言葉にならず、肩を震わせて泣いていた。

和道が落ち着いた翌日。

初めて和道の住む、いや棲む家に足を踏み入れた好二たちは、絶句した。

脱ぎ散らされ、踏み下された大量の衣類。

蹴破られた下駄箱や扉。

焚き火の跡のような灰皿たち。

今も捨て切れずにいる、見た事もない量のビールの空き缶、一升瓶、
ウイスキーボトル。

血液をたらふく含んでバリバリになった、ベッド。

とてもじゃない、人間らしい生活なんて想像できやしない！

「一体、何があつたの？」

「……分からない」

「仕事は？」

「何とか……」

「食事はどう……」

「妙子！」

思わず質問責めになりそうな妙子を、好二は制止した。

「……なあ、和道。どうして話してくれなかったんだ？ そんなに父さんたち、頼りないか？」

……違う、そうじゃない。

「そんな独りで溜め込むなよ。家族だろ？」

……違う、そうじゃない。

「なんなら実家に帰っ……」

「そうじゃないって」

和道は、放心をそのまま放り出すように呟いた。

「……これ以上、二人に迷惑かけられると思う？」

外ではカラスが鳴いている。

しかし絶望の沈黙は、あっけなく破られたのだ。

「……ちよつとアンタ！ 勘違いもいい加減になさいよ！！ アンタがかけてるのはね、迷惑じゃない！ 心配なのよ！！」

頼も真つ赤に激高したのは妙子だった。好二ですら、こんな妙子を見るのは初めだった。

「アンタは小さい頃から、親に心配かける子だった。それこそ、何度泣かされたか分かんないわ。でもね、アンタがいて迷惑だなんて、一っ度も思つた事ないわ」

余りの妙子の眼力に、男衆は黙り込んでしまった。

……迷惑。心配。

和道の混乱した頭脳では、よく分からなかった。

「取り敢えず今日は、中洲台のウチに一緒に帰るか？」

少し悩んだ和道だったが、幾分しつかりした口調で答えた。

「……いや、少し一人になりたい。明日、病院だし」

「分かった、ちよつと待つてろ」

そついうと好二は車に戻り、コンビニの袋をガサツと持ってきた。

「お前、どれがいい？」

「……ハンバーグ弁当？」

ほれ、と和道に弁当を渡すと、好二たちはあっさりと引き上げていった。

「さっきは大きな声出しちゃって、ごめんなさい」

妙子が助手席から謝った。

すると思慮深げに、好二は返した。

「いや、それはいいんだが。和道は自分の事、迷惑だと思ってたのかな？」

「……そうみたいね」

「だとしたら、」

好二は運転中にも関わらず、妙子を見つめていた。

「今までの事も、つじつまが合うような気、しないか？」

……迷惑。心配。

その夜、和道はもらった弁当を食べながら、そればかり考えていた。

迷惑をかけた。
心配をかけた。

迷惑をかけない。
心配をかけない。

……よく分からない。

だが和道は、好二たちが自分のために弁当を用意してくれていたのが、素直に嬉しかった。

……ありがとう。

心の中でそつと、呟いてみる。

……でもどうせなら、袋ごとくれば良かったのに。

食べ終わって見たらゴミ袋が欲しくなったのだ。

あつ。

弁当のトレイが、ポタリと鳴った。

……三つ、確かに弁当は三つあった！

なんてことだ、親父たちは！

この家だろうが実家だろうが、こんなオレに付き添ってくれるつもりだったんだ。

和道は、やっと分かった。

今まで、自分はとんでもない誤解をしていたのか？

「迷惑」ではなく「心配」

それは、相手に必要とされている、という事。

和道は自分が、好二と妙子に必要とされ、望まれた子であった事を初めて実感したのだ。

第十章 生きてさえいれば 節目の季節

節目の季節

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「先生、二日前スリップしました。抗酒剤にやられて、ヒドい目に遇いましたよ」

和道は正直にあつた事を話した。

スリップとは、断酒をしていたアルコール依存症患者が、再び飲酒をする事である。

医師は何も言わずに、和道の話聞いていた。

「前、言っていましたよね？ どんなに長い間断酒していても、一杯の酒で依存状態に戻るって。それがよく分かりました」

急に和道が姿勢を正した。

「……先生。もう自分だけではもう、自分の命すら守れないんです。お願いします、入院治療を受けさせて下さい」

黙っていたその医師は、静かに「分かりました」と言い、受け入れ先の病院のベッドの状況を確認してくれた。

こうして和道は、三度目の転院をする事になったのである。

さて、和道もあと一週間で退社。

もう一人では到底、病氣と闘えない事を身を持って知った和道。昨日、はつきり思い出したのだ。

自分は四月から、学生として学ぶ事を。なぜ、学びたいのかを。

そのための最良の選択肢。

大学の入学式とオリエンテーションに参加して、そのまま休学、入院治療に専念する。

入学式だけは、入院日をずらしてでも参加したかった。自分には戻るべき場所がある。それをどうしても実感したかったのだ。

考え抜いた結論である。

「うん、そういう日程で行こうと思ってる」

和道は実家にも連絡を入れた。心配をかけないって、こういう事だと思ったから。

「ホントに病氣なんですかね？」

「きつと心の病だよ、心の病」

仕事納めの日。

挨拶をしている時に聞こえてきた言葉。

本人たちはもちろん冗談のつもりなのだろうが、出来れば謹んで頂きたかった。

だがさすがの和道も高村に挨拶をする時だけは、涙がこぼれそうになった。

「なんか、もみあげとか、髪伸び過ぎじゃない？ ちょっと座んなよ」

チヨキ、チヨキチヨキ……。いかにも高村らしい、饒別。

「ちよつと、動くな！」

和道も高村も、二人は努めてはしゃいでいた。瞳を潤ませながら。

「じゃあな、高村。元気な赤ちゃん産めよ」

「……おう」

こうして、和道の四年間の会社勤めは終わりを告げたのだった。

そして始まりの季節。

入院を遅らせてまで参加したかった、入学式。

「杉原和道さん」

「……ハイッ!？」

クスクスと笑い声が聞こえてきた。

和道は名前を呼ばれた時、緊張のあまりデカい声で変な返事をしてしまったのだ。

それに明らかに年上の坊主に髭という風貌。

そんな自分のギャップが堪らなく情けなかった。

正直体調はかなり悪い。

とにかく、抗うつ剤と頓服薬を無茶な飲み方してでも、入学式とオリエンテーションを乗り切ろうとしていた。

オリエンテーションは、いきなりの新入生で一泊旅行。

慣れない環境、不安が不安を呼び起こす。

和道にできること、それは倒れるまで抗うつ剤と頓服薬を喰らうことだった。

……なんで、なんでこんなことすら出来なくなった？　なんで俺はこんなに弱いんだ！　何で……

「人間なんて、そんなものだよ」

和道はハッと振り返った。

突然冷や水を浴びせられたような感覚。

誰かの他愛ない会話のワンフレーズが、和道を捕えて離さなかった。辺りを見回すと、声の主はどうやら今、通り過ぎた車イスの娘のようだ。

……俺もいつか、あんな穏やかに笑える人間になれるのだろうか？

しばしその後ろ姿を追っていた和道。

意識が朦朧とする中、気が付くと医務室のベッドの上にいた。

慌ただしいプログラムをこなし、みんなが寝静まった頃。
落ち着きを取り戻した和道は暗いロビーでひとり、タバコをふかしていた。

……人前で寝るなんて、そんな無防備な姿晒せるか。

「杉ちゃん」

向こうから顔見知りになった女の子が近づいてくる。
風呂上がりなのか、しっとりとした髪に、すっぴんを携えていた。

「向こうから、太陽真っ直ぐ登ってくるよね？」

……オレは磁石じゃあるまいし、知るか。

結局ふたりで朝焼けを見た。
その時彼女は、ぼつりと言った。

「半熟卵みたい……」

一体、大学ってどんなところなんだろう？
同級生は、ちょうど十歳下になる。

……オレがレイモンドに出入りし始めた年齢か。

なんという十年だろう。

遠回りをしたのだろうか？

……否。

全てムダじゃない、最短距離だ。
生きてさえいれば。

和道はそう信じて、必ず戻って来てやる、と朝日に誓うのだった。

第十章 生きてさえいれば 殺風景な個室

殺風景な個室

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

ドスツと親父バッグを下ろした。

「ここが今日から、オレの家になるのか……」

和道の付き添いで、妙子が病院まで送ってくれた。

「……じゃ、行ってくるから」

簡単な検査をすると、和道は殺風景な個室に通された。

ここから折子を見て大部屋に移り、集団生活の中で治療プログラムを行っていく。

起床は朝六時半。

消灯は十時。

患者による自治会もあった。

和道はまず、爪切り等の刃物類とライターを没収された。

もちろん自傷行為をさせないための配慮だ。

だが、それは和道にとっては苦痛でしかなかった。

「ラアッ！」

ゴツン、と鈍い音が響き渡る。

部屋中で一番しっかりした壁を殴りつけ、あっという間に血で汚し

た。

だがすぐに、それを巡回中の看護師に見つかってしまった和道。

……… すいません。

だがその看護師は壁よりも和道の方を気遣った。

「慣れるまで不安だと思うけど、次しなくなった時は、一回看室に来て？」

そういつて血でボロボロの和道の拳を、そつと両手で包んでくれたのだった。

……… もう夜中の一時なのに。
殴りたくてしょうがない。

和道は部屋を出て、看室を覗いて見た。
夜勤が一人だけ。

和道の看護担当の、武野だった。

コンコン。

「あの………」

「あら杉原さん、どした？」

「壁殴りたいんですけど」

和道は申し訳なさそうに話した。

「とりあえず、そこ座んなよ」

丸い回転椅子だった。

「何かあった？」

「慣れないベッド、苦手なんです……」

「うーん、それはそうですね」

「それで、殴りたい時はここ来なさいって言われて……」

「いつでも来ていいよ、見ての通り、夜勤ヒマだし」

「そんなはつきり言っちゃっていいんですか？」

そんな和道の前で、武野は急に日誌を読むふりを始めた。

……こんな下らない話でも、聞いてもらえるだけマシか。

そう、思えばまともなコミュニケーションを最近全く取れていなかったのだ。

いつも独り。

……今、オレをまともに扱ってくれる人間がどれほどいるだろうか？

真っ先に好二と妙子が思い浮かんだ。

あとは織山。

穂乃香、高村？

こんなもんか。

昔は先輩、後輩たくさんいたのに。

だが、余計な人間関係も多かった気がする。

二週間後、和道は大部屋へ移された。

「ああ、やっぱりカーテンか」

カーテン一枚だけの仕切りが、不安で不安で堪らない。
食事も食堂でみんなで食べなければならぬ。

周りからどう見られるか、不安で仕方がなかった。

こうして、和道の治療プログラムは始まったのである。

第十章 生きてさえいれば 大人の学校

大人の学校

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「杉原さん、おはようございます、抗酒剤の時間ですよ」

元気な男性の看護師がやって来た。

……うーん。

寝ぼけ眼をこすると、もう六時半を回っていた。

慌てて食堂へと向かう和道。

「おはようございます、遅れてすみません」

ようやくガチャリ、と病棟の施錠が解かれた。

治療プログラムのルールで、全員が朝の抗酒剤を飲まない、と、病棟から一歩も出られない。

まるで大人の学校だな、と和道は思った。

朝起きたら顔を洗う。

歯を磨く。

髭を剃る。

ちゃんと着替える。

風呂に入る。

洗濯をする。

こんな事から指導された。

馬鹿馬鹿しいと和道は思ったが、実際酒を飲んでいた頃は、こんな事すらままならない自分がいたのだ。

しかも同部屋には見覚えのある顔がいた。

笹野の下で働いていたところ、毎日のように酔っ払って店に乗り込んできては大騒ぎしていた、オヤジ。

あんなに軽蔑していた人間と、今では寝食を共にしている。そんな自分に心底、自己嫌悪。

……今日はシート交換の日だっけ？

和道は大部屋へ戻った。

たかがシート交換でも、手際の良さや美しさ、どうしても和道は隣人と比べてしまう。

ふと駅の動改札で、切符を裏にして入れないと周囲の目が気になる自分を思い出した。

アルコール依存症の治療プログラムは、病気についての勉強、運動、それと患者が自分の体験を語り合う、グループミーティング等がある。

和道はこのグループミーティングが苦痛だった。

入院患者は二十数名いたが、和道は最年少。

次に若い人で四十代。

……ただでさえ話すの苦痛なのに、こんなオッサンたちに何話せつ

てんだ？

和道は、すべて見透かされているようで嫌だった。

「入院生活にも慣れてきましたか？」

「……はい、何とか。前みたいな飲酒欲求は無くなった気がします」
回診の時間。

主治医の女医、柳澤が回って来た。

この時はまだ、この女医が一生忘れられない存在になろうとは思ってもみなかった。

……今日も風呂の時間か。

それだけで憂鬱な気分になる。

風呂は毎日二時間、大浴場が開放されていた。
不思議なもので、和彫りを背負った人間同士は、お互いになんとか分かる。

入院患者の中に、和道の他に三人いたのだが、暗黙の了解で入浴時間が重ならないようにしているのだった。

和道にはこんな駆け引きも、ストレスになる。

「……って感じでさ。けっこう辛いんだよね」

「そっかあ、私も最近いろいろあって」

「何？ どした？」

「……ううん、大丈夫」

毎晩こうして、ベランダで穂乃香と電話していた和道。

これだけが、唯一の楽しみだった。

第十章 生きてさえいれば 飽和ベッド

飽和ベッド

- - - - -
- - - - -
- - - - -

……あー、イライラする。

患者自治会の朝礼で、来週から会長、副会長が交代する事が告げられた。

新しい副会長は、なんと和道。

「ね、任期は一ヶ月だし杉原さん若いし、ね？ 頼みますよ」

「……分かりました」

こんな時、和道は断れるタイプではない。

和道は入院してもうすぐ一ヶ月になる。

だが、一向に他の患者と打ち解けようとしなかった。

いや、努力はした事がある。

だが最近、ある事に気付いてしまったのだ。

グループミーティングで。

「私はかれこれ、十回以上入退院繰り返してまして。今度こそ、最後にしたいと思ってます」

「私はね、家族も仕事も、ゼーんぶ失って、病院に担ぎ込まれて、

初めてこりやなんとかせにや、いかなんと思った訳ですよ」

……みんな、酒を断とうとしてる。オレだってそうだ。でも、なんだ？ この違和感は。

そうか。

そうだ。

みんな、断酒が「最終目標」なんだよ。

だがオレは違う。

少なくとも、一回を除けば、半年は飲まずにいられた。

それは何のためか？

オレはこうして、自分の意志で入院をした。

それは何のためか？

それは、うつ病と自傷の治療には「アルコールを抜く事が大前提」だったからじゃないか！

前の病院もそうだ、断酒させるだけで治療が止まってる。

オレの「最終目標」は断酒じゃないだろ？

現実にはアルコール依存症患者の中にも、様々な合併症を患っている人は多いのだが、この時の和道にはそこまで考えが及ばなかった。

それ以来、患者とも看護スタッフにも心を閉ざした和道。
その心は、どんどんと孤独感に塗り潰されていったのである。

ブーン、ブーン、ブーン……

携帯が震えていた。

……穂乃香だ。

「もしもし、こんな時間にどした？」

おかしい。

いつもは夜電話するのだが、この日は昼の二時頃だった。

「……もしもし、ん？ 和兄、あれ？ あ、……あれ」

「どうした？ ちゃんと聴いてるから。大丈夫か？」

……何かでパニック状態になってる。

電話はそのまま切れた。

かけなおすと一度は出たが、その後は出てくれない。

この頃、穂乃香も調子を悪くしていた。

この日は、飼っていた猫が、自分の大切な指輪を飲み込んだと勘違いし、それは私の愛情が足りないからだ、と錯乱していたのだ。

……穂乃香！ 電話に出てくれ！

ベッドで丸くなり、不安で涙を流す和道。
と、突然カーテンが開いた。

「……寝過ぎじゃね？」

若い女性看護師だった。

和道はその口の利き方と無神経さに、目の前が白くなるほどの怒りを覚えた。

だがそれを表現できない自分が情けなくて、ただ震えることしかできなかった。

その夜のグループミーティング。

和道はこんな同じような話を聞くのが耐えられず、途中で放棄してベッドに戻った。

携帯を見ると着信がある。

……穂乃香！

慌ててベランダに出て折り返す。

「……和兄？ あのね、今日カウンセラーの人にね、言われちゃったの」

穂乃香は泣きじゃくっていた。

「……和兄、ごめんなさい。私ね、もう、和兄とは連絡取れない」

……そりゃ、お互いにそっちの方が、良いに決まってる。

でも！

嵐が過ぎるのを待て。

そして何事も無かったかのように振る舞え。

「……分かった」

これ以上喋らせるのは、穂乃香が辛いだろうと思った。

この日さえなければ、あと二ヶ月で退院出来るはずだった。
その夜、和道は看護師たちに取り押さえられていた。

目の前の食堂の壁は、血液でベタベタになっている。
他の患者の目など、もうどうでもよかった。

これをもって、和道の退院の見通しが全く立たなくなってしまった。

戻るべき場所が、ちゃんと待っているというのに。

第十章 生きてさえいれば 果たして本当に独りか

果たして本当に独りか

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「息子は小さい時から、あまり感情を表に出さない子でした。最近分かったんですが、自分の事を『迷惑な存在』だと思っていたようなんです」

病院の面談室で、妙子は必死に女医の柳澤に訴えかけていた。

「その点については、親として至らなかった、と反省してます。ただそのせいで、あの子はずっと独りで、何か抱えたまま生きてきて、その結果が今の状態だと思うんです」

じつと慎重に話を聞いていた主治医の柳澤も、そのアプローチの必要性を感じていた。

「……アルコールの治療は絶対に必要です。ただ、その件については前例がありませんので、今しばらく検討させて下さい」

和道はあの後、治療プログラムを外され、個室に逆戻りしている。重度のうつ状態に陥っていた和道は、この数日、投薬によってほとんど寝たきり状態になっていた。

……どうしようかしら。医局長に相談するしかないわね。

柳澤は梅雨空を見上げていた。

好二と妙子は、和道の治療をアルコール中心からうつ病中心に切り替えて欲しいと、柳澤をお願いしていたのだ。

柳澤は元々、アルコール専門医ではなく、外来は一般の精神科を受け持っていた。

ゆえにアルコール病棟から精神病棟へ、和道に移すことには特に問題なかった。

ただ、それではアルコール治療が行えなくなってしまう。

「田沼医局長、ちょっとよろしいですか？」

その日の午後、柳澤はアルコール病棟医局長の田沼を、ようやく捕まえた。

「杉原さんなんです。アルコール病棟で薬物治療を続けながら、うつ病中心のケアを行ってもよろしいでしょうか？」

田沼はずり下がった眼鏡をツン、と上げた。

「プログラムには戻らない、ということかね？ 前例はないが。キミはどう思う？」

柳澤は一通りの見解を述べた。

田沼も熱心に聞いている。

「そうか。じゃあ、後は本人がどうしたいか、ですね」

「ありがとうございます」

柳澤は深々ときれいなお辞儀をした。

……なんで個室に戻ったんだっけ？

食堂で壁を殴りつけていたら、看護師たちがなだれ込んできたのは覚えてる。

だが、それから個室に移された経緯が、和道はどうしても思い出せなかった。

……もう一週間経つのか。自治会の副会長、どうなったんだろ。迷惑かけたらうな。

コンコン。

「杉原さん、入りますよ？」

看護担当の武野だった。

「今日の午後、柳澤先生と私と三人で、今後の事話し合いたいんだけど、大丈夫そう？」

「……はい」

……プログラム外れたし、強制退院、か？

鼻で笑おうとしたが学校の事を考えると、和道は絶望的に布団を被った。

第十章 生きてさえいれば アルコール依存症

アルコール依存症

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「プログラムの、どの辺が治療なのか分かりません。酒はもう半年、断ってます。正直プログラムにはもう、戻りたくないです。早く、うつや自傷をなんとかしたいんです」

和道と柳澤と武野。

最初は黙っていた和道だが、少しずつ話しているうちに、ずっと溜まっていた不満が噴き出していた。

柳澤と武野は、和道の気の済むまで話させた。

そしてひとしきり和道の話が終わった後。

「アルコール依存症はね、杉原さん。恐ろしい病気よ。どんなに長く断酒してても、グラス一杯で元の飲み狂いに戻っちゃうの。」

気がついた時にはもう、家庭からも社会からも弾かれてる。どうしてだと思っ？」

柳澤は連綿と諭すように、語り始めた。

「自分も周りも、病気だと思ってないから。酒癖、って言うように、ただの『癖』だと思っちゃうのね。人柄だと思っちゃう。」

お酒の病気、というところまず肝臓とか、肉体的なイメージが強いでしょう？

だからまず内科にかかる。

で、飲める身体にしてみらって、また飲む。

この繰り返しでなかなか気付けないの」

確かに和道も、自分は酒癖が悪いのだと言い聞かせていた部分があった。

「それと、アルコールは薬物、という認識がまだまだ浸透していない。

麻薬や覚醒剤と同じ、依存性はヘロイン並みの薬物。

だから病気だと分かっているけど、独りで止める事はまず不可能。

むしろ、どうしても家族にかけてしまう迷惑、その後悔と自責の念で、余計に飲まずにはいられなくなる」

この時和道の脳裏には、酒に狂い、樹里に逢いに行けなかった自分を責め続けた日々が蘇っていた。

「さつき、治療プログラムの意味が分からない、って言ってたよね？

ざっくり言っちゃうと、アルコール依存症の治療は、患者さんが『断酒を続けられるように支える事』なの。

いい？

さつき独りじゃ止められないって言ったよね？

それはなぜかと言うと、『飲みたいのを我慢しているだけの禁酒』だから」

和道も武野も、すっかり聞き入っていた。

同じ病棟なのに、まるで別世界のようだった。

「……つまりね。」

『生きるために飲まざるを得なかった自分』

から、

『飲まなくても生きることのできる自分』

を一人一人が模索する事。

そのために、患者さんそれぞれがどのように生きてきた結果、アルコール依存症にたどり着いたかを知る、というのは大きなヒントになるのよ」

「杉原さん」

「……あ、はい」

話が少々長い。

少し疲れた和道だった。

「だからね、あなたのうつ病とアルコール依存症は、決して別々の病気じゃないの」

「……自分がどういう生き方をしてきたか、って事ですか？」

「そう。だから治療は絶対に必要。でも、プログラムには戻らなく

ていいから」

ここでもうやく武野が口を開いた。

「やっぱり、今の杉原さんにはプログラムが負担になるかな、と。ちよつと無理してるのかなーって、前から話してたの」

「明日から、気分の快復を最優先にしましょう。うつについてもゆっくり話していきましようか？ 私が朝と夕方、杉原さんに会いに行きすから」

「……ありがとうございます」

内心、見捨てられると思い込んでいた和道は、ホツとし過ぎて涙腺が緩むのだった。

第十章 生きてさえいれば その日のために

その日のために

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

【和道氏の直筆原稿】

「こんにちは、杉原さん。気分はどうですか？」

「……午前中、となりの個室のおっさんとトラブっちゃいました」

和道は柳澤に聞かれてもいないのに、わざわざそんな事を話し出した。

「食堂に出ようと思ったら、そのおっさんが、そこ狭いじゃないですか。そこに立ってテレビ見てたんですよ。そしたらなんか、えっと、イラッとして邪魔だなと思ってわざと肩ぶつけてやっただけです」

和道は日本語がまとまってないな、と思いつつ、それでも懸命に柳澤に伝えようとしていた。

「……そしたら、怒鳴りつけてきて、アツタマきちやって、こっちもトンボ返りで引き返したんですよ。ホントは引きずり倒してやら、やろうと思ったんですけど、あ、この人足悪かったな、と思って一応謝ったんですけどね」

和道の声はヒドク震えていた。

薬の副作用で、口がうまく回らない。

だが柳澤は気にする様子もなく、和道に自由に喋るだけ喋らせ、そつと壁に寄りかかっていた。

「うーん、今飲んでる薬の中に、副作用でカツとなるのがあるんだけど、そのせいかな？」

「ホントに、そんな、薬あ、あるんですか？」

和道がぎこちなくも笑いながら、ツツコむ。

柳澤はトラブルについては、何もコメントせずに話題を変えた。

「どう？ 自伝は進んでる？」

「やっと、高校時代、に入りました」

和道は治療プログラムを外れてから、時間を持て余していた。そして柳澤と昔の事を話していた時、柳澤がこんな事を言ったのがキツカケだった。

「いろいろ経験なさったんですね。どうです？ 自伝なんか」

今思えば、明確な意図があったのかも知れないが、その日から和道は幼少に立ち返り、筆を進めていたのだ。

そこには忘れかけた思い出や、違う見方、当時の思いなどが無造作に転がっていた。

自伝を書くという事は、それらを一つずつ整理、反芻する作業だったのである。

こうした中で和道は一度、好二や妙子、そして祥太と過去の出来事を掘り返し、とことん話し合わなければ、と思った。

あまりに自分の想いを、伝えてこなかった事に気が付いたのだ。

……家族はどう思っているか知らないが、オレは一度だって人生、手を抜いた覚えはない。

親は何を想い子に接し、子はどう受け止めて親に返していたのか。

それぞれの想い、気持ちをお互いに、擦り合わせる事が大切だと思っただ。

言葉の裏に潜む、本当の想い。

想いは口にしなければ、伝わらない。

ある日、柳澤は和道に問うた。

「今あなたに一番必要なのは、何だと思う？」

答えられない和道に、柳澤はとてもシンプルな事を言った。

「それは、自分の想いを言葉にして、伝える事です」

誰もが聞いた事があり、誰が言ったのかも分からないくらい、ありふれた言葉。

でも大切な人を前にすると、つい忘れてしまふ言葉。

和道はひよつとしたら、まだ経験したことが無いのかもしれない。

だからこうして、和道は柳澤相手に練習を積んでいるのだ。

好二たちと、初めて向き合つ、その日のために。

最終章 昨日の自分に

最終章 昨日の自分に

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ピリリリ、ピリリ……

「もしもし」

「もしもし、じゃねえよ、和道。何カ月潜ってんだよ！」

織山からだった。

「あー、悪い。先月までちょっと入院しててさ」

「はい？ どうか悪いの？ 連絡くらいよこせって。あ、あとオレ、無事パパになったから」

「おおー、大地パパ、おめでとう！」

何カ月も音信不通。

それでも気にかけてくれる、友の姿があった。

退院して一ヶ月。

柳澤が毎日二回、通いつめてくれたおかげで、和道は声を震わせながらも、自分の想いを表現する事を学んだ。

確かにそれが、家族や恋人に伝わるとは限らない。

だが、伝えようとしない限り、絶対に、伝わる事はない。

この一ヶ月。

中洲台の実家では、毎週のように好二と妙子と和道、時々祥太が集まっていた。

和道が自分の口で、自分がどういう想いで生きてきたか知って欲しい、と家族に伝えたからだ。

和道と祥太の小さい頃のアルバムを手に、みんなで思い出を振り替える。

だがそれは、驚きの連続であった。

例えば、和道の家出や「法律家にだけはなんねえ」と言った事。

好二たちは、まさか和道が家計の心配をして、家に帰れないほど悩んでいたとは、思いつきもしなかった。

「法律家にだけはなんねえ」という発言は、和道にとっては八つ当たりで発したに過ぎなかった。

それくらい意味の無い一言だったが、その一言がまさか好二を泣かせるほど傷つけたとは、ゆめゆめ思っていなかった。

「こんな姿見せることになって、本当にごめん」

ある日、和道は涙ながらに上着を脱いだ。

「和道、お前……」

目をカッと見開いた好二の握り拳は、ゆっくりとほどかれると、そつと和道の頬に触れた。

好二がどつと泣き崩れ、嗚咽する。

その刺青には、大きく杉原家の家紋があしらわれていたのだ。父と子。

あの日、和道がどんな気持ちで家を出て行ったのか、そこにはその全てが集約されていた。

……分かっていたつもりが、実は全然分かってない。

不可解な過去が、強靱な土台へと変わっていくような、感覚。

こんな事を繰り返していくうちに和道は、衝動的な抑えがたい感情が和らいでいた。

それと共に、自分を傷つけなくても生きられるようになったのだ。

「……あ、ごめんバス来たから、バイバイ」

織山が何か喋っていたが、和道は強引に電話を切った。

バスという狭い空間に、しらふの和道。

ある瞬間、汗がどつと流れた。

顔も紅潮しているのが、はっきり分かる。

でもそれだけの事。

かつて接客をしていた頃、「店員の顔が赤い」なんてクレーム、あったか？

逆に動揺して、一度も顔を赤らめた事のない人っているのか？

そんなことは、大した問題じゃなかったんだよ。

自分が勝手に、問題にしてただけなんだ。

嵐が過ぎるのを待て。

そして何事も無かったかのように振る舞え。

和道は「完璧な自分」を求め過ぎていたのかもしれない。

……嵐が来たら、逃げたっていい。

逆に飛び出して、実況生中継もありだろう。

弱さは晒して、なんぼ。

それは人間の愛嬌。

だから人は、愛される。

人はひとりでは生きられないということを、身を持って知ったから。

プシュー。

バス停に到着すると、一番最後に降りた和道。

テクテクとその場所に近づくにつれ、だんだんと青臭い木々の香りがしてくる。

校門で一度立ち止まり、キャンパスを見渡してみた。

……誰か覚えててくれたら、それだけで嬉しい事なんだよ？
入学式以来だもの。

変わった形の校舎。

キャンパス内で、和道は喫煙所を見つけた。

「あーっ、杉ちゃんだー！ 退院おめでとー！！」

そう言って駆け寄ってきたのは、あの「半熟卵」の子であった。

きつとこれからも、泣いたり笑ったり、またいろんな事があるのだから。

でも、生きてさえいれば、何ひとつ無駄な経験にはならない。

そう、本当に何ひとつ。

そう思えるようになったら、昨日の和道や過去の和道たちへ、

「おまえら、ありがとう」

と伝えたくなった。

ー完ー

あとがき

あとがき

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「今日は不幸自慢をしにきた訳じゃないですよ。ただ、どうしても伝えたい事があるんです」

――2007年、杉原和道氏はまず、そうおっしゃった。

では一体、彼は何を伝えたかったのか。

この作品は「杉原和道」という、実在のアルコール依存症患者が入院中に綴った手記を、小説としてまとめたものである。

その手記に記されていたこと。

それは、平凡な日常に潜む落とし穴。

心の病気への入り口。

だんだんとアルコールに支配されていく姿。

壊れていく対人関係。

追い込まれる精神力。

そして、回復への糸口。

巡り巡ったその果てに、彼が行き着いた生き方。

私は個人的に、それはメンタルヘルス全般に通じることではないかと思うのだ。

そして、気持ちを「擦り合わせる」ことの大切さ。

身近な者同士、特に親と子の場合、「分かっている当たり前」とコミュニケーションが雑になっていることはないだろうか。

心の病気の落とし穴は、誰の目の前にもあるのだ。

そして現在。

杉原氏は、とても生き生きと心理職を目指して励んでおられる。

主治医からも

「うつ病とアルコール依存症を克服された杉原さんなら、きっと多くの方の共感を呼ぶでしょう」

と励ましを頂いたそうだ。

本稿が少しでもその一端を担えたなら、私も嬉しく、そして誇りに思う。

最後に、ここまで拙い文章にお付き合いいただき、本当にありがとうございました。

2008・4・4

織山大地

― 追記 ―

2008・5・5

加筆修正

2009・2・6

加筆修正

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5809e/>

実録アルコール依存症『嵐が過ぎるのを待て』完全版

2010年10月9日12時38分発行